

Title	財団法人前田育徳会尊経閣文庫蔵天文十五年宗訊奥書「古今和歌集聞書<古聞>」並びに校勘記：校異篇
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro) 川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro) 石神, 秀美(Ishigami, Hidemi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1988
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.23 (1988. ) ,p.243- 334
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本隆信教授退職記念論集 資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000023-0243">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000023-0243</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

財団法人 前田育徳会尊経閣文庫蔵

天文十五年  
宗訊奥書

「古今和歌集聞書〈古聞〉」並びに校勘記

校異篇

平澤五郎  
川上新郎  
石神秀美

校異篇  
凡例  
目次  
解題

凡例 校異篇

一、本校異篇に於ける底本並びに対校伝本は次の諸本である。脚欄に付記したのは各本略称である。

底本

尊経閣文庫蔵「古今和歌集聞書」(外題) 13—35—書 天文十五年宗訊自筆加証奥書本 三冊

略称 底

校本

京都大学附属図書館中院文庫蔵「古聞」(外題) 中院VI 69 「近世初」写 三冊

中

東北大学附属図書館蔵「古今抄」(外題) 丁B 124—16 「江戸前期」写 三冊

東

九州大学文学部国語学国文学研究室蔵「古今和歌集聞書」 国文<sup>置</sup>79 「江戸中期」写 三冊

九

国立公文書館内閣文庫蔵「古聞抄」(外題) 200—21 「江戸中期」写 三冊

古

国立公文書館内閣文庫蔵「延五秘抄」(外題) 200—16 「江戸後期」写 存仮名序・卷一〜十五注 三冊

延

国立国会図書館蔵「古聞」(外題) WA 16—131 「江戸初期」写 六冊

国

一、上記掲出諸本に於ける異同は、既に本文篇にて傍記した左の三種の簽、即ち(イ)・(ロ)・(ハ)の順に従い掲出した。

(イ)―(2) (1) (ロ)―\* (ハ)―\*

既に本文篇凡例に於て、各簽の種別については記すところであるが、更に校異に於ける具体的方法を誌すと、

(イ) 底本に対する所掲校本の本文叙述次第を表示するものであり、底本(1) (2)の文脈に対し、対校本文次第

が(2) (1)の叙述異同たることを意味するものである。本篇にては、序次(2) (1)と記し、当該箇所

本文を掲出し、対校本を略記した。以下、対校本略記は同じくする。

(ロ) \*簽は同じく対校諸本との間に所見する本文異同箇所であり、表示に当って、まず底本の当該本文を示し、

その許に異同本文を掲げた。且つ対校本文に於ける書写状況、即ち見消ち、傍書・補入等についてはその必要を判断される場合は再現揭示するか、或はその旨を簡略注記によって示した処とがある。

(ハ) \* 簽は底本本文に存せず、対校本文中に看取される補入本文箇所であり、前者と同じく底本当該箇所、即ち補入箇所直前の数字内本文を掲げ、「……ノ次」と表示して補入本文を揭示した。所掲本文中には、「古聞」本来の本文とは別種の補注・増注も存するが、煩を避け本簽中に一括した。

一、所掲対校本文の掲出に際しては、その異同本文は、所掲六本が全て同じくする場合は「諸本」と略記し、中本本文を以て代表した。その他は各本略称を列記又は単記したが、異同本文が複数本に共有する場合は上記対校本表の揭示次第に従い当初の伝本本文に拠ることとした。

一、本文校異は素より網羅、逐一にわたるべきものであるが、本書のごとき「聞書」の転写本という性格上、徒らなる煩雜は寧ろ避けるべく、

1 漢字と仮名、仮名遣い、朱墨の別、付訓の異同、返点・送仮名の存否等は之を省略した。

2 又、声点は全て近世転写本たるにより各本間の異同は既に復元しがたく且つ諸本間に多少の相違を散見するが完全は期しがたく誤解の惧を考え、ただ参考までに、対校諸本に多く共有するものを拾掇し揭示するにとどめた。

一、猶仮名序は所掲諸本に於て両系統が存し、本文上の異同著しく、本文篇に両系を併せ載録した。即ち底本と補篇一のそれである。底本系は国本、補篇一中本系は東・九・古・延本の四本であり、本篇も当然の事ながら両系本による校異二篇とわかれ揭示している。

以上、校異篇編集の大要であるが、本文篇凡例と併せ適宜なる御判断を願う次第である。

正篇校異

268頁

\* 1 今—合 国

\* 2 たねとして—たねとしてとは 国

\* 3 弥論—弥淪 国

\* 1 なれりけるノ次 初日 国

269頁

\* 1 根本—根本<sup>元イ</sup> 国

\* 2 なれりける—なれりけるトハ 国

\* 3 一二—一ハ二 国

\* 4 同様—同根 国

270頁

\* 1 故—<sup>かるか</sup>故<sup>ニ</sup> 国

\* 2 貫之—貫之<sup>の</sup> 国

\* 1 ありノ次 是は事也 国

271頁

\* 1 村上 傍書国

\* 2 十八字也 傍書国

\* 3 是モ十八字也 傍書国

\* 4 おこりける ミセケチ国

272頁

\* 1 地也 傍書国

\* 2 よめる—<sup>いへ</sup>よめる 国

\* 3 つちに<sup>々々</sup>しては—<sup>おこりける</sup>つちに<sup>々々</sup>しては<sup>〇</sup> 国

事<sup>〇</sup>の心わきかたかりけらしとは

\* 4 } } } 国

\* 5 地神 傍書国

\* 6 又八雲たつの哥より…但不分明  
にや ミセケチ国

\* 7 貴—遺 国

\* 8 也<sup>云</sup>—也<sup>と云</sup> 国

\* 1 すくにしてノ次 末代ノ人ノ心ニ 国

273頁

\* 1 なる—なる<sup>の</sup> 国

\* 2 つまこめは—<sup>事おほく</sup>つまこめは<sup>に</sup> 国

\* 3 いへるあり—<sup>事おほく</sup>いへる<sup>〇</sup>あり 国

\* 4 万七 あしひきの—<sup>〇</sup>われ立ぬれ  
ぬ山のしづくに 傍書国

274頁

\* 1 如此なるへし ミセケチ国

\* 2 行—<sup>歩</sup>行 国

\* 3 微塵—<sup>微</sup>嶺塵 国

\* 4 興感—興盛 国

\* 5 おほさ<sup>〇</sup>き—おほさ<sup>〇</sup>き<sup>六註</sup> 国

\* 6 ゆつりて—ゆつりて<sup>〇</sup> 国  
<sup>〇</sup>応神天皇第四也

\* 7 宇治のわかいつらこ—<sup>ウチノカイヤノ</sup>宇治のわか<sup>菟道ノ稚郎子</sup> 国

\* 8 いらつこ 国

\* 8 つき給はて—<sup>位に</sup>つき<sup>〇</sup>たまはて 国

\* 9 いさめ—<sup>申</sup>いさめ<sup>〇</sup> 国

\* 10 よろつ ミセケチ国

\* 11 心—心也 国

- ※1 心也ノ次 ひ<sup>レ</sup>ヲミトよむへし 国
- ※2 情也ノ次 ふ<sup>レ</sup>ヲむとよむへし 国
- ※3 云<sup>々</sup>ノ次 ち<sup>レ</sup>りひちきよよからむ  
ため也、凡きよよきやうによむを  
為詮 六注 国
- 275頁
- \*1 大かた—大かたの 国
- ※1 みゆノ次 十六卷ニ有 国
- 276頁
- \*1 此哥—此哥を 国
- \*2 和する—和たる 国
- \*3 其深—甚深 国
- \*4 是ヨリ六義ノ分 傍書国
- \*5 そへうた—そへうた 国
- \*6 風ハ 傍書国
- \*7 子夏 傍書国
- ※1 いへる也ノ次 一日分是迄也 国
- 277頁
- \*1 漳—欄外ニ緯ト訂正 国
- \*2 分なとせり—分なと○せり<sup>しる</sup> 国
- 278頁
- \*1 ならふる—なすらふる 国
- \*2 言失—言失と 国
- \*3 さるにとりて—さるにとりて<sup>よ</sup> 国
- \*4 碩人段—碩人詩 国
- 280頁
- \*1 よめり—よめり<sup>いへり</sup> 国
- \*1 周頌—周頌<sup>公</sup> 国
- \*2 身をたもつ—身をたつ 国
- \*3 よむ也—よむへし 国
- \*4 色につきとは ミセケチ 国
- 282頁
- 序次 (2)(1)ノ順 ことには近  
臣など也、但をき字のやうに心う  
へし、よみやうに故実あり 国
- \*1 家に—家に<sup>ハ</sup> 国
- \*2 所には—所にはトハ 国
- \*3 入月—いり月 国
- 283頁
- \*1 試事—試る事 国
- \*2 つくは山—つくは山<sup>。さくれ石おくに有</sup> 国 傍書ハ  
二行後ノさよれ石にノ注ノ旨移行  
符号
- \*3 君の代—君の代<sup>御</sup> 国
- ※1 と也ノ次 山に海の名所を対する  
は高下ト補入 国
- 284頁
- \*1 \*2 \*3 あるは 傍書国<sup>1</sup>
- \*4 草葉—草木<sup>葉</sup> 国
- 285頁
- \*1 事と—事と<sup>を</sup> 国
- \*2 あるは 傍書国<sup>々</sup>
- \*3 も ナシ 国
- \*4 興也—興あり 国
- \*5 る ナシ 国
- 286頁

- \* 1 たり—たり<sup>る</sup> 国  
 \* 2 私へト右肩注<sup>く</sup> 国  
 \* 3 性—姓 国  
 \* 1 行間ニ此迄二座 国  
 \* 2 早ノ次 歟 国  
 287頁  
 \* 1 和物有之 傍書国  
 \* 2 吉野の—吉野<sup>山の</sup> 国  
 \* 3 いへり—いへり<sup>か</sup> 国  
 \* 4 書也—書也<sup>いふイ</sup> 国  
 \* 5 赤人人丸—赤人人丸<sup>下上</sup> 国  
 \* 6 集 ナシ国  
 \* 7 秋哥—秋哥<sup>部</sup> 国  
 \* 8 あかしの—あかしの浦 国  
 \* 9 旅—旅<sup>部</sup> 国  
 \* 10 作<sup>云々</sup>—作と<sup>云々</sup> 国  
 \* 11 万六 傍書国  
 288頁  
 \* 1 定注也—定注也<sup>家卿の</sup> 国  
 \* 2 万葉—万葉<sup>集</sup> 国  
 \* 3 万葉撰は—万葉撰は<sup>集</sup> 国  
 \* 4 平城 傍書国  
 \* 5 高位等の—高位等の<sup>の人</sup> 国  
 \* 6 ある心—あるへき心 国  
 \* 7 コ、ニ一ケアクナリ 傍書国  
 289頁  
 \* 1 本とみゆ—本とみゆ<sup>す</sup> 国  
 \* 2 色を令するは 傍書国  
 \* 3 可思とそ—可思とそ<sup>慮</sup> 国  
 \* 4 たとふる—たとへる 国  
 \* 5 おほんこぎ—おほんこぎ<sup>つ</sup> 国  
 290頁  
 \* 1 あるにや—あるにや<sup>云々</sup> 国  
 \* 2 さまの—さまの 国  
 \* 3 なむ—なん<sup>り</sup> 国  
 291頁  
 \* 1 にこりても用<sup>云</sup>—にこりても<sup>可云</sup> 国  
 \* 2 ためと—ためと<sup>に</sup> 国  
 \* 3 御書の所のあつかり ミセケチ国  
 292頁  
 \* 1 春花は縁也—春花は縁<sup>ノ詞</sup>也 国  
 \* 2 撰此集事也—撰此集事也 国  
 293頁  
 \* 1 たのしみ悲み—たのしみ悲み<sup>ひ</sup> 国  
 \* 2 哥のさまを—哥のさまを<sup>も</sup> 国  
 \* 3 相具し—相具し<sup>て</sup> 国  
 \* 4 鬼神争奥 ナシ国  
 \* 1 末尾ニ以上三座トアリ 国  
 294頁  
 序次 (2) (1)ノ順 万葉ハ聖武之時撰之也、其証追而可伝之 中東九古延  
 \* 1 文明十三…宗祇禅師 ナシ延  
 \* 2 寅—賞<sup>シヤウセ</sup> 九延国  
 \* 3 盛—尤盛 中東九古延  
 \* 4 柿本大夫<sup>云</sup>—柿本大夫と<sup>云々</sup> 国

- \* 5 合躰イ 傍書国
- \* 6 延喜—延喜<sup>年ノコト也</sup>国
- \* 7 此集を撰しめ給也—此集を<sup>承り</sup>撰<sup>する</sup>しめ給ふ也 国
- \* 8 文武御宇人丸撰之也 傍書中東九
- \* 9 沌—沌<sup>〇〇</sup> 国
- \* 10 世 ナシ諸本
- \* 11 冬 ナシ東
- \* 12 太初 ナシ延
- \* 13 也 ナシ九
- \* 14 却—劫 諸本
- \* 15 太始—太初 延
- \* 16 々々 ナシ東
- \* 17 裏 ナシ国
- \* 18 中而不<sup>不<sup>スシテ</sup>中<sup>ナラ</sup>一<sup>ラ</sup></sup>中而不<sup>不<sup>スシテ</sup>中<sup>ナラ</sup>一<sup>ラ</sup></sup> 国
- \* 19 日—日 諸本
- \* 20 日—日 諸本
- \* 1 処也ノ次 又云、古者太易をさす、今者太初以来をいふへし 中東

295頁

序次

- (2) (1)の順 天地人ヲ正直ニトル、天地ハ正也、人ハ直也、此集は正直をすかたとせり 中東古
- 延此集は正直をすかたとせり……
- 天地は正也、人は直也—天地ハ正也、人ハ直也、此集ハ正直をすかたとせり、天下モ正直ニテ治<sup>ヲサマル</sup>、天地人ヲ正直ニトルヘシ、哥も正直を守也、尤哥人用心也 九
- \* 1 へし ナシ九
- \* 2 可 ナシ九
- \* 3 当信—当位 中東九延国—当意
- 古
- \* 4 清立—清直 中東九古延
- \* 5 直而不直—直<sup>不直<sup>ニシテ</sup>而</sup>而不直 国
- \* 6 也 ナシ東
- \* 7 此道以和為詮ヲ人の心の傍書トス 国

296頁

序次

- (2) (1)ノ順 2袖ひちて結し水の ひちての詞等僻案抄にみえたり、此哥朔日の心也、巻頭ニもあたるへし 中東九古延 但、此哥朔日の心也、巻頭にもあたるへく歟 ナシ延
- \* 1 用る—用る折 東
- \* 2 これ本意とす 傍書ミセケチ中
- \* 3 古今一致之理—古今一部之理 国
- \* 4 可受師説—一受師説 九
- \* 5 朔—朔<sup>元歟</sup> 中
- \* 6 あたるへく歟—あたるへし 中東九古国
- \* 7 水のさま—水のさまの 中東九古延



\* 8 よみ入たる云々—よみ入たり云々

中東九延—よみ入たりと云々 古

\* 9 光陰—光陰時節 中延

297頁

\* 1 僻案—僻案抄 国

\* 2 此心—此道カスミ 東

\* 3 春霞—春霞 中九古国

\* 4 片伝 ナン延

\* 5 霞もさたかならて 傍書ミセケチ

中

\* 6 有へからす—あるへからす云々

中東九古延

\* 7 用給ふ也—用給ふ事也 中—用

給ふ事也 東古

\* 8 理をさし置て吟味すへし—理をさ

しをきて吟味すへし 中—理を

さしをきてよく吟味すへし 東

\* 9 姿なるへし云々—すかたなるへし

と云々 諸本

\* 1 よみ人しらすノ次 此作者有口伝

云々、勅勘人云々、然入第三事殊勝

也 中東

298頁

\* 1 雪の中—雪内 中九古延—雪の

内 東国

\* 2 不用之 ナン東

\* 3 雪いまた—雪はまた 国

花密勘

\* 4 春—春 国

\* 5 僻案ニ—僻案〇ニ 抄 国

\* 6 陰居セル人ノ事也 ナン諸本

\* 7 雪と—雪も 諸本

\* 1 読へき歟云々—よむへき也云々 中

\* 2 裏 ナン中東

\* 3 心也—心あり 諸本

\* 4 云々 ナン東

\* 1 決也ノ次 以上二首は初春をよめ

る哥也 中東

300頁

\* 1 近院右大臣男、文徳御子能有—近

院右大臣男、文能御子能有 東

—近院、文徳御子能有、右大臣男

九—近院右大臣男、文徳御子

能有 国

\* 2 此哥—此哥 中—此 古延国

\* 3 吟味すへし云々—吟味すへしとそ

中東九古—吟味すへし 延

\* 4 若葉—若草 中東九古延

\* 1 此心也ノ次 深谷の雪氷の中に初

て聞之の感を思ふへし 中東九古

延 但、聞之—聞云 東—聞て

九

301頁

序次 (2)(1)ノ順 又雪は松にみ

る興也、眺望あり、春の哥はこと

にたけたかく其躰を思ふへしとそ

中東九古延

- \* 1 けふはと一けふとは 東
- \* 2 古注一古き注 中東九古延
- \* 3 僻案ニ一僻安〇ニ 国
- \* 4 火一火 国
- \* 5 天皇 ナシ諸本
- \* 1 説ありノ次 これも可然説なり  
中東

302頁

- \* 1 人のためにめくみある也一人のた  
めにみゆる也 東
- \* 2 此哥を定家卿も一此哥定家卿も  
諸本
- \* 3 必わざとと読るとは用へからず也  
一かならずわざととよめるとは用  
へからざる也 中東九延一かな  
らずわざととよめるとは用へから  
ず 古一かならずわざととよめるとは用  
へからず也 国
- \* 4 みるへしと云一見るへしと云 古

303頁

- \* 5 其さまをよく思案へしと也一その  
さまを思案へしと也 東
- \* 6 みたれつへしき一みたれつへしき  
国
- \* 7 春来て一春雨来りて 東
- \* 8 哥也一哥也云 中東九延国
- \* 9 面白と云一面白し云 中東九古  
延一面白し 国

304頁

- \* 3 行間 又 中東九古延
- \* 4 凡河内、ノ次 ヲツントヨム也  
国
- \* 1 兼輔哥也…左の、ノ左ノ如シ  
兼輔哥也△  
東三条の左ノ源常ト  
是ハ次ノ哥ノ作者ノ注  
次ノ哥ノ作者ノ注  
嵯峨源氏左大臣左大将、齊衡元年  
薨卅四  
△又説女の所へ立よる事をよめる  
左の、ノ左の、ノ左の、ノ左  
東三条の左の、ノ左の、ノ左  
ノ如シ 中東九古延  
又説、女の所へ立よる事をよめり  
云、  
左の、ノひたんとよむ也、東三条  
の左、ノ源常、嵯峨源氏、左大臣  
左大将、齊衡元年薨卅四
- \* 1 よめる也ノ次 色を思心よりいへ

るなるへし 中東九古延

\* 2 前々項参照

\* 3 人をノ前 明也 諸本

305頁

\* 1 片 ナシ 延

\* 2 定家卿僻案抄ノ事也、以下倣之

左傍書国

\* 3 事 ナシ東

\* 4 又かくさたかに……いへると也

ナシ古

\* 1 清といふ説ありノ次 しかれとも

大かたにこりて用也 中東

\* 2 片ノ次 スミタリ 中東九古

\* 3 まいりける也ノ次 かくさたかに

なんやとりはあると、久しくやと  
らて来りければ、たしかにことや  
とのありけるとうたかひひたる  
也、貫之きよて、かやうにいふ人  
は心のかわりたるにやと思ふ心あ

りて、人はいさとよめる也 中東

\* 1 九・一同上、但、思ふ心以下本行、

あるとノとナシ 古

\* 4 よめりノ次 人はいさとかこちた

る也 中東九古

306頁

\* 1 一 ナシ中

\* 2 又一又は 中東九古延

\* 3 は ナシ国

\* 4 以上第二日 卅首 ナシ延

\* 1 明也ノ次 心も詞も殊勝の哥也 云

補入、後人書入カ東

307頁

\* 1 太皇太后宮、忠仁公女一七十二ノ

次ニ本行トシテ入ル 中東古

但、次ノ九延ト同位置へ移行符号

中・一昌泰三年ノ次ニ本行トシテ

入ル 九延 但、七十二一七十一

古・一七十三 延

\* 2 崩 ナシ古

\* 3 彼母后の 撰政左大臣一忠仁公時にあへる彼

撰政太政大臣本 撰政太政大臣

母后の 中・一撰政太政大臣彼母

公の東・一撰政太政大臣彼母后の

九・一彼母后の 古延・一撰政

太政大臣 国 撰政太政大臣

\* 4 彼母后の(ミセケチ) 大臣一本ニハこゝにあり

古延 いへると云、一いへり云、 中東九

\* 5 面白云、一おもしろしと云、 国

\* 6 躰に似合たりと云、一躰にはあひ

たりと云、 東

\* 7 心也一心あり 諸本

\* 8 年に一年々 中東九古延

\* 1 給へる也ノ次 撰政太政大臣 延

\* 2 山川にノ次 ト有ヲナヲシテ入ル

小字国

308頁

\* 1 面白し云、一面白しと云、 国

- \* 2 満足せさせよの心也—満足せさせよの心也 国
- \* 3 人も ナシ東
- \* 4 心の哥—哥 中東古延国・—意<sub>コト</sub>
- 309頁
- \* 1 て—て 中九古国
- \* 2 花ゆへにこそとはれぬる—花ゆへにこそとはれぬる 中東九古延
- \* 3 亭子院めしける—亭子院めしける 中九古・—亭子院おほしめしける 国
- \* 4 いひ ナシ東
- \* 5 注—程 諸本
- \* 6 不用也—不用之 中東九古延
- \* 7 色かはるとも—色かはるとも<sub>は</sub> 国
- \* 8 いはん也—いはん<sub>為</sub>也 国
- \* 9 ちる事なくは 傍書ミセケチ中
- \* 10 寿長者多恥といへる—寿者多恥なる 国
- \* 11 といへる 中東九古延
- \* 11 に ナシ東
- 310頁
- 序次 (2) (1)ノ順<sub>私云</sub> 均垢同此字歟、所詮かんなを本としてよむべき也 諸本
- \* 1 云、 ナシ東
- \* 2 かなと 傍書中
- \* 3 イ ナシ中
- \* 4 知音の—知音などの 諸本
- \* 5 など—なんと 中東古国
- \* 6 古来風—古来風—に 中東九古延
- \* 7 或説—堯孝転伝説、或説 東
- \* 8 と ナシ中東九古延
- \* 9 よむへし<sub>云</sub>—よむへしと<sub>云</sub> 諸本
- \* 10 文字猶可尋之 ミセケチ東—ナシ九古延
- \* 11 と ナシ諸本
- \* 12 最説—最前説<sub>盛</sub> 国
- 311頁
- \* 1 待賢門内北壬生東 ナシ中
- \* 2 と ナシ諸本
- \* 3 感心の—感心を 九
- \* 4 用捨ある事也、する事也—用捨する事ある事也 中東九古延・—用捨ある事也 国
- \* 5 落ぬるも—落ぬるに 諸本
- \* 6 字也—字歟 中東九古延
- \* 7 以上第三日 卅一首 ナシ延
- 312頁
- \* 1 散行さま—散行のさま 東
- \* 2 と ナシ諸本
- \* 3 帰たる—帰る<sub>た</sub> 国
- \* 4 定家—定家卿 中東古
- 313頁
- 序次 (2) (1)ノ順 今とは色な

る花に心のうつる時をいへるな  
り、春たてはとは春になりて花の  
比とみるへし 中東九古延

\* 1 当位―当意 古

\* 2 空と―空〇と 国

\* 3 当位―当意 古

\* 4 御在位ノ間ヲ云 傍書国

\* 5 も ナシ東

\* 6 と ナシ諸本

\* 1 心也ノ次 不善なる事ニ 中東

314 頁

\* 1 哥歟 傍書古

\* 2 な―な 国

\* 3 と ナシ諸本

\* 4 な ナシ東

\* 1 光のノ次 あるましき 中東

315 頁

\* 1 説―趣 九

\* 2 陰かも、と―陰もと 東―陰か

とも 国

\* 3 より ナシ東

\* 4 はちたる―かちたる 東

\* 5 なける―なきける 諸本

\* 6 云 ナシ国

\* 7 以上第四日 廿五首―卅五首 延

\* 1 みれはノ次 うつろふ花に 中

―同上ミセケチ東

316 頁

\* 1 後蔭―俊蔭 延国

\* 2 藏人右少将―藏人右少将ハ 国

\* 3 中納言―中納言(別筆) 東

\* 4 と ナシ東

\* 5 哀なる―あはれある 中東九古延

―あはれある 国

317 頁

\* 1 小町―小野 中東

\* 2 をうな―をうな 国

318 頁

序次 (2) (1)ノ順 猿九哥也、顯

昭はこ嶋のくまといへり 中東九

古延

\* 1 なさきそ也―なさきそと也 中東

九古延

\* 2 幽玄なる哥云―幽玄なる哥云也

国

\* 3 諸兄―諸是 東

\* 4 春たちし―春立しより 諸本

319 頁

序次 (2) (1)ノ順 それをみる女

ともなり云、此事定家卿自筆の本

ニ書加へ給へるありと云 中九古

延

\* 1 緘―閉 諸本

\* 2 忘れて―忘れては 中東九古延

\* 3 二たひくるにも―二たひくる春に

も 諸本

\* 4 と ナシ延

\* 5 詞書—詞 諸本

\* 1 序次ノ項給へるありと云々ノ次

可尋之、花つみよりとあれはさる  
事あるやうにみえたり、如何  
中  
—同上、可尋之 本行東

320頁

序次 (2) (1)ノ順 光陰を思也、

たけたかく面白躰云々、春のうち

の事をふくめる、余情なり 中東

九古延

\* 1 以上第五日 ナシ延

\* 2 郭公の外少云々—郭公の哥の外少

シ云々 中九古延国—郭公の哥の

外少之云々 東

\* 3 思へる—思 中東九古延

\* 4 打はふき—うちはふき 九

\* 5 也 ナシ諸本

\* 6 打はへて—うちはへて 古

321頁

\* 1 と ナシ諸本

\* 2 也 ナシ諸本

\* 3 けり ナシ古

\* 4 万葉には……よめり ミセケチ国

\* 5 よめり—あり 古

\* 6 を ナシ中東九古延

\* 1 よめりノ次 或説、願弘寺をいふ

ともあり 中東九古延、但、合点

ナシ延 願弘寺—願弘寺 九—

万葉には元興寺とあり  
或説、願弘寺をいふともあり 国

322頁

\* 1 うとましと也—うとましきと也

東

\* 2 折也—折節也 国

\* 3 山へ—山へ 国

\* 4 五文字—五字 中東九延

\* 1 なるへしノ次 又さならすともさ

へとよむへきにや 中東九古延

\* 2 御子也ノ次。 中東九—国

(323頁 \* 1ニ対応)

323頁

\* 1 かく ナシ東

\* 1 にやノ次 国

\* 2 心と云々ノ次 感時鳥也 中東

324頁

\* 1 子規を聞て 補入国

\* 2 と ナシ諸本

\* 3 也 ナシ九

\* 4 いつくにか—いつくにも 中東九

古延

325頁

\* 1 かたへは片方也—かたへはかた

く也 諸本

\* 2 すこし ナシ東

\* 3 以上第六日 ナシ延

\* 4 古今 第四—古今和歌集第四秋

哥上 国

\* 5 夏の空—夏の天 中東九古延

\* 6 景氣—<sup>又</sup>○景氣 国

328 頁

\* 4 たのむ—たれと 東

326 頁

\* 1 取あつめて—とりあつめたて 中

\* 5 事也<sup>云</sup>—事なりと<sup>云</sup> 東国

\* 1 新古雑中 天川—<sup>レ</sup>こと<sup>レ</sup>はん紅

東九—<sup>レ</sup>とりあつめたて<sup>さ歟</sup> 古

\* 1 鳴こゑノ次 をき<sup>レ</sup>て 中—<sup>レ</sup>同

葉のはしはちるやちらすや 左傍

\* 2 に ナシ東

上本行東

書国

\* 3 哥の躰…万葉の哥にや ナシ延

\* 2 人まつノ次 <sup>といふ</sup> 中東

\* 2 ○ ナシ東古国

\* 4 と ナシ中東九古国

330 頁

\* 3 思のいと—思の緒 中東九古延

\* 5 古風—万葉古風 中東

\* 1 声に—声を 古

思のいと<sup>緒</sup> 国

\* 6 我ことく—我か如にや 中東—

\* 2 思よれる—思よれるは 中東九古

327 頁

わかことにや 国

延

\* 1 か ナシ東

\* 1 す<sup>レ</sup>しくノ次 虫の音鹿のこゑ

\* 3 以上第七日 ナシ延

\* 2 也 ナシ九

延国

\* 4 如此事をは…此鳥 ナシ国

\* 3 来ぬる—来ぬと 中東九古延

\* 2 見えず<sup>云</sup>ノ次 月にては曲なき

\* 5 鳴たる也—なきたるを 諸本

\* 4 と也 ナシ九延

にや 中東

\* 6 焮風に…あらはなる也 ナシ東

\* 5 こゑは—こゑに 中東九古延

\* 3 又ノ次 たまさかに 中—<sup>レ</sup>同上

\* 6 尤 ナシ古

ミセケチ東

\* 7 五文字—五字 中東九古延

\* 7 新古秋上高円の<sup>レ</sup>、<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>や木

329 頁

\* 1 なく折ノ次 <sup>こゑに我もなく心也</sup> 中—<sup>レ</sup>同上全文ミセケチ東

からしけふ吹ぬらし元敏 傍書国

\* 1 や ナシ東

331 頁

\* 8 さはき—さはき<sup>〇</sup> 国

\* 2 も ナシ東

序次 (2) (1)ノ順 猿丸詠也、元

\* 9 つほ—つほね 国

\* 3 虫の心—虫のこゑ 国

明比人<sup>云</sup>、是貞家哥合とあり、

不審也、時代相違す 中東九古延

332頁

(2) (1)ノ順 はるけき野へ

のさま也、一云、領する心也云々、

めにはみえぬとはいつくともなく

聞たる也 中東古延、但、めには

一めに 古

\* 1 くとぎ—きき 古

\* 2 とよみ—とよみ 。清也 国

\* 3 花も—花も 萩歟 国

\* 4 うらひれ—うらふれ 中東九古延

\* 5 めに—めには 中東九古延

\* 6 咲たる也—さきたるを 諸本

※ 1 序次時代相違すノ次へき歟、此

集ニては是貞哥合哥と心うへきに  
や云々 中東 但、べき歟本行、哥  
合哥—哥合 東

\* 2 心にやノ次 露けきをうらひれた

るとみる也 中—同上ミセケチ

東

\* 1 萩の露—秋の露 中東

\* 2 無義、ならの御門は—無義、此集 号奈良御門三アリ云々 の御門は 中古—此集…三

アリ云々 221歌注末尾ニ入ル 東—

此集…三アリ云々、「無義」ノ次

ニ本行トシテ入ル 九

\* 3 かゝる—みる 国

\* 4 女郎—女郎花 九

\* 5 序ニあるを—序ニある哥を 諸本

\* 6 花 ナシ諸本

\* 7 也 ナシ古

\* 8 女郎—女郎花 国

※ 1 思よれる也ノ次 尤殊勝の哥と云

中東九古延

※ 2 たとノ次 いへる也 中東九古延

—云類也 国

333頁

\* 1 〳 ナシ国

\* 2 か ナシ九

\* 3 花 ナシ諸本

\* 4 花 ナシ諸本

\* 5 て—た 諸本

\* 6 な ナシ古

\* 7 花 ナシ中東九古延

334頁

\* 1 以上第八日 ナシ延

\* 2 吟すへし云々—吟すへしと云々 諸本

\* 3 かりに ナシ古

※ 1 なれは也ノ次 訓ミチヒク シタカウ 国

335頁

\* 1 事に—ことに 中東九古国

\* 2 と ナシ諸本

\* 3 云々 ナシ東

336頁

序次 (2) (1)ノ順 神な月は時雨

といはんため也、又、神無月の時



雨もいまたふらぬ比と也 中東九

古延

\* 1 評けり云々 | 評たり云々 九

\* 2 み ナシ 中延国

\* 3 身 ナシ 九延

\* 4 異 | 異 九

\* 1 身ノ次 躰などをもおさむへしと

也 中東

\* 2 よめりノ次 感露也 中東九延

・ | 感露 古 | 露を感じて也

補入国

\* 3 読る也ノ次 又云、夜の露とは時

節に 諸本 但、合点ナシ延

337頁

\* 1 怪惜 | 悵惜 古

\* 2 以上第九日 ナシ延

\* 3 廿八首 ナシ 中東九古延 | 廿七

首 国

\* 4 も ナシ 古

\* 1 うつろふ心也ノ次 神のあたりと

てもたのまれぬ心也 中東

\* 2 白露ノ次 時雨も 諸本

338頁

\* 1 付たり | つけたる 諸本

\* 2 爰に | ことに 諸本

\* 3 読る | よめり 諸本

\* 4 云々 ナシ 東

\* 5 おなし御時……といふ詞也 ナシ

九

\* 6 なりしか | なりしか 国

\* 7 それは | なれば 東 | それは

補入国

\* 8 みんなの心也 | 見ん〇の心也 国

\* 9 白衣佳人 | 白衣佳人 九

\* 1 なるへしノ傍書 塩かまにいつか

きにけん朝なけに釣する舟は爰に

よらなん 伊物下業平の哥、河原

院にての哥也 国

339頁

\* 1 あらたに | あたに 中東九古延

\* 2 いへれば | いへれば 中東九古延

・ | いつれば 国

\* 3 の心 ナシ 古延

\* 4 愛感したる | 愛したる 中東九古

延 | 愛〇感したる 国

\* 5 法皇 | 法王 中東九古延

\* 6 仙境 | 仙院 諸本

\* 7 部也、故 | 部也故 国

\* 8 岩のかさなり | 岩のかき也 国

\* 1 様のノ次 難分 中 | 同上本行

東

340頁

序次 (2) (1)ノ順 此分押帯也 此哥をも古今

ノ字ニとる事あり、注せずと也、

され共人丸の哥也ト云注也 東

\* 1 心 | 心也 中東九古延

\* 2 録 | 録 中東九古延

\* 3 此分押帛也 肩注中東九古

\* 4 録一録 中延

\* 5 思給へり一思給へりと 中一思

給へり云々 東九古延

\* 6 哥 ナシ古

\* 7 人丸ト一人丸哥ト 諸本

\* 8 此哥一此哥 中東九古

\* 9 是もし一そもし 諸本

\* 1 落葉ノ次 をもみるへきにの心

也、落葉 諸本

\* 2 はかなくノ次 やはて 中一や

かて 東

341頁

\* 1 に ナシ古

\* 2 感あり云一感ありと云 古

\* 3 と ナシ諸本

\* 4 に ナシ古

\* 5 山へ一山へ 中九古

\* 6 山へ一山へ 中東九古

\* 7 舟とも一舟ともなと 中一舟と

もなと 東

\* 1 心ありノ次 屏風をほむる心あり

中東九古延

342頁

序次 (2) (1)ノ順 五文字まつ興

すへき心みゆ、水上の紅葉の面白

よりおこる也 302もみち葉の流さ

りせは 中東九古延

\* 1 散 ナシ国

\* 2 以上第十日 廿九首一以上第十日

中東九古一ナシ延

\* 3 ひ一ひ 国

\* 4 明也 ナシ中

\* 5 あはれふ一あはれむ 諸本

\* 6 伊勢に同名有故歎 傍書国

\* 7 秋の愁一秋の愁をもわか 中一

秋の愁をもわか 東

\* 8 はやき流一はやき浪 古

\* 1 云ノ次 山城 中東九古延

\* 2 ぬさ也ノ次 秋の手向る也 中東

\* 3 行程にノ次 よそへたる也 東

343頁

序次 (2) (1)ノ順 稲の縁なり、

此哥は当位面白きさま也、秋の田

のもの露をみる時の心也 中東九

古延

\* 1 たる一たり 中東九古延

\* 2 間断なき一間断なき 国

\* 3 もみち葉一紅葉は 九

\* 4 苦身一苦勞 諸本

\* 5 よめる一よむ 延

\* 1 無用也ノ次 我門ニの哥にはかは

る事ありと云 中東

\* 2 心也ノ次 宮こほとりの秋暮ぬる

比、紅葉まれなる心あり 中東九

古延

344頁

序次 (2) (1)ノ順 四季を六巻と

する事六義を表す、又は六根をも

古今 第六 冬哥 中東九古延

\* 1 云—云 中九

\* 2 俊成卿は—俊成卿は 此分押替也 中東九古

\* 3 水を—水を。 中九

\* 4 定家—定家卿 中東—定家 卿 国

\* 5 = ナシ古

\* 6 内にとは—うちにては 古

\* 7 六根—又は六根 諸本

\* 8 口伝—口伝 重聞 中東九古延

\* 9 彼御製—彼切紙 延

\* 10 立田川…織かくる也 ナシ古

\* 11 其謂—其謂 只 国

\* 12 貫之—貫之か 国

\* 13 義—コノ一字、上ノ 云 ノ下ニア

リ 東

\* 14 文武天皇—文武天皇 此分押替也 中東九古

但、文武天皇…みたるゝ心はな

き也ヲ317注ノ後ニ書キ、コノ位置

ニ移行符号ス 東—文武天皇…

…みたるゝ心はなき也 ナシ国

\* 15 給ひける—給へる 古

345頁 \* 1 不実—不定 中東九古延

\* 2 た— ナシ中東九古延

\* 3 以上第十一日 廿二首—以上第十

一日 中東九古—ナシ延—以

上第十一日 廿三首 国

\* 4 に ナシ中東九古延

\* 1 時也ノ次 草木 中東

346頁 \* 1 紅葉は—もみちは 和 国

\* 2 又 ナシ国

\* 3 哥—花 古

\* 4 也 ナシ古

\* 5 あ—案 諸本

347頁

\* 1 物—物は 古

\* 2 あと—詠 跡 中

\* 3 に—に す敷 国

\* 1 何事もノ次 休しはて— 中東

\* 2 打なかめてノ次 工夫したる心

也、あとはかなくとは 中東

但、とは本行 東

\* 3 事をノ次 思きえて居たる心也

中—思き—て居たる心也 東

\* 4 うす雪のノ次 心也 中東

348頁

\* 1 誰かかく—誰かよく よ敷 中東九古国

—誰よく 延

\* 2 又は ナシ国

\* 3 可 ナシ古延

\* 4 道 ナシ古

\* 5 一年—一年 期 国

\* 6 有へし—なるへし 古

\* 7 以上第十二日 廿五首—以上第十

二日 中東九古・一ナシ延・一以

上第十二日 廿六首<sup>五</sup> 国

\* 8 祝言也一祝哥也 中東古延・一祝

哥 九

\* 9 云之一いひて 諸本

\* 10 も ナシ東

349頁

\* 1 千代一干とせ 中東九古延

\* 2 云々 ナシ国

\* 3 云々一也 国

\* 4 君と一君とは 国

\* 5 思出る由也一思へるよし也 中東

九古延・一思ひ云る由也 国

\* 6 御心 ナシ国

\* 7 五文字一五字 中東古延国

\* 8 殊ニ勝と云々一ことに殊勝也云々

東

\* 9 おほゆるに一覚ゆへに 中東九延

一覚ゆるに<sup>故</sup> 国

350頁

序次 (2) (1)ノ順 小書云、或説

惟<sup>ノリマ</sup>、家本用之 但、底ノ順へ移

行符号 中東古延

(2) (1)ノ順 広也、長也、

光也 中東九古延

\* 1 と ナシ国

\* 2 と ナシ中東九古延

\* 3 伯女一伯母 中東九延国・一伯母

古

\* 4 惟一惟<sup>此分押扇也</sup> 中東九

\* 5 惟、思也、有也一惟岡也<sup>惟ハ</sup>○有也

国

\* 6 為也一鳥也 東

\* 7 伊也一評也 中東九古延

\* 8 過す一すくる 諸本

\* 9 おもほえず一おほえず 諸本

\* 10 五もし肝心也 本行、此哥ノ前ニ

アリ諸本

\* 11 おもほえて一おもほえて 九古国

\* 12 廿四首一廿四首の哥 中東九古延

\* 13 さま一さまを 諸本

\* 14 は ナシ九

\* 15 万代一万世 中東九古延

\* 1 小書云ノ次 或説 中東九古延

351頁

\* 1 新古秋中、君をそいのる身を思

ふとて 傍書国

\* 2 の ナシ中東九古延

\* 3 有へし<sup>云</sup>一あるへしと云々 諸本

\* 4 一性一姓 中東九延国

\* 5 と ナシ諸本

\* 6 八年<sup>六</sup> 国

\* 7 内侍 ナシ中東九古延

\* 8 母一女 諸本

\* 9 内侍カミ 傍書中東九古延・一内

侍也 傍書国

\* 10 は ナシ中東九古延

- \* 11 哥也云—哥也と云々 諸本
- \* 12 但…春の哥也 ナシ国
- \* 13 哀有にや云—長あるにや云 古
- 352頁
- \* 1 秀逸躰—禾の逸躰 東
- \* 2 也云—也と云々 諸本
- \* 3 なくて—なくして 諸本
- \* 4 也 ナシ古
- \* 5 くれと—くとイれて 九
- \* 6 也 ナシ諸本
- \* 7 と ナシ中東九古延
- \* 8 時 ナシ中東九古延
- \* 9 理也—理あり 中東九古延
- \* 10 名誉—名誉を 中東九古延
- \* 11 高き—たかみ 国
- \* 12 以上第十三日九月朔 廿二首—以上第十三日九月朔 中—以上第十三日九月朔 東九古—ナシ延—以上第十三日九月朔 以上廿二
- 首 国
- \* 13 別路—別行 諸本
- 353頁
- \* 1 いつか—いつとか 中九古延—
- いつかと 東
- \* 2 に ナシ諸本
- \* 3 か ナシ古
- \* 4 人は—人をは 古
- \* 5 千古—千古は 諸本
- \* 6 心はかり也—心はかりは 諸本
- \* 7 哀也云—哀也と云々 諸本
- \* 8 心にもかよふへき々々にや 傍書中
- \* 1 よりてノ次 感あり々々 中—同上
- 本行東
- 354頁
- \* 1 は ナシ古
- \* 2 おしむに—おしむ々々によて 中—
- おしむ々々によて 東
- \* 3 伊香子 傍書国
- \* 4 わくる—わく 諸本
- \* 5 心—必 諸本
- \* 6 然は—然とへハ云々 国
- \* 1 思へともノ次 身をはわかねは
- 中東
- 355頁
- 序次 (2) (1)ノ順 万葉にはあさにけとあり、草枕也とは旅といふ心也、万葉にも草枕とおほくよめり 中東九古延 但、草枕と—草枕旅と 東九古延
- \* 1 旅 ナシ中
- \* 2 は ナシ諸本
- \* 3 と ナシ諸本
- \* 1 心もノ次 す々々こし 中東
- \* 2 ありしにやノ次 あるへき々々歎云
- 中—あるへき々々歎云 東
- \* 3 思ふをノ次 世の人 中—同上
- 本行東

序次 (2) (1)ノ順 朋友の別をお

しみてしたひきたる心を謝したる  
心也、下心、心を人にまかせたる  
道の大切也、御抄ニみゆ 中東九  
古延

\* 1 別 ナシ中東九古延

\* 2 人の事人事の国

\* 3 源のさね源のさね 右近少将 中

東延・源の右近少将さね 九・  
右近少将  
源のさね 古国

\* 4 なる、時なりし時 諸本

\* 5 人 ナシ九

\* 1 二男也ノ次 よろつ堪能のよし聞  
ゆ、信公ニヤ、可決之 中東

\* 1 も ナシ古

\* 2 なりなむみえなふん 諸本

\* 3 のほりてはのほりてとは 中東

\* 4 へ ナシ古

\* 5 よめるにやよめるなるへしにや

中・よめるなるへしにや 東

\* 6 詞書一こと書 諸本

\* 7 と ナシ中東九古延

\* 8 九月二日 廿九首一九月二日 中

東九古・ナシ延・一九月二日

以上廿九首 国

\* 9 うりんゐんのみこ 傍書国

\* 1 雪ノ次 をしるしにに 中東

\* 2 夕さりつかたノ次 又云清、可然

敷云 中・一又云、清さ可然敷

云 東

\* 1 は ナシ東

\* 2 有ふる一ふりふる 中・一ふりふ

東九延・一ふりぬる 古

\* 3 也一也と云 中東九古延

\* 4 縁なくにはなれば縁なくには

なれば 諸本

\* 5 五もし心あり ナシ中東九古延

\* 6 行人の為にさしもなき一さしもな

き 中東九延 但、傍書ノ下ニイ

トアリ九・行人のためにあしけ

れともさしもなき 古・行人の

為にさしもなき 国

\* 7 事一物 諸本

\* 8 詞のにてと一詞、にてと 中九

延・一詞にてと 東・一詞もにて

と 古

\* 1 いへる也ノ次 五もし心あり 中

東九古延

\* 1 不可用云 不可用之 中九古延

国・一可用之 東

\* 2 と ナシ諸本

\* 3 思へし云 思ふへしと云 諸本

\* 4 妓艶—妖艶 諸本

哀深かるへし、可工夫云、此事

書 哀傷部ノ終ニ在之、在原滋春

\* 5 つきて—つきて 東九古国

仁明御宇也 中東九古延

哥也、( )とそおもひこし今は限

\* 6 末の別て—末のわかるゝれて 中

\* 1 也云、—也と云 諸本

りのかとしてなりけり、) 国

・—末のわかるゝれて 東

\* 2 也云、—なりと云 諸本

人々—人云、 中東九古延・—人か

\* 7 有にや—ある詞なるへしにや 中

\* 1 されはノ次 くりふねに 中東

\* 3 人中—心中を 諸本

・—ある詞なるへしにや 東

\* 2 心ノ次 面白し 中東

\* 4 心中—心中を 諸本

\* 8 と ナシ中東九古延

361頁

\* 5 也云、—也と云 中東九古延

\* 9 初文字—初の五字 諸本

序次 (2)(1)ノ順 はるく—とな

362頁 播磨

\* 10 を ナシ古

かされゆく、限なく遠もといふよ

\* 1 但馬—但馬 中東九古延

\* 11 万里の外までもすみ渡りたるに、思

り、)心を思へし 中東九古延

此ニ見播磨也と八雲ニ有可用之

ふ心—万里の境を思ふ心にて 中

\* 1 いふと云、—書云 中東九古延

但馬温泉ノ道也、弁儀

東

\* 2 おと…可尋之—在原滋春か妻の

\* 2 みこ—みこの 国

\* 12 思ふ心みかさ ナシ古

事にや、かりそめの行かひちとよ

\* 3 云、 ナシ古

\* 13 へかる ナシ諸本

みし同人歎云

\* 4 九月三日已上十五度 廿八首—文

\* 14 三笠の山を—みかさの山と 中東

おと 在原のしけはるか妻也、甲

明十三ノ九月三日聞之 以上十五

九古延

斐の受領にて彼国にてうせたり、

度 中九古・—文明十三ノ九月三

\* 1 此あい二かうのく 頭書東

かりそめの行かひちとそとよみし

日聞之 已上十五度 東—文明

360頁

人云、可尋之云、道中云、 中東

十三ノ以上十五度 延—以上廿

序次 (2)(1)ノ順 此時此処のさま

九古延・—かりそめの(初度)ニ傍

八首(改丁シテ)文明十三ノ九月

- \* 5 文明十三年十月一日 廿三首 ナシ  
延
  - \* 6 口伝あり—口伝なり 延
  - \* 7 遂—遂 逐 中国
  - \* 1 云ノ次 此卷四十七首 国
  - \* 2 此心ノ次 あたれり 中東 但、  
を用マデミセケチ東
- 363頁
- 序次 (2)(1)ノ順 籌を惟握の中  
にめくらす心なるへし、伐敵事は  
治国之政也、故実此理也 中東九  
古延 但、籌—策 東
- \* 1 心あり—心あり ない 国
  - \* 2 代—伐 中九古延国
  - \* 3 代—伐 諸本
  - \* 4 治国—治国 世イ 国
  - \* 5 籌—策 東
  - \* 6 へき ナシ諸本
  - \* 7 春—春は 諸本

- \* 8 初—物 中東九古延
  - \* 9 人をもとよむる—人をも動せさす 動せずさる  
(ミセケチ) とよ(ミセケチ)  
る 中東—人をも動せさす
  - 九古延
  - \* 10 宝珠—宝玉 ハウキョク 諸本
  - \* 1 時過ればノ次 夜もはや深くに  
中古—同上本行東延
  - \* 2 裏云ノ次 波の玉のみならず 中  
東
- 364頁
- 序次 (2)(1)ノ順 東国にかんはさ  
くらといへり ☆ 427かつけとも浪の  
なかには 諸本 但、☆ノ次「か  
つくとは底をたつぬる心也」細記  
シ諸本ノ位置ニ移行符号 国
- \* 1 也 ナシ東
  - \* 2 は—は 説イ 国
  - \* 3 沈—沈 説イ 国
  - \* 4 不定—不定也 中東九古延

- \* 5 なれても—なれてても 古
  - \* 1 行間本行 たちはな 国
- 365頁
- \* 1 不用—無用 諸本
  - \* 2 自面—目面 東
- 366頁
- \* 1 心—心は 諸本
  - \* 2 より 傍書東
  - \* 3 心明也—心は明也 中東九古延  
—心明也 国
  - \* 4 したひ—したかひ 東
  - \* 5 いくくにもなるへき事を—イツ  
クニテモ成へキ事ヲ 中東九古延  
人の ナシ東
  - \* 6
  - \* 7 たのむそ—たのむに 中東九古延
  - \* 1 分つくしノ次 経知 中—同上  
ミセケチ東
  - \* 2 おはな 傍書国
- 367頁



序次 (2)(1)ノ順 心はけつり花

の事をよめり、けつりて花に作る

物あり 中東九古延

\*1 和哥を―和哥も 諸本

\*2 二日廿四首 ナシ延

\*3 草云―草と云 古

\*4 心はけつり花の事を讀り ナシ国

\*5 裏云、…其独之理也 ミセケチ

中東九古国 但「裏云悪事を」

「名のかくるゝ事あり」ミセケチ国

\*6 咎―咎の 中東九古延―名の国

\*1 花をノ前 朝に 中延―同上ミ

セケチ東

\*2 廿四首ノ次 私考 廿四首ハ自是

末此卷終迄ノ数也、是迄ハ廿三首

朔日ニ講儀之由端ニ書付有之 国

\*3 しのふ草 傍書国

\*4 みねのノ次 雲にや、 中東九

古延

368頁

序次 (2)(1)ノ順 片―かつら

のやうなる物にや、苔は葛の類な

り、さかりこけ 東

\*1 片― ナシ延

\*2 云、 ナシ東

\*3 ひは―ひは 中東九古―ひは

延国

\*4 へつゝ―へたてゝ 古

\*5 過る也―過侍也 中東九古延

\*1 河にありノ次 蓼の類云々 中東

369頁

序次 (2)(1)ノ順 いかゝさき 河

内国云々、47かちにあたる浪のし

つくを… 九古

\*1 唐琴の国―唐琴、 国 諸本

\*2 たとへ―たとへ 国

\*3 は ナシ古

\*4 あかす―あはす 東

\*5 あかす―あはす 東

\*6 すみなかし―すみなかし 国

\*1 なし なつめ くるみ 傍書国

\*2 からこと 傍書国

\*3 いかゝさき 傍書国

\*4 からさき 傍書国

\*5 かみやかは 傍書国

\*6 よとかは 傍書国

\*7 かたの 傍書国

370頁

\*1 などの―なとにの 中東九延

\*2 と ナシ諸本

\*3 僧正―僧正 国

\*4 本 ナシ古

\*5 或説 本行諸本

\*6 後―後に 諸本

\*1 ちまき 傍書国

\*2 末尾 已上廿四首二日ト書ヘキ所

也 国

371頁

\* 1 岩ね―岩浪 諸本

\* 2 定家―定家 諸本  
心注

\* 1 文明十三年九月三日ノ次 八十三首  
☆1 ☆2

中東九古 ☆1 ☆2、ナシ延

\* 2 御抄にみえたりノ次 白浪ハ胸中

のさばくをいへり 中・同上傍書  
ミセケチ東

372頁

\* 1 ほのか―〇ほのか 国  
一ニの句は

\* 2 素伝説―素伝料簡説 中延・素

伝相伝説 東・素伝相伝説 九

古

373頁

序次 (2) (1)ノ順 夕の空に物思

ふさま也、雲などにも思あるへし、

又雲のはたてにとはみたれたる心

あり、天津空なる人をとほをよひ

なき人を思也 中東九古延

\* 1 万の事―つくる、よろつの事 古

・―よろつの事 延国

\* 2 縁―縁〇 国

\* 3 人丸哥拾遺恋、音にのみやは聞

わたるへき 左傍書国

\* 4 心うへし―心付へし 東

\* 5 歎したる―歎したる 国  
く思ひ

\* 6 夜は ナシ中東

\* 7 昼は尽日―昼は昼 東

\* 1 けちかき事也ノ次 しかれとも猶

中・同上補入ミセケチ東

374頁

\* 1 き―き 国

\* 2 たてしと也―たてしとの心也 中

東

375頁

\* 1 四日 廿八首―四日 中東九古・

―ナシ延・―以上廿九 八首 四日 九月

国

\* 2 勘云、……こひんと也―何の花と

もきこえず、此花は思草の事也、

りんたう也、密勘にくはし、序哥

也、心はあふ事はなくて色にいて

ゝやこひんと也、勘云、秋のゝの

さかり過、心ほそけなる長月の霜

に、尾花斗残たるころ、りうたん

の花やかに開出たるを、尾花にま

しりさく花とは、紫のゆかりを思

へるにや 中東九古延 但、密勘

にくはし―密勘にくはし 東・

ナシ九古延 開出たる―一再出た

る 東

\* 3 思―思も 諸本

\* 4 よて―こそ 東

376頁

\* 1 何そとは詞也―何そと云詞也 中

東九古延・―何そとは詞也 国

\* 2 へし―へしと 国

- ※1 はかなきノ次 かるへき 補入ミ  
セケチ東
- 377頁
- \*1 心 ナシ国
- 378頁
- \*1 たてゝたゝて 中九古延国  
たえて 東
- \*2 又―又― 中九古―又し 延  
・―又云 国
- \*3 誰にかたらむ―誰にかたらん国
- \*4 なゝむ―ならん 中東九
- \*5 はかなき―なかなき 東
- \*6 まよふ―きよふ 延  
本ノ
- \*7 五日 廿九首―五日 中東九古  
―ナシ延
- ※1 思絶てノ次 心みん 中―心  
(ミセケチ) 〇見ん
- ※2 こむ世にもとはノ次 我身きえて  
中―同文補入ミセケチ東
- ※3 有にかなへりノ次 夢にも見ぬ也  
国
- 379頁
- \*1 涙の川ノ次 のうへ 中東
- 380頁
- \*1 思のさま也 傍書中東
- \*2 夜昼―昼夜 諸本
- \*3 青蛾といふ虫也 傍書国
- \*1 いさゝかもなきノ次 心ありと  
云事落敷
- \*2 よせぬ也ノ次 鶏幣<sup>ニラ</sup>付テ 放事四  
境祭云六注 国
- 381頁
- \*1 哀ふかき哥云―あはれふかき哥  
也云 諸本
- \*2 焮の ナシ国
- \*3 上を―うへに 東
- \*4 六日 廿六首―六日 中東九古  
―ナシ延
- 382頁
- \*1 感―さかり 諸本
- \*2 六条有房―六条内府有房 国
- ※1 の給けりとなんノ次 人丸<sup>ノ</sup>身<sup>ニ</sup>寒  
人丸<sup>ノ</sup>身<sup>ニ</sup>吹なへにふりにし人の夢に見えつゝ  
く秋のさよ風哥ヲ思けるにや云々
- 国
- \*2 下御霊ノ次 をいへり 中東
- 383頁
- \*1 身―勞 諸本
- \*2 我はかひなき思ひの ナシ諸本
- \*1 物思ふ折節ノ前 螢の思はたのむ  
かたもあるにや 中東
- \*2 察するにノ次 我はかひなき思の  
み 諸本
- 384頁
- \*1 也―や 中東九古国
- \*2 心 ナシ諸本
- 385頁
- 序次 (2) (1)ノ順 秋の夜のと書

- る本あり、心かはるへし、殊の田可  
然にや、為明卿筆、夜とあり 諸本
- \* 1 又一説也 傍書国
- \* 2 七日 卅二首一七日 中東九古・  
一ナシ延
- \* 1 偽の涙ならはノ次 あらはれてこ  
思ふ人(ミセケチ) 中東  
そみせめの心也
- \* 2 又云ノ次 ほれくしく成て 中  
東
- \* 3 為明卿筆夜とありノ次 秋の夜と  
いひて猶感有へきともいへり 国
- 386頁
- \* 1 にほひに―にほひと 諸本
- \* 2 詠へし云 詠へしと云 諸本
- \* 3 イ給―イ片 諸本
- \* 4 をぎ初て ナシ諸本
- \* 5 非 ナシ東
- \* 1 我恋はノ次 切なる 中東
- 387頁
- \* 1 こもれりノ次 哀ふかく思ひいれ  
たる哥にや 国
- 388頁
- \* 1 ける―けり 多本 国
- \* 2 絶たる―たえたる 中・うとき  
うとき(ミセケチ) 国
- 東
- \* 3 心あり―心也 国
- \* 1 もえ出るノ次 さま也 中・同上  
ミセケチ東
- \* 2 いこそノ次 ねられね 中・同上  
本行東
- \* 3 心也ノ次 歎く心切なるへし 中  
・―同上本行東延
- 389頁
- \* 1 八日 卅二首一八日 中東九古・  
一ナシ延・一八日 卅三 国
- \* 1 心なしノ次 長雨ソヘテヨメリ、  
六注 国
- 390頁
- \* 1 事―事も 国
- \* 2 右の三首―三首 古・一右の二首  
国
- \* 3 可尋云 可尋と云 諸本
- 391頁
- \* 1 哥一首、―哥一首 国  
○よみ出たらん此世の思出  
に侍へしとの給けるとそ
- \* 2 うかるへきにとなりイ 傍書国
- 392頁
- \* 1 心 ナシ東
- \* 2 後―後撰 中九延国・一ナシ古
- \* 3 嗟―咲 東古延・一嘆 九
- \* 4 とも―ともは 国
- \* 1 あらはるゝ事をノ次 月にたとへ  
たる也 中東
- \* 2 又云ノ右肩ニ 今案 中九・同上  
ミセケチ東
- 393頁
- 序次 (2) (1)ノ順 638明ぬとて今

はの心……初逢恋なるへし、押紙也国経  
 朝臣 公卿なるを朝臣と書る事、  
 此集ニは丞相の外は官を書せず、  
 しからは朝臣は惣して四品ニかき  
 らすいへるとみえたり、親王すら  
 多分実名を書たり 中東九古延  
 但、押紙也 ナシ延  
 \*1 〱〱云 諸本  
 \*2 押紙也 傍書中東九古  
 \*3 かゝす―書せず 諸本  
 \*4 かきくらし―かきくらし 中東九  
 古延  
 \*1 かきくらしノ前 雨のふるとても  
 わかれずしてはかなはぬ時のさま  
 也 中東  
 \*2 躰なるへしノ次 勘ニ此注面白シ  
 中・―同上本行 東 涙も雨も  
 わかぬさま成へし 国

\*1 おき―おき 中九古国  
 \*2 寄―奇 中東九  
 \*3 也 ナシ東  
 \*4 諦―誇諦イ 東  
 \*5 仮、〱―仮に 古・―仮諦 延  
 \*6 当一念、〱―当一念と 中東・―  
 当一念々 九古延  
 395頁  
 \*1 九日 卅一首―九日 中東九古・  
 ―ナシ延・―九日 卅二―国  
 \*2 は―は和 国  
 \*3 ほの―ほに 諸本  
 \*4 の ナシ東  
 \*5 花すゝきといふも 傍書国  
 \*6 ひとり〱〱か―ひとり〱〱か 国  
 396頁  
 \*1 夜るこそ―夜とこそ 東  
 \*2 ことは―ことトは 国  
 \*1 物なればノ次 かくよめり 中東

\*1 嘆―嗟 中古・―咲 東・―嗟多ク  
 九・―嗟 国  
 \*2 迷立也―半一立也 中・―建立也  
 東九古延国  
 \*3 ん ナシ東  
 \*4 心 傍書中東  
 \*5 思ひなりたる也―思せたる也 東  
 \*1 なれるノ次 よし也 中 但、同  
 上ミセケチ東  
 \*2 歌注上欄ニ 山橋、牡丹也、紅ニテ  
 ウツクシキ花也 此説難用 国  
 \*3 心ノ次 也 中東  
 \*4 いふにノ次 歎心あり 中東  
 398頁  
 序次 (2)(1)ノ次 ことなしうとも  
 といふやうによむへし云、ことな  
 しといふとももの心也、 諸本  
 \*1 面白し云、―面白しと云、 諸本

\* 2 しらめーしるらめ 諸本  
 \* 3 読るにや云ー読るにやと云 諸本  
 \* 4 十日 卅首ー十日 中東九古・ー  
 ナシ延  
 \* 5 四 ナシ東  
 \* 6 花ハ穂也 薦也ノ次、補入国  
 399頁  
 \* 1 はちたるーはちたる也 諸本  
 \* 2 意ー意<sup>者カ</sup> 国  
 \* 3 面白し云ー面白しと云 諸本  
 \* 4 序也ー序哥也 東古  
 \* 5 いふーとふ 古  
 \* 6 と ナシ諸本  
 \* 7 面白し云ー面白しと云 諸本  
 \* 1 哥なるへしノ次 逢みる事はすくなく 中東

もしらす、ふかく思ふさま也、は  
 なはたしきハ必変する事あり、す  
 こしたのむへき心ある中なるへし  
 諸本  
 \* 1 と ナシ諸本  
 \* 2 深たる也ー深たる心也 諸本  
 \* 3 つゝ ナシ東  
 \* 4 へし云ーへしと云 諸本  
 \* 5 万葉、我宿の、告やらはこてふ  
 ににたりちりぬともよし 左傍書  
 国  
 \* 6 云ー。 東  
 \* 7 云ー。 中東九古延・ーナシ国  
 \* 1 などありノ次 六注同、奥義抄  
 国  
 \* 2 又ノ次 ○橋姫の事 補入書入国  
 401頁  
 序次 (2)(1)ノ順 700かくこひん物  
 とは我も み初し時思し行ゑのか

くありけりと也 諸本  
 \* 1 霜ー霞 東  
 \* 2 也云ー也と云 諸本  
 \* 3 みれはーみゆれば 諸本  
 \* 4 こと ナシ東  
 \* 5 も ナシ東  
 \* 6 と ナシ東  
 \* 7 に ナシ国  
 \* 8 云ー。 諸本  
 \* 9 心 ナシ国  
 \* 1 待如くノ次 いまやと君を 中東  
 402頁  
 \* 1 云ー。 諸本  
 \* 2 かれ行ーかくれ行 中東延  
 \* 3 云ー。 中東九古国・ーナシ  
 延  
 \* 4 業ー業<sup>平</sup> 国  
 \* 5 不勘ー不堪 諸本  
 \* 1 あらすノ次 かくよめるうちに涙

の心もあるへきかと云々 中東

403頁

序次 (2)(1)ノ順 心詞やさしき哥

云々、夏衣はうすくといはん序也、

蟬のなく比に縁あり 中東九古延

\* 1 うらみ—うとみ 諸本

\* 2 読る也 ナシ国

\* 3 いひしるき—いちしるき 諸本

\* 4 の ナシ中東九古

\* 5 心云々—心也云々 東

\* 6 十一日 卅七首—十一日 中東九古

古—ナシ延—十一日 卅七

国

\* 7 詞—こと 東

\* 1 我にノ次 夜かれしたる 中東

404頁

\* 1 け—け 東

\* 2 アツマツト—アツマツト 国

\* 3 ことなくなとして—ことなくなと

て 中東九古延—○<sup>ことなく</sup>なとして

国

405頁 \* 4 そこひ—そこひ<sup>イ</sup> 中東九古国

\* 1 上ハ序也 注文冒頭補入国

\* 2 いふ縁—○縁也<sup>いふの</sup> 国

\* 3 しるへに—しるへも 国

\* 4 よめる也—よる也<sup>め敷</sup> 中九—よる

也 東

\* 5 身を—身をは 東

\* 6 は ナシ東九古延

406頁

序次 (2)(1)ノ順 それかあらぬか

とは、ふるく見し人などに又逢て

たとる心也、袖ぬるゝは心つくせ

し人に逢て也 中東九古延

\* 1 崩無—たなゝし 諸本

\* 2 つみ—つ〇み<sup>う</sup> 国

\* 3 うみ—み 国

\* 4 泡とは—あわと、は 中九古延

国—あわと、は 東

\* 5 拵ふ—はらふ 諸本

\* 6 也 ナシ諸本

\* 7 は ナシ国

\* 1 恋しきことにノ次 毎也、六注

国

407頁

\* 1 と ナシ東

\* 2 姿也云々—姿也と云々 諸本

\* 3 面白し云々—面白しと云々 諸本

\* 4 未皇—未宝 中東古延—未<sup>ツマシラカナラ</sup>宝<sup>審</sup>

九—未宝 国

\* 5 便なとあれとも—たよりはたにあ

れとも 国

408頁

\* 1 十二日 卅三首—十二日 中東九古

古—ナシ延—十二日 三十二<sup>三</sup>

- \* 2 八十二首 ナシ東
- \* 3 し ナシ諸本
- \* 4 く ナシ東
- \* 1 左大臣ノ次 元経公三男 国
- 409頁
- \* 1 哀—急 中東九古国・—急<sup>本ノ</sup>延
- 410頁
- \* 1 心にや云々—心にやと云々 諸本
- \* 2 家集上 鳴のたつ、—かり枕たか  
する事そ心ならては 傍書国
- \* 3 山田のくろの哥も—<sup>秋の</sup>山田のくろ  
の哥も 国
- \* 4 押帛也 傍書中東九古
- \* 5 鳴—鳴は 諸本
- \* 1 右追聞ノ次 <sup>1</sup>コヌ夜ノ数ヲカキヲ  
クソト云、羽カキニタトフル也、  
六ノ 国
- 411頁
- \* 1 は ナシ諸本
- \* 1 人のとノ次 <sup>かむる</sup> 中
- 412頁
- \* 1 是も毎夕人をまつよし也 傍書国
- \* 2 十三日 廿六首—十三日 中東九  
古—ナシ延
- \* 3 侘て—わひつゝ 諸本
- \* 4 以下欠 延
- \* 5 哥也云々—哥也と云々 中東九古国
- 413頁
- \* 1 からす云々—からすと云々 国
- \* 2 ても云也—ても云々 中東九古国・—  
てもと云々 古
- 414頁
- \* 1 はや—はやく 中東九古国
- \* 2 又—又、—中東九古・—又云 国
- \* 3 或説 ナシ九国
- \* 4 よて—よりて 国
- \* 5 焼たるにても—焼<sup>たるものは</sup>〇にても 国
- \* 6 と ナシ中東九古国
- \* 1 人よりノ次 人より 中東九古国
- 415頁
- \* 1 たえぬと見えぬれと—たえぬ見え  
ぬと 東
- \* 2 むかしの事—むかしいひし事 中  
東九古国
- \* 3 はてむの—はてむ時の 中東九古
- \* 4 此花を—此花の 中東九古
- \* 5 十四日 廿八首—十四日 中東九  
古
- \* 1 散なはとはノ次 ちりはてゝなこ  
りもなくなりなん時 中東  
つるにノ次 程 中東
- \* 2
- 416頁
- \* 1 いとふ—云 国
- \* 2 と ナシ中東九古国
- \* 3 かく ナシ東
- \* 4 は ナシ中東九古国
- \* 1 重可受説也ノ次 一度ニハユルサ



サル心 国

同上ミセケチ東

\*1 様々ノ次 なりといへとも 中

\*2 そふるノ次 心あり 中・心ある

\*3 と也ノ次 真砂によせてかはらす

\*1 廿八首 ナシ中東九古・一十五日

東

久しからんとたのめし也、あり

\*3 此作者ノ次 伊勢物語ニハ 中東

そ、海は、海の惣名也、ありその

417頁

濱わたりなどは、越中名所也 国

\*1 我身―我身の 中東九古国

\*4 心也ノ次 六ノ 国

\*3 色に―色〇も 国

\*2 又―又、― 諸本

\*5 物也ノ次 それよりも 中東

421頁 \*1 流水不帰也―流水不帰也 国

\*3 と云―云 中九古国・一ナシ東

\*6 あへる田ノ次 の不熟なる心也

\*2 後悔不返―後悔〇不返 国

\*4 し―し 国

中東

\*3 事也―事と也 東

\*1 裏、ノ次 難義事 補入ミセケ

\*7 読リノ次 風にあへる、田のみな

\*4 へし云―へしと云 中東九古国

チ中・―本行ミセケチ東

らぬによそへたり、六ノ 国

\*5 性―姓 中東古国

418頁

419頁

\*1 ありそ海は海の惣名也、ありその

\*1 と ナシ東九

\*6 コノ一行小字書入トス 東古

濱わたりなどは越中の名所也 ナ

\*2 もよほす―をよほす 中東九古国

\*7 殊勝云―殊勝と云 中東九古国

シ国、※3ノ箇所ニ略同文アリ

\*3 然而―しかれとも 中東九古国

\*1 有けるにヤノ次 閑院、女也、六

\*2 かと―なと 中東九古国

\*4 ひきて―ひらきて 中東九古国

注 国

\*1 浜の真砂ノ前 思ふ心は 中・―

\*5 儀―儀は 中東九古国

\*2 後悔不返ノ次 之心也 中

同上ミセケチ東

\*6 なるも―なるもあり 中東九古国

422頁

\*2 浜の真砂ノ次 のことく 中・―

\*7 絶―終 中東九古国

\*1 なる―なるは 東

- \* 2 東家也 傍書国
  - \* 3 役―没 中東九古国
  - \* 4 席―厚 中東国・―原<sup>ハラニ</sup> 九古
  - \* 1 折の心ノ次 中東
  - \* 2 仁明<sup>云</sup>ノ次 用之 国
  - \* 3 文の心ノ次 をよめる 中・をよめる 東
- 423頁
- \* 1 こ ナシ 中東九古国
  - \* 2 性―姓 中東九古国
  - \* 3 も忘て過つるに 傍書中東
  - \* 1 思へしノ次 又の年人々のさまをきく心など 中東
  - \* 2 月日ノ前 人の思には 中―人の思には 東
- 424頁
- \* 1 さうしの―さうしの中九古―さうしの六注<sup>青</sup> 国
  - \* 2 は有常也 傍書国

- \* 3 も ナシ国
  - \* 4 有にや<sup>云々</sup>あるへきにや<sup>云々</sup> 国
  - \* 5 へし―へし<sup>云々</sup> 国
  - \* 6 きかけ―きかて 中東九古国
  - \* 1 たる也ノ次 或本さうし、一条禅閣同 国
  - \* 2 宿の事也ノ次 そのあたりに鳴をきよてよめる也 中東
  - \* 3 なるへしノ次 ありし世に 国
  - \* 4 男のノ次 いまた 中東
- 425頁
- \* 1 仰―臨 中東九古国
  - \* 2 廿三首―廿三首<sup>卅四</sup> 国
  - \* 3 と ナシ 中東九古国
  - \* 4 押紙也 右肩注東九古
  - \* 5 故 ナシ東
  - \* 1 天川ノ次 しつくとは陰陽之氣をいふ也 中東
- 426頁

- \* 1 歟―は 東
  - \* 2 土―土 中国
  - \* 3 か―〇 中東九古国・―ナシ古
  - \* 4 も 傍書国
  - \* 5 歟―也 国
  - \* 6 性―姓 中東九古国
  - \* 1 不審ありノ次 南松六注 国
- 427頁
- \* 1 十一月三日―十一月三月 中東・十一月三月<sup>年歟</sup> 九・十一月古
  - ・十一月三月 国
  - \* 2 陽成―陽成之 国
  - \* 3 思ふらん―思いつらん 中東九古国
  - \* 4 たり―たる 古国
  - \* 5 給はぬ―給はぬに 中東九古国
  - \* 6 心有や―心あるにや 中東九古国
  - \* 1 名乗なるへしノ次 とそおほゆると<sup>云々</sup> 或は南松と云たるあり、

猶可尋之 中東

\*2 日神ノ前 二条后藤氏なればにて

参詣あり、皇太子又天子とならせ

給へき故に 中 同上ミセケチ東

\*3 読たりノ次 これもその人と心さ

す心也 中東

\*4 たる也ノ次 くら人こかめや、六

注 国

428頁

序次 (2) (1)ノ順 誰も此理なる

事あり、御注作者の心になりて思へ

し云、心は花にとは何事とは不

可定也 中東九古 但、思へし云

一思へしと云 古

\*1 と ナシ中東九国

\*2 かたかへかりそめのかたか

のへ 中東古

\*3 を ナシ東

\*4 十に七八と云心也 傍書国

\*1 をはノ次 すて山 中

429頁

\*1 かくるノかふるノ 東

\*2 本行ノ「文徳御宇」ヲスリケシ更

ニ 文徳御宇、天安元年二月廢

之、其事秘世莫知云 若先是、

又有此事歟、遂又被廢之畢、元慶

五年正月六日薨、以述子為齋院、

母同惟喬、二年而退 傍書国

\*3 十七日 廿四首一十七日 廿四首

国

\*4 は ナシ 東

\*5 へ ナシ東

\*1 勘ニノ次 冬の 中 同上ミセケ

チ東

\*2 心にやノ次 或抄らとれと同、

国

430頁

序次 889 (2) (1)ノ順 心はいまこ

そあれとは、おとろへたる時の心

也、男山は、世にありし時の心

中東国

890 (2) (1)ノ順 なからの橋

の名たかきも古はてゝされて世間

の用にもたゝぬによそへたる也、

甚深義也云 中東九古 但、はて

ゝナシ東九古

\*1 男山は世に有し時の心一さかへし

ことノ傍書 中東・小字本行 古

\*2 栄花の事也 傍書国

\*3 降、斜同 傍書国

\*4 秀心 傍書国

\*5 東家也 傍書国

\*6 万七かくしてや猶や老なんみゆき

ふるおほ、 傍書国

\*7 さゝなくに一さゝならなくに 中

東九古国

\*8 押紙也 右肩注中東九古一欄上

ニ桜麻ノ、梅桜トハ何云ソト問レ

ンニハイカ、六注 国

\* 9 と ナシ 中東九古国

※ 1 古ノ次 はて、中

※ 2 徳とすノ次 国史云、嵯峨、弘

仁三年六月造長柄橋 六注 国

431頁

\* 1 かさ ナシ古

\* 2 と ナシ東

\* 3 みつ、みつ 中東古、みつ 国

\* 4 序哥、序哥也 中東九古国

\* 5 いたくもなどの心 傍書中東古

\* 6 など、などの心 国

\* 7 大伴、大伴 九

\* 8 意、空白東

\* 9 愚する、愚なる 中東九古国

\* 10 一は、所 中東九古国

※ 1 かくノ次 年といひて 中東

※ 2 よむ也ノ次 定云、水字六ノてる

濁 みつ同六注 国

※ 3 六注ニ三人の翁トノミアリ、誰ト

ハ不知ト被仰之也 国

※ 4 なるノ次 所也 中東

432頁

序次 899(2)(1)の順 此哥の事序

ニ沙汰する事あり、第二句など俗

ニちかきにや、心は哀なる哥也、

花のかけに休る心 中東九古国

901(2)(1)ノ順 さらぬ別と

は不辭之別也 901世中にさらぬ別

の 中東古

902(2)(1)ノ順 行かへりく

老ぬる云、かへる山は帰くとい

はんため也、年々かへりくつゝ

老となる事を思也 中東九古

\* 1 く歎 傍書国

\* 2 と ナシ 中東九古

\* 3 歳霜、歳霜 中、歳霜 九

星 歳霜 古

\* 4 心 ナシ国

※ 1 優也ノ次 おもしろし 中東

※ 2 903責来也ノ次 歎怨ヨシ也六注 国

433頁

\* 1 物、物心 国

\* 2 故、友 中東九古国

\* 3 十八日 廿三首、十八日 廿三首

国

\* 4 たよひ、たよひて 中東九古

国

\* 5 押帟也 右肩注中東九古

\* 6 中、中ニ 中東九古国

※ 1 惣テ山ヲ高砂ト云義ニハ、是ハアラ

サルヘシ 六注 国

434頁

\* 1 しは、しは 国

\* 2 と ナシ国

\* 3 かりそめの、かりそめの 国

※1 松なればノ次 あはれ問来てもみ  
よかしと思し也それ 中東  
々々々々々々々々々々

\*5 哥多し―哥多云 中―哥云  
東―哥多く 九―哥多之 古  
国

※1 にはノ次 あかたと、よみきるへ  
からすと云 六注 国

435頁  
\*1 長居ニ―長居 中東―長居、  
九古国

\*6 と ナシ中東九古国  
\*7 た ナシ東

438頁  
序次 939(2)(1)ノ順 かくて世を  
うち過くする事を思かへず心  
也、表裏おなし心也、うたて、う  
たよ也、いよくなどの心 中東  
九古国

\*2 心―心も 中東九古国  
\*3 定家卿筆―定家卿の筆 国

\*1 出来たりノ次 此瀧ハ 吉野云 六  
注 国

\*4 むたる―むたるを 中東九古国

437頁

943(2)(1)ノ順 いつらとは

※1 長居ノ次 すれば思へるこ 中東  
※2 明也ノ次 簀と云名にはかくれぬ  
也 国

序次 (2)(1)ノ順 おちつく所も  
なき身のさまを萍にたとへたり、  
哀ふかしとなん、余情無限云 中  
東九古

\*1 実―実ニ 東  
\*2 さても―さらても 中東九古国  
\*3 されともや 世のノ前補入国

\*3 神たい法しノ次 清濁猶可尋之  
中―同上本行東

\*1 一絵―一筆 中東九古国

\*5 伊物―伊勢 東  
\*6 事はなし―はなし 東―事はな  
しく 国

436頁  
\*1 龍門にあり―龍門ニアリ 国―  
ナシ古

\*2 十九日 廿五首―十九日 廿五首  
\*3 雑哥下 十八―雑下 中東九古  
古今十八  
雑哥下 国

\*4 御 ナシ中東九古国

\*2 龍門にあり 傍書古

\*3 雑哥下 十八―雑下 中東九古  
古今十八  
雑哥下 国

\*5 伊物―伊勢 東  
\*6 事はなし―はなし 東―事はな  
しく 国

\*3 など―など 龍門ニアリ 国

\*4 哥也云―哥也と云 中東九古国

439頁

\*4 苦身―苦勞 中九古国

\*5 ふくめる―ふるめる 東

\*1 勘―勘ニ 東

\* 2 と ナシ東

\* 3 咲ける―さき出ける 中東

\* 4 はけしき―けはしき 中東九古国

\* 5 思かへす―思かまへす 中東九古国

国

\* 1 字也ノ次 両義也 中東

\* 2 歎心也ノ次 猶あなたにとよめり

国

\* 3 心詞ノ前 外道の生死をいとはん

とて或は海に入或は巖中ニかくれ

たる事あり 中東

\* 4 いへる也ノ次 此哥の心は 中東

440頁

\* 1 廿日 廿三首―廿日 廿三首<sup>五</sup> 国

\* 2 半 傍書国

\* 3 一 ナシ東

\* 4 あしおれ―あしなれ 東

\* 1 はてぬノ次 雪のごとく消なん

中東

\* 2 読る也ノ次 たえた<sup>レ</sup>等也、六注

国

441頁

\* 1 を思ふイ 傍書国

\* 2 遣唐使―遣唐使 中東九古国

\* 3 みやち―みやち 国

\* 1 たくる也ノ次 焼ニアラス 六注

国

\* 2 小書ノ次 清樹 国

442頁

\* 1 徳―得 中東九古国

\* 2 月中の 傍書国

\* 3 ○ ナシ中東九古国

\* 4 貫之あらたむる也 傍書国

\* 5 処 ナシ東

\* 1 あらすノ次 仮ニヲ狩ニヨソヘタ

ル歟六注 国

\* 2 上欄ニ みつと書トモミツトヨミ

ナラヘリ六注 此説不可用私考 国

443頁

\* 1 り―る 中東九古国

\* 2 廿一日 廿首―廿一日廿<sup>三</sup>首 国

\* 3 之―了 中東九古国

\* 1 寺にノ次 寺の名はすみてよむと

云 中―同上本行東

444頁

序次 (2) (1)ノ順 これによりて

罰あり、利生あり、大道之時は此

義あるへからす、神も和光に及へ

からす 中東九古国

445頁

\* 1 欲―歎 国

\* 2 と―に 東

\* 3 待―待<sup>漏</sup> 国

\* 4 缺ふかる―缺ぬる 中東九古国

\* 5 以下上欄ニ注ス 中東九古 但、

如シ云―コトシト云 東―影を

いとひて走かことしと云々 本行国

\* 6 之 ナシ 中東九古国

\* 7 ○裏云 ナシ 中東九古国

\* 8 也云一也と云 中東九古国

\* 9 あへる一あへる 国

\* 10 しらぬはて一しらぬははて 中東

九古

\* 1 とはノ次 君子の 中東

\* 2 有之ノ次 裏云 中東九古国

446頁

\* 1 大 ナシ 東

\* 2 終に一終には 東

\* 3 空ニ一空 国

\* 4 仰は一あふけけは 東

\* 5 家をうりて瀕瀬の如くなるさまも 又自然の理也 ナシ 国

\* 6 中務一中務に 中東九古国

\* 1 上のノ次 哥は 中東九古国

\* 2 ならひしノ次 時の 中東

447頁

\* 1 遺一遺 中東九古国

\* 2 会见一会尺 中東九古国

\* 1 をもノ次 むつふる 中東

\* 2 さま也ノ次 夜の心あり 中東

\* 3 用也ノ次 夜はにやヨワトハヨム

ヘカラス六注 国

\* 4 ぬるにノ次 おり 中東

448頁

\* 1 次点一古点 国

\* 2 戻一戻 九

\* 3 あり一也 中東九古国

\* 4 廿二日一廿二日 廿首 国

\* 1 とはノ次 余人の 中東

\* 2 上欄ニ モ、シキ六注 国

\* 3 心ありノ次 モ、シキ六注 国

449頁

\* 1 長哥一なか哥 中東九古国

\* 2 俊頼、頭輔等説、又云一又云 俊頼 頭輔 等説

中東九古

\* 3 号 ナシ 国

\* 4 長哥一なか哥 中東九古国

\* 5 へし云一へしと云 中東九古国

\* 6 古今一古今集 国

\* 7 決一決 東

\* 8 心とす云一心とすと云 中東九古国

古国

\* 9 会见一会尺 中東九古国

\* 1 上欄ニ ○長ハ、ナカケレハ云、短ハ、ミシカケレハ云也六注 国

\* 2 古今十九〇雜躰ノ右下ニ 反哥、又かへし哥とよむへし云 六注 国

\* 3 とはにノ次 とはに六注同 国

450頁

序次(2)(1)ノ順 庭もはたれに すす雪のさまと云々、草木の葉の たるよほとなるを云と云々、千世 にといはふ 賀也ノ世の人の 上

ノ句をうけ、下の句にかけたる詞也、此たくひおほし 中東九古国

但、千世にといはふ—千世とい

はふ 東

\* 1 長哥—なかうた 中東九古国

\* 2 妻盛鳥尊—素盞鳥尊 中東九古国

\* 3 は ナシ中東九古国

\* 4 に ナシ国

\* 5 心—心も 東

\* 6 に ナシ東

\* 7 云云—云と云 中東九古国

\* 8 雜別—離別 中東九古国

\* 9 哀傷—哀傷 国

\* 1 なかうたノ次 六注同その、一 国

\* 2 さまと云ノ次 六注はたれ六注 国

451頁

\* 1 短才也 傍書国

\* 2 おほふ—おほふ 国

\* 3 事なれば ナシ東

\* 4 釵—釵 中東九古国

\* 5 事—心 中東九古国

\* 6 薬 空格東

\* 7 王—有 東

\* 8 薬 空格東

\* 1 ことにノ次 すへらぎの六注 国

\* 2 ありしノ次 六注の事なれば 中

東

\* 3 身にしてノ次 禁中の 中—同

上本行東

452頁

\* 1 尉—尉 中東九古国

\* 2 奉公也—奉公事也 国

\* 1 見えたりノ次 こゝにては、心か

はると云 六注 国

453頁

\* 1 の ナシ国

\* 1 説ありと云ノ次 六注、ハムカ

国

454頁

\* 1 の ナシ国

\* 2 心—哥 中東九古国

\* 3 五十八首廿三日 廿九首—五十八

首廿三廿九首 中—五十八首廿

三日廿九首 国

\* 4 御覽して—御らんして 国

\* 5 ぬれぬこと—ぬれぬ事 国

\* 1 心也ノ次 御抄 諸本

\* 2 心にもやノ次 雜躰なれば恋の哥

にてもあるへし 中東九古国

\* 3 諸国の詩ノ次 落書如き 中東

\* 4 などの心也ノ次 六注ニモアリ

国

455頁

\* 1 誹浦尾切…偶へ合也—誹浦尾

切・誹謗也・諧胡皆切・和也・合

也・調也・偶也偶へ合也 九



\* 2 の ナシ国

\* 3 と ナシ東九古国

\* 4 劑際敷古

\* 5 明日一明る 東

\* 6 と ナシ国

456頁

\* 1 女々しく一女々しく 国

\* 2 苦身一苦勞 中東九古国

\* 3 出て一はて々 中東九古国

\* 1 裏云ノ次 世に 中東九古国

\* 2 読リノ次 さむきニつりさせと  
云々六注 国

457頁

\* 1 に ナシ東

\* 2 恋しきか一恋しきか 中東九古国

\* 3 と ナシ東古

\* 4 ありぬなと一ありぬやなと 中東

九古国

\* 5 心すめる一心すめるす敷 中東九古

\* 1 あらはノ次 忘る事も 中東

458頁

\* 1 を ナシ国

\* 2 そほつ一そうつ 中東九古国

\* 3 そほつ一そうつ 中東九古国

\* 4 うしと一うしと也 中東九古国

\* 5 苦身一苦勞 中九古国

\* 1 女などをノ次 人の思ふ事あるを

中一人の思ふ事あるを 東

\* 2 なとかノ次 をのれも 中一同

上ミセケチ東

\* 3 きのめのとノ次 陽成院のめのと  
紀氏か 国

459頁

\* 1 事 ナシ国

\* 2 略一ろ 東

\* 3 ことならば一ことならば 中東九古

古

\* 1 鳴らんノ次 と也 中一同上本

行東

\* 2 た々ノ次 あはぬ思の 中一同

上本行東

\* 3 見はやノ次 いかにか 中東

\* 4 偽ノ次 おほかる 中東

460頁

\* 1 雖君不君臣以不可不臣之心也一雖  
君雖不君臣以不可不臣之心也以

国

\* 2 灰 傍書国

\* 1 用るにやノ次 鼻ラヒテハ道ヨリ帰  
ト云事アリ六注 国

461頁

\* 1 の ナシ国

\* 2 伊勢一伊勢か 中東九古

\* 3 人の一人の心 中東九古国

\* 4 古ぬる我身を何にくつるなといは  
宜かるへしと云々、たとへんと

也、つくと読る誹諧也一古ぬ

る我身を何ニたとへんと也、心誹

諧なり、尽るとよめる誹諧也、く

つるなといはよろしかるへしと

云 中東九古 但、ミセケチ部分

ナシ九古・一古ぬる我身を何にた

とへんと也、尽るとよめる誹諧也、

くつるといはいよろしかるへしと

云 国

\* 1 人まねノ次 のやう 中東

\* 2 可聞之ノ次 造ル也、不造フ、ツ

クルトヨメル、誹諧也、六注 国

\* 3 よき心也ノ次 六注同 国

462頁

\* 1 くそくそ 国

\* 2 ありなり 中東九古国

\* 3 難一歎 中東古国・一なけく 九

\* 4 と ナシ中東九古国

\* 5 なれるなる 中東九古国

\* 1 又云ノ次 されは 中・一同上ミ

セケチ東

\* 2 心こもるにやノ次 あしけく。

中・一あしけく。 東古・一あし

けく 九・一あしけく清也 国

\* 3 こなたかなたにノ次 われたるや

うに 中東

463頁

\* 1 心一事 中東九古国

\* 2 身の一身を 中東九

\* 3 はつるすつる 中東九古国

\* 4 はつるすつる 中東九古国

\* 5 ミタル 左傍書国

\* 6 酸一酸 古一酸 国

\* 1 風する也ノ次 そしる心也 国

\* 2 はうらと読ノ次 説あり 中東

\* 3 たとへたる也ノ次 スキ物トハ

好士也、何事ニテモ、一六注 国

\* 1 墨衣一黒衣 中東九古国

\* 2 從恋一以上廿二度一恋一ヨリ 廿四

度最初從恋一以上廿二度兩冊合卅

七度又哥数少 以後哥数不定 国

\* 3 卅二首 ナシ東・一十一月三日

卅二首 国

\* 4 与日月俱懸鬼神争奥、文選短慮非

所及云、一与日月俱懸与鬼神争奥

文選短慮非所及云、照イ 国

\* 5 嗣頭注国

\* 1 見えたりノ次 と云、中・一同上

ミセケチ東

\* 2 \* 3ノ十一月三日ノ傍注 私考十

月タルヘシ、物名十月一日二日兩

日也、其上宗祇ヨリ肖柏へ始ノ印

可文明十三年十月三日トアリ、此

465頁

\* 1 御一御 国

\* 2 少路一小路 中東九古

\* 3 小路―少路 国

\* 4 丈 ナシ諸本

\* 5 大誤也 傍書国

\* 6 太神―大神 国

\* 7 一説 右肩注中東九古

\* 8 大安殿―大安殿オウアト 中東九古・―大オ安殿アト 国タイフツラ

\* 9 殿―省 中東九古国

\* 10 たのしみ―たのしみき 国

\* 11 分見―引見 中東九古・―引見引 国

\* 12 欲―俗 中東九古国

\* 1 等ニノ次 之時(小字ミセケチ)

中東

\* 2 風俗等ノ次 此所は大内ニあり

中・―此大内ニあり 東

466頁

序次 (2) (1)ノ順 是も一郷の風

也 1073しはつ山うち出てみれば

\* 1 表は 傍書国

\* 2 欲―俗 中東九古国

\* 3 性―姓 中九古

\* 4 性―姓 中東九古

\* 5 性―姓 中東九古

万葉ニ入にや、はの字清濁両説云

中東九古

\* 1 表は 傍書国

\* 2 欲―俗 中東九古国

\* 3 性―姓 中九古

\* 4 性―姓 中東九古

\* 5 性―姓 中東九古

\* 6 我―家 中東九古国

\* 7 ぬ心也 傍書ミセケチ中東

\* 8 前―前後 国

\* 1 心也ノ次 めくみをたのむ心あり

中東

\* 2 おきてノ次 君に仕るよし也、し

かれは又 中東

467頁

\* 1 に 傍書国

\* 2 はかり―事 国

\* 3 哥―方 国

\* 4 治故―治乱 中東九古

\* 5 之―云 中東九古・―之云 国

\* 6 むろの―みむろの 中東九古国

\* 7 森々たる也―森々たる躰也 中東

九古国

\* 8 たへたる―たへたるを 中東九古

―たへたる〇 国

\* 1 一説ノ次 彼山神社の神事の時

中東九古

468頁

序次 (2) (1)ノ順 ひかけはこけ

の事也、かつらのたくひ也、清き

物也、又暁の雲を山かつらといふ

事あり 中東九古

(2) (1)ノ順 おもてにきこ

えねは顯す、此卷にては此心ニと

りなす用也 中東九古 但、とり

なす用也 ミセケチ東・―ニとり

なす ナシ九古

\* 1 上品中生―上品中上生 国

\* 2 心―内心 中・―〇心 東内(ミセケチ)

\* 3 也 ナシ、空格中東九古

\* 4 停―漳 国

\* 5 用―用也 中九古・―用也 東

\* 1 なれはノ次 それににたるといふ

心也云 中東

\* 2 也ノ次 又暁の雲を 中・―又暁

の雲を 東

\* 3 此心にノ次 とりなす 中・―同

上ミセケチ東

469頁

序次 (2) (1)ノ順 件本詞押替也 以上、種のと

り物櫛は色不変也、……まほるへ

しとそ かへしものゝ哥 呂の律

にうつる時の哥云 未分明、おり

かへしうたふ事あり、其事にやと

云。中東九古国 但、詞―此

詞 種―四種 東九古 件本詞押

替也 ナシ 種―四種 国

\* 1 題す―題す 中東九古

\* 2 件本詞押替也 肩注中・―件本此

詞押替也 肩注東九古

\* 3 四種―種 中

\* 4 隠持―憶持 中東九古・―隠持カクシ

国

\* 5 さやけき―さやけさ 中東九古国

\* 6 恋―恋哥 中東九古

\* 1 あらすノ次 ― 中東九古国

470頁

\* 1 用之 傍書国

\* 1 非すノ次 〇 中東

471頁

\* 1 也 ナシ中東九古国

\* 2 心は怨親―心怨親 古・―心は怨遠イ

親 国

\* 3 ことつてやらんと也―ことつけや

らんと也 中九古国・―ことつけ

せんと也 東

\* 4 序哥也 傍書国

\* 1 同ノ次 相模国の風俗也 国

472頁

\* 1 分別―分明 中東九古国

\* 2 に―す 東

473頁

\* 1 之 中東九古・―の 国天王之御名也

\* 2 之―也 東

\* 3 以上六度敷―定家奥書ノ注末尾ニ

大字ニ記ス 中東九古・―以上六

度敷(位置同上) 国物名十月一日二日大所十一月三日以上三座

敷、猶可思(付箋) 十イ

\* 1 理ノ次 也 中東九古・―也と 古

474頁

\* 1 所―心 中東九古国

\* 2 是非―其非 東

\* 3 悲―悲 国流イ

\* 4 流―俗 国

475頁

- \* 1 万性百歎—万姓 中—万姓 東九古
- \* 2 若—善 東
- \* 3 涼—淳 中東九古国
- 476 頁
- \* 1 孫—孫ミコ 欄外ニ孫下同ト注記 国
- \* 2 孫—姫メ 東
- \* 3 侍り—あり 国
- \* 4 然而—然とも 中東九古国
- \* 5 通—道 中東九古
- \* 6 なる—なるあい 国
- 477 頁
- \* 1 若—君 中東九古国
- \* 2 右肩合点 中東九古
- \* 3 詩—諸 東
- \* 4 然而—然とも 中東九古国
- \* 5 おひては—おひては猶哥 国
- \* 6 某—其ミ 中東九古国
- \* 7 彼時は—彼時とは 国
- \* 8 なる—たる 中東九古国
- \* 9、\* 10 便—使 中東九古国
- \* 11 愛する心—愛する心也は花鳥をのみ愛する 国
- \* 1 也ノ次 哥カニ 中東九古
- 478 頁
- \* 1 婦人之右、大夫之前 頭注中東九古 但、「大夫之前」本行重複 九古
- \* 2 長短不同 長短は善惡の心也 近代存古風者纔二三人然、此四字然ノ下ノ本文也ノ次中 九—頭注東古—長短不同、自是本文ノ注也 写本誤也私訂正長短ハ善惡ノ心也 次行然ノ次へ 移行符号国
- \* 3 是文—是文又 国
- \* 4 也—也ト 国
- \* 5 次—次シ 中東九古—次婆 国
- \* 6 なるへし—なるへしトイ 国
- \* 7 性—姓 中東九古国
- \* 1 也ノ次(私) ム云、定家卿筆、大夫之前 中東九古
- 479 頁
- \* 1 曆—歴 中東九古国
- \* 2 令—々 中東九古国
- \* 1 也ノ次 ○ 中東
- \* 2 臣等可受口伝 頭注中東九古
- 480 頁
- \* 1 八—八五 九—八五イ用之 国
- \* 2 未—末メ 中九古国
- \* 3 昌—昌品イ呂イ 中東九古国
- \* 4 高—商 中東九古国
- \* 5 高—商 国
- \* 6 商—高 中東九古
- \* 7 統万葉—統万葉集 中東九古
- \* 8 世—女 中東九古
- \* 9 ユ—ユル 東
- \* 10 ウマン—ウム 東—ウム 国
- \* 11 ラ—ウ 東
- \* 12 タユル—タエル 東
- \* 1 飢人トノ次 成テ 中東九古

\* 2 給フノ次 姫 中東九古国

481頁

\* 1 書リ一云リ 東

\* 2 トキ一トキ 中

\* 3 妃一妃 国

\* 1 中九古 永正八年奥書ノ次ニ以下

補篇 一校異

482頁

序次 (2) (1)ノ順 山ハ至誠シキイノ義

也、志マコトノ厚アツク高タカクきを一サイ切シヤク成シツ就コウ之根

元ゲンとす、やまあとノのあ文字マシを略リヤクし

たる也…… 九

\* 1 文明十三ノ九月廿六日 ナシ延

\* 2 又云 ナシ九古延

\* 3 ミセケチ部分 傍書ミセケチ東・

一ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 4 和字の哥一和字の字 延

\* 5 ミセケチ部分本行 東・一ナシ九

ノ如キコノ箇所ノ注アリ

雖本押番也天神之孫海童之女、

彦火ミ出見尊ト豊玉姫トノ御事ト

用、彦火トハ日神の御彦也、天神

ノ孫ニ皇孫ト申マス、木花開姫ト

和哥ヲ通シ玉ヒシ事アリ、此二ノ

古延

\* 6 又云 ナシ九古一本行 延

\* 7 神代 本行東一ナシ九古延

\* 8 尽 ナシ延

\* 9 之間 本行東一ナシ九古延

\* 10 心 ナシ延

483頁

\* 1 如 ナシ延

\* 2 ミセケチ部分ナシ九古延

\* 3 二神陰陽之和をおこなひしよりの

心也一全文傍書ミセケチ 東・一

事ヲ云ヘキニヤ云、例ヲアマタ引

ニナルヘシ

今はたえずなるといへるも、いひ

なしたる義也、他流に不立なると

いひなせるにおなし

国 神武天皇ノニ頭注 地神五

ナシ九延一和を 古

\* 4 又一本行 東九古延

\* 5 物々に一物ニ 東

\* 6 朋友一朋友等 東延一朋友 九

古

\* 7 ミセケチ部分ナシ九古延

\* 8 ミセケチ部分ナシ九古延

\* 9 客一容 東九古延

\* 10 ミセケチ部分 傍書ミセケチ東・

一ミセケチ部分ナシ 九古延

\* 11 苗代に一苗代水に 東九古延

484頁

\* 1 ミセケチ部分 傍書ミセケチ東

\* 2 思<sup>鬼</sup>—鬼 東九古延

\* 3 又<sup>1</sup>—又(右肩) 東—ナシ九古延

\* 4 ミセケチ部分 ナシ東九古延

\* 5 笑<sup>兵敷</sup>—笑 延

\* 6 刀<sup>カ</sup>—力 東延—刀 九古

\* 7 後撰—後撰<sup>(後)</sup>也 東九延—後撰<sup>(後)</sup>也 古

485頁

\* 1 憲哉—喜哉 九

\* 2 日本紀 ナシ延

\* 3 日本紀 ナシ延

\* 4 ありと—ありとは 東

\* 5 と ナシ延

\* 6 ミセケチ部分 傍書ミセケチ東

・—ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 7 御子—御な 東

\* 8 陰陽也、谷は陰、丘は陽也—傍書

ミセケチ 東—ナシ九古—陰

陽也、谷は陰、岳は陽也 延

486頁

\* 1 此界—此家 東延

\* 2 御神も(ミセケチ) ナシ九古延

\* 1 此間一行のくト書入 東—一行

分空白 古延

487頁

\* 1 あり—なり 東

\* 2 又神道口伝アリ ナシ延

\* 1 わかいつらこ—わかいらこ 延

\* 2 そりて宇治のみこ……あらねは辞

ナシ 本ノト傍書 延

\* 3 裏書—裏云 東九古

489頁

\* 1 仁徳を—仁徳世を 東九古延

\* 2 かり—かり 東九古

\* 3 ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 4 云入—書入 東九古延

\* 5 ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 6 ぬ心也然共(ミセケチ)—ぬ心也

然は(ミセケチ) 東—ナシ

九古延

\* 7 被 ナシ九

\* 8 ニ ナシ延

\* 9 出なり—出せり 延

490頁

\* 1 廿七日 ナシ延

\* 2 上以風化—上以風化下 東九古延

\* 3 不付言—不斥言 東古

\* 4 件本—仲本 東

\* 5 ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 6 賦ハ也、量也—賦ハ量也 古—

賦也、量也 延

\* 7 うへをも 傍書ミセケチ東

\* 8 ミセケチ部分 ナシ九古延

491頁

\* 1 見たる―みさる 延

\* 2 偽といへるは―傍書ミセケチ東・

―ナシ 九古延

\* 3 又人のことはのいつはりを―又人のことはとりくかすくなる(ミセケチ)の○いつはりを 東

\* 4 ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 5 こちむる―とちむる 東・―ナシ

九古延

492頁

\* 1 おほつかなく―おほつかなき 延

\* 2 風刺を―風刺するを 東九古延

493頁

\* 1 ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 2 将木―漿 東

\* 3 哥は(ミセケチ)○世を―世を 九延・―○世を

古

494頁

\* 1 ミセケチ部分 ナシ九古・―ミセケチ部分 本行延

\* 2 哥をしるさは―哥をしらすとも(すともミセケチ)○さは 東

\* 3 ミセケチ部分 ナシ九古延

495頁

\* 1 まめ―まめ 東九古

\* 2 は ナシ古

\* 3 又了見あるへき歎 ナシ古

\* 4 又 ナシ古

496頁

\* 1 君臣の道―君臣の道も 東九古延

\* 2 ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 3 亡する―定する 延

\* 4 花月―月花 古

\* 5 を ナシ延

\* 6 あり―なり 延

\* 7 かそへても―よそへても 東九古

延

\* 8 ミセケチ部分 ナシ九古延

497頁

\* 1 女郎―女郎花 古

\* 2 過ぬれは―過 九延・―ナシ古

\* 3 廿九日 廿八日無之 ナシ延

\* 4 をこりて―をこりて 九

\* 5 世に―世を 延

498頁

\* 1 又 ナシ延

\* 2 ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 3 心 ナシ延

499頁

\* 1 符号ナシ九古延

\* 2 ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 3 事―事 東古・―ナシ九延

\* 4 也 ナシ延

\* 5 御時に至也、当流ニ文武 ナシ延

\* 6 為家卿此事了見事、不用之 ナシ延

延

\* 1 為家卿以下ニ付箋 私口伝とある



は東之家切昏貫定分別の事成へし  
為家卿了簡事  
依可見分条肝要なり 古

\* 2 心□□□しき也—心はやさしき也  
東九古延

九古延  
歎歎  
難く—歎く 東九古延

500頁

\* 1 ミセケチ部分 ナシ九古—赤人の哥自然にして妙也 延

\* 3 ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 4 にして 傍書ミセケチ東

\* 2 一夜 ナシ延

\* 4 心—心に 延

\* 5 ミセケチ部分 ナシ九古延

501頁

504頁

\* 1 ミセケチ部分 ナシ九古延

序次 (2)(1)ノ順 誰云、万機之余  
暇諸事のあまりとあり、然は哥は  
教誡のはしにあらすや、如何……

\* 1 □神□羨鳴尊—二神素羨鳴尊 東九古延

\* 2 塩満て—塩に敷まで 延

哥道をも興たまふ義なりと云、こゝにいへるは此集を撰はるへき事をいふ記なり 延

\* 2 今と□□□を—今とは当代を 東九古延

\* 3 遍昭黒主等六人の事也 ナシ九古

\* 3 こひさら□や—こひさらめや 東九古延

\* 4 ミセケチ部分 ナシ九古延

\* 1 難—誰 延

\* 4 帝の師—帝師 東九古延

502頁

\* 2 別□□□—別ニたつ 東九古延

\* 1 案し給□□に—案し給へる 東延

\* 3 万葉集—万葉 古

\* 2 花と—花とは 東九古延

\* 4 なる ナシ延

\* 3 哥 ナシ延

\* 1 かくこのたひ、……不絶のよし也 ナシ延

503頁

\* 2 □ゝのほれる—とゝのほれる 東

\* 1 哥心前に—哥以前に 古

\* 2 □ゝのほれる—とゝのほれる 東

\* 2 花と—花とは 東九古延

\* 1 かくこのたひ、……不絶のよし也 ナシ延

\* 3 哥 ナシ延

\* 2 □ゝのほれる—とゝのほれる 東

503頁

\* 2 □ゝのほれる—とゝのほれる 東

\* 1 哥心前に—哥以前に 古

\* 2 □ゝのほれる—とゝのほれる 東

\* 1 哥心前に—哥以前に 古

\* 2 □ゝのほれる—とゝのほれる 東

# 解題

## (一) 概要

### 掲出諸本略系統

嚮に宗祇の古今和歌集講授、宗碩聞書に続き、再び宗祇の註  
釈書、牡丹花肖柏聞書所謂「古聞」の翻印と校勘篇を本誌に載  
録することを得て、夙に上梓の「兩度聞書」とを併せ見れば、  
その講筵の過半の状況は推知し得るものと思われるのである。

その「古聞」の伝存本は調査既済のもの又未済のものを含め  
ると猶相当数の伝本が予想され、目下、その悉皆調査を期すべ  
く継続の途次にあるが、偶々尊経閣文庫蔵書中の天文十五年湖  
信齋宗訊自筆加証奥書本の翻印許可を戴きましたのを機に、併  
せて校勘篇をも企図した次第である。その校勘篇は本来現存  
「古聞」諸本全般に亘るべき事柄ながら、いずれ「室町以前成  
立古今和歌集註釈書目録解題」に委るべく、今回は、その既済

調査本の中の七本を対校本文として撰択した。以下、その諸本  
である。

### 一類

京都大学附属図書館中院文庫蔵「古聞」(外題)——中院VI

69 「近世初」写 三冊 略称「中」

東北大学附属図書館蔵「古今抄」(外題) 「江戸前期」

写 三冊 同 「東」

### 二類

九州大学文学部国語学国文学研究室蔵「古今和歌集聞書」

「江戸中期」写 三冊 同 「九」

国立公文書館内閣文庫蔵「古聞抄」(外題) 「江戸中期」

写 三冊 同 「古」

国立公文書館内閣文庫蔵「延五秘抄」(外題) 「江戸後

期」写 存仮名序・卷一〜十五 三冊 同 「延」

### 三類

国立国会図書館蔵「古聞」(外題) 〔江戸初期〕写六

冊 同 「国」

尊経閣文庫蔵「古今和歌集聞書」(外題) 天文十五年宗

訊自筆加証奥書本 三冊 同 「底」

以上、諸本対校は七本に過ぎぬが、各本の系類は、如上の経過を辿り安定化の方向にあったものと想定される。現存「古聞」全般に亘る伝存経過も又恐らく略同様の過程のうちに把握されることであろうかと思われるのである。以下に順次、その概要に就いて言及することになるが、まず、前掲諸本の大枠につき総括的に要約することにした。

その第一として、第一〜第三類の奥書について誌すに、各本は、その成立の経由を当然の事ながら同じくするにより、第一表・第二表として一括し、第一表は、第一類の善本たる京都大学附属図書館中院文庫蔵本を以て本文を掲示し、同じく第一類の東北大学附属図書館蔵本を対校、更に、その基底を略同じくする第二類の九州大学文学部研究室蔵本・国立公文書館内閣文庫蔵二本を以って、その校異を脚欄に掲出した。第二表は、第三類底本の奥書を挙げ、同時に同類の国立国会図書館蔵本を併掲した。両本は基本的には前者第一・二類とは異るところはな

いが、両本は第一・二類に対し、所謂「古聞」として現在の処、最も安定化した本文として対処すべき伝本と想定したが故にほかならない。

又、掲出に際し、第一・二表の諸本は後述するごとく、各本編成、装訂時に於て本来の講授次第を古今集部立次第に改綴するもの、あるいは任意に各冊順位を変更するものなど所見され、就中、底本のごとくに於ては所定の奥書箇処を改装時の巻第再編に伴い、敢て錯綴するごときの誤りも惹起することも生じているが、当該本の編成に従っていまは掲示し、各々の冊・巻の位置をそれぞれに註付することとした。又、加えて、第一表中本、第二表底・国本の各奥書語頭に、それぞれ(一)〜(甲)、①〜⑱、(1)〜(17)、の奥書番号を付し、且つ脚部に各対偶番号を註記して、各本奥書の相互関聯を明示して参照の繁縷を避けることにしたものである。

諸本奥書一覽とその成立経過

第一表

京都大学附属図書館中院文庫蔵本

第一冊末卷九注尾・東本第二冊同卷尾

- (一) 文明十三ノ九月三日聞之以上十五度 ⑦(1)
- (二) 同十九未夏之間重聞此集説加筆早ノ巳一東 (肖柏花押) ⑧(2)
- (三) 奉加一覽早無比類者也

文明十九年六月日 宗祇(花押)

- (四) 明応五丙辰 七月上中旬之間以祇公東素伝奥書在之聞書加筆也ノナシ一東 (肖柏花押) ⑨(3)
- (五) 文龜三癸亥 孟春從十一日至仲春二日覽之重ノ見合祇公聞書早ナシ一東 加筆本行一東 為源頼則將一東讀之時也 ⑩(4)
- (六) 永正三寅自八月至九月卅日為真存法師友弘同聽ノ讀之本云 ⑪(5)
- (七) 右五十二枚 件本六枚也本云 ⑫(6)
- (八) 僧肖柏免一覽間於閑窓写之訖ノ最可謂二条家秘説不可有外見者也本云

如件本加朱点校合早

永正八年夏六月十八日

「九月三日聞之」ナシ一延  
「御判」一古・花押ナシ一延  
如件本加朱点校合早(二・三ノ間ニ朱書)一古

「判」一古・花押ナシ一延  
「御判」一古・花押ナシ一延  
「三」ナシ一古、「孟」作「立」一延、  
「加筆早」一古・「早」加筆一延、「時」作「將」一延  
(七) ナシ一古・「六」作「四十六」一延  
「如本以下校合早」ナシ一古・延

前関老人〔花押〕  
判東

「御判」―古・「判」―延

延五秘抄 前記ニツヅキ以下ノ識語ヲミル

此注僧肖柏伝後法成寺関白太政大臣准后法名大証于博陸尚通公々々又ノ授於予既師

資相承抄也敢不可ノ忽緒焉

永正十一年 三月廿八日

権大納言藤

右紙数文字アル分六十六丁 奥書二枚ノ以上六

十八枚也

上卷自春部至鬮旅部以上九卷

延五秘抄第三册末卷十五（卷末欠）尾ニ、以

下ノ識語アリ

這抄三帖者近衛殿尚通公於從肖柏伝○秘説者也ノ

第十五之卷半ヨリ末闕重而尋探可修補尤不可

出深底耳

天文元壬辰年

正二位重治判

第二册末卷十九注尾、東本第三册同卷

〔九〕 從恋一以上廿二度

〔十〕 存分無相違ノ者也

⑬(7)

〔九〕ノ〔十四〕―延欠卷部

文明十四曆三月日

宗祇(花押)

⑭

花押ナシ―九・「判」―古

(十一) 同十九未夏之上中下之間重聞此集說加筆早／(肖柏花押)

⑮

花押ナシ―九・「御判」―古

(十二) 文龜三朱(未ト傍訂)一東仲春中旬以祇公聞書素伝粗書加之二行割トス一東

⑰

源頼則伝授之時也

(十三) 右七十枚件本五十八枚也本云

(十三) ナシ―古・九

(十四) 僧肖柏免一覽・間於閑窓写之訖／最可謂二条家秘說不可有

外見者也

如件本加朱点校合早

永正八年訖一東纒九月十五日

前関老人(花押)

判一東

第三冊末真名序注尾 東本第一冊同序尾

花押ナシ―九・「御判」―古

(十五) 所一見存分無相違

(十五) 以下、卷十尾ニ書写ス―延

尤以無比類者歟

文明十四春正月日

(9)

宗祇(花押)

判形凡如此

「文明十四年正月日」ノ右脚ニ「中卷之奥書也」ト傍記アリ―延、「判」―古・花押ナシ―延、「判形凡如此」ナシ―九・古・延

(十六) 同十九未六月重聞此說加筆早／(肖柏花押)

朱(未ト傍訂)一東

ナシ一東

(10)

花押ナシ―古・延

(十七) 延徳武<sup>庚戌</sup>年三月又聞序十廿卷說了(肖柏花押)

⑩(11)

(十八) 全部四十三ヶ度伝授之ノ哥数千百一首

⑬(12)

(十九) 僧肖柏免一覽間於閑窓写之訖ノ最可謂二条家秘説不可有外

(十九) ナシ一延

見者也

如件本加朱点校合早(朱)

永正八年春二月十一日

前関老人：

(花押) 一九・「御判」一古

(十八)・(十九) ナシ一東

延五秘抄(十八) ニツヅキ以下ノ識語アリ

此注僧肖柏伝于博陸尚通公又ノ授於予既師資相

承抄也敢不ノ可忽緒焉

永正十一年二月廿九日

権大納言藤

右紙数文字アル分五十一枚奥書二枚以上五拾

ノ三枚也

中卷 仮名序物名部大哥所御哥奥書真名序

(二十) 天正十二年霜月十五日

前内大臣

(二十) ナシ一東

(二十) ナシ一九・古・延

第二表——本表底本番号は同本新装時の改綴が予想されるにより、国会本の奥書順次に従い、底本次第を示したものである。

前田育徳会尊経閣文庫蔵本

国立国会図書館蔵本

第二冊末卷十注尾

第二冊末卷九注尾

⑦ 文明十三

(1) 文明十三

以上十五度

以上十五度

九月三日聞之(朱)

(一)(1)

九月三日聞之

(一)(7)

⑧ 同十九未夏之間重聞此集説加筆早 夢庵判

(二)(2)

(2) 同十九未夏之間重聞此集説加筆早／判 (三)(8)

⑨ 奉加一覽早無比類者也

(三)(3)

(3) 奉加一覽早無比類者也

文明十九年六月日 宗祇判

(三)(3)

文明十九年六月日 宗祇判 (三)(9)

⑩ 明応五<sup>丙辰</sup> 七月上中旬之間以<sup>テ</sup>祇公<sup>ノ</sup>聞書<sup>ヲ</sup>加<sup>レ</sup>筆也／夢庵判

(四)(4)

(4) 明応五<sup>丙辰</sup> 七月上中旬之間以<sup>テ</sup>祇公<sup>ノ</sup>聞書<sup>ヲ</sup>加<sup>レ</sup>筆也 (四)(10)

⑪ 文龜三<sup>亥癸</sup> 孟春從<sup>ニ</sup>十一日<sup>一</sup>至<sup>ニ</sup>仲春二日<sup>一</sup>覽<sup>レ</sup>之重見<sup>ニ</sup>／合祇

(五)(5)

(5) 文龜三<sup>亥癸</sup> 孟春從<sup>ニ</sup>十一日<sup>一</sup>至<sup>ニ</sup>仲春二日<sup>一</sup>覽<sup>レ</sup>之重見<sup>ニ</sup>／合祇公聞書加筆早 (五)(11)

公聞書<sup>ニ</sup>加<sup>レ</sup>筆早為<sup>ニ</sup>源<sup>ノ</sup>頼則<sup>ノ</sup>讀<sup>レ</sup>之時也

(五)(5)

為源頼則讀之時也 (五)(11)

⑫ 永正三<sup>寅</sup> 自八月至九月卅日為<sup>ニ</sup>真存法師友弘<sup>ノ</sup>同聽<sup>レ</sup>之

(六)(6)

(6) 永正三<sup>寅</sup> 自八月至九月卅日為<sup>ニ</sup>真存法師<sup>ノ</sup>友弘<sup>ノ</sup>同聽<sup>レ</sup>之 (六)(12)

第三冊中途卷十九注尾

第四冊末卷十九注尾

⑬ 從恋一以上廿二度

(九)(7)

(7) 戀一ヨリ廿四度最初 (九)(13)

(8) 從恋一以上廿二度 兩冊合卅七度又哥数少／以後哥数不定



第三冊末真名序注尾

⑭ 存分無相違者也

文明十四曆三月日

宗祇判

(一〇)

第五冊末真名序注尾

(9) 所一見存分無相違

尤以無比類者歟

文明十四春正月日

宗祇判

(一五)

⑮ 同十九未夏之上中下之間重聞此集訖加筆早／夢庵判

(二)

(10) 同十九未六月重聞此說加筆早 判

(一六)

⑯ 延徳式庚戌年三月又聞序十廿卷訖

(一七)(11)

(11) 延徳式庚戌年三月又聞序十廿卷(マヤ)訖了／判

(一七)(16)

⑰ 文亀三癸亥仲春仲旬以祇公聞書素伝奥書粗書加之

源頼則伝授之時也

(一三)

⑱ 全部四十三ヶ度伝授之／哥数千百一首

(一八)(12)

(12) 全部四十三ヶ度伝授之／哥数千百一首

(一八)(18)

⑲ 此冊依竹田治房懇望所許書／写也必可禁外見者乎

天文十五年二月八日 宗訊(花押)

(13) 古伝

永正三年丙寅八月廿五日ヨリ初同九月卅日成／就也

但内九月十四日ヨリ十九日迄者指合之／事アリテ

御読なし然者卅日ニ成就所也

肖柏六十四才

永正三丙寅九月卅日

友弘二十四才

第一冊末仮名序注尾

① 所一見存分無相違尤以無比類者歟

文明十四春正月日 / 宗祇判

② 文明十三 九月下旬之聞書也

③ 同十九未年六月重聞此説加筆早

④ 延徳式庚戌年三月又聞彼説矣

⑤ 此一冊依友弘懇望所許書写也 / 必可禁外見者乎

永正三年初冬日 夢庵判

⑥ 此冊依竹田治房懇望所許書 / 写也必可禁外見者乎

天文十五年二日八日 宗訊(花押)

扱、右掲奥書一覽のなかで、第一〜三類間に於て略共通の基底をなすものは、「古聞」成立の経過を誌す記述である。一見、右奥書のみにて、文明十三年(1481)九月下旬に始る講授は

(14) 天文五年丙申四月三日ヨリ初五月廿三日 / 未剋令

成就以上及四十五度相果者也

当座聞書六月十七日火中ニ入早子細者 / 宗訊依トモニ(朱)

有彼一部ノ聞書付与之儀也

天文五年六月十八日 養松四十一歳

五十四歳 宗訊

第六冊末仮名序注尾

(15) 所一見存分無相違尤以無比類者歟

文明十四春正月日 宗祇判

(16) 文明十三 九月下旬之聞書也 / 肖柏判 ①

(17) 同十九未年六月重聞此説加筆早 ③

(18) 延徳式庚戌年三月又聞彼説矣 ④

永正三年(1508)九月同聴受講に至る二十有余年の永き歳月に

亘る再三の聞書が集積整備されて現在に見る「古聞」本文とな

ったのであろうが、その当初から現行本に至る稿本次第は既に

仮定的臆測以外には迎るべくもないのが現状である。従って、既に先学諸氏と略軌を共にしながらに、右掲奥書により、その成立過程を概要し、各本独自のそれは当該本書誌解題に於て記述することにする。

ひとまず、右奥書に誌す年紀に准じ、その経過を追うことにする。各伝本の巻一卷初に、「文明十三年<sup>辛</sup>八月十八日於種玉庵受之／宗祇禪師」とあるにより、肖柏への宗祇講授は開催されたのであろう。そして

○巻一春哥上より巻九齋旅歌まで「十五度」の講筵を「文明十三年九月三日」を以て終了している。<sup>註一</sup>

○次いで、巻十一恋歌一より巻十九雜躰に至る同じく九巻を、「從恋一以上廿二度」と誌して「兩冊合卅七度」（国本）に及び、仮名序・巻十・巻二十の兩三巻の秘卷を残し伝授している。

○更に、仮名序注尾に、「文明十三 九月下旬之聞書也」と誌すによって、同序は前者に引続き講授されたのであろう。国会本その他に「三座」と朱補するところから兩三度にわたったのであろう。

○右奥書には誌すところではないが、諸本巻十物名の巻初に、「文明十三 十月一日 廿三首」・「二日 廿四首」と朱記する

のを見ると、仮名序と継続して受講したのが窺われる。

○同じく巻二十巻初の朱記に、中院本・国会本等に、「十月三日 卅二首」、「十一月三日 卅二首」等の記が見えるので、上記秘卷三巻も同年十月三日を以て第一回の伝授講筵は終結したことが確認されるのである。<sup>十月三日可用之</sup>

そして、肖柏は真名序注を「以宗祇本写之」し、同巻末に「所一見存分無相違／尤以無比類者歟／文明十四春正月日／宗祇判」の加証を得ている。但し、底本は真名序末を「存分無相違者也／文明十四曆三月日／宗祇判」と誌し、他本に所見せぬ錯綴が存する。恐らく改装と巻第改編に際しての錯誤により生じたのであろう。

又、第一・二類諸本が、巻十九雜躰の奥に「存分無相違者也／文明十四曆三月日 宗祇（花押）」―或は前記底本の錯誤は此記述の転写上に於ける錯入とも臆測される―と、又、底本・国会本共に、仮名序末に、第一・二類の真名序加証と同じく、「所一見存分無相違尤以無比類者歟／文明十四春正月日／宗祇判」の伝授加証が重記されている。

第一・二類本に於て、巻十九雜躰の奥に、「文明十四曆三月日」と記すのは伝授次第としては不審であるが、真名序を最終

に排する底本のごとき巻次第が正当なるものとするれば、あるいは、再度の宗祇加証とも認められ得るのであるが、猶即断をさけ今後の精査に期したい。

いずれにせよ、肖柏聞書の第一回の稿本は文明十三年八月十八日に始り同年十月三日を以て完了し、翌春正月又は三月には宗祇の伝授加証が追記されたのであろう。が、現在、その加証本は原本は勿論転写本も管見にして知るところでない。

再度の講授は、(イ)巻九緒旅歌末―底本、巻十物名末、前例同様に改編時の事歟―、(ロ)巻十九雜牀末(第一・二類)・真名序末(第三類)、又、(ハ)仮名序末(第三類)に誌されている文明十年夏六月の聴講である。即ち

(イ)同十九未夏之間重聞此集説加筆早(中本)

(ロ)同十九未夏之上中下之間重聞此集説加筆早(中本)

(ハ)同十九未夏六月重聞此説加筆早(底本)

と見出される記述である。さきの文明十三年の受講とは稍々記録は簡略化され、本文中にも、又、斯回の記をとどめるところはなく、如何様なる講筵かは、その状況を探るべくもない。と同時に、それは前回の聞書、いわば稿本の上にかくに補正刪省が施されたかも未詳というほかはない。が、又一方、当然の

事ながら、文明十九年度の受講は前聞書に加味添削されて、現在の「古聞」に歩一歩近づいたのであろう。

そして、この度の宗祇加証は巻九末に(イ)に続いて、

奉加一覽早無比類者也／文明十九年六月日 宗祇(花押)

と追証しているのを見ると、これも又、正式なる伝授講筵であったのであろう。

次いで、前回から三年を経ずして、延徳二年三月には、又しても、「序・十・廿卷」の両三卷につき宗祇から受講している。

文明十九年の伝授はその内容を明らかにせぬので、この両三卷の受講如何は推測しがたいが、秘卷三卷についての伝授は両三年をおいての最終的受講であったかもしれない。ともかくも、

上掲奥書には、(イ)真名序末―諸本、(ロ)仮名序末―底本・国会本(第一・二類本不載)、の記を誌している。即ち、

(イ)延徳<sup>庚戌</sup>二年三月又聞序十廿卷説了(肖柏花押)―中本

(ロ)延徳<sup>庚戌</sup>二年三月又聞彼説矣―底本

と見える。以上、両三度にわたる古今伝授は異例ともいえる出来事とも思われるのであるが、宗祇にとっても又肖柏ならではの感も存したことであろう。いずれにせよ、宗祇から肖柏への直接の講授は、此三度を以て終るのである。初度文明十三年

より當々九年の歳月を閲しているのである。

しかし、肖柏にみる古今への執着は明応・文龜の期に於ても、宗祇聞書の原点とも云うべき所謂「兩度聞書」に帰返して再吟味と推問の跡をとどめているのである。まず、明応五年時には次の奥書を誌す。底本は前例同様に卷十物名末、諸本卷九轡旅歌の奥に、

明応五<sup>丙辰</sup>七月上中旬之間以祇公<sup>東素伝奥書在之</sup>聞書加筆也<sup>判在</sup>（中本）

と書きとめている。素伝即ち常縁、その奥書ある「祇公聞書」は恐らく「兩度聞書」を指すのであろう。

文龜三年には、源頼則<sup>註二</sup>に伝授に当り、重ねて素伝奥書「祇公聞書」を参照し加筆しているのである。即ち、(イ)諸本卷九末―底本卷十末―、(ロ)底本真名序末―他本欠―、の二箇処に、

(イ)文龜三<sup>癸亥</sup>孟春從十一日至仲春二日覽之重<sup>加筆</sup>見合祇公聞書  
早為源頼則読之時也―中本

(ロ)文龜三<sup>癸亥</sup>仲春仲旬以祇公聞書<sup>素伝奥書</sup>粗書加之<sup>判在</sup>源頼則伝授之時也―底本

と誌している。底本のみに存する(ロ)奥書の経由は猶審らかにしないが、次の永正三年宗訊同聴の記述より類推するに本来存すべき識語であろう。ともかく、この記により、この「祇公聞

書」も又同様に「兩度聞書」であったと判断されるのである。

上掲伝本に見る肖柏聞書「古聞」の成立経過は、この文龜三年の「祇公聞書」の再度の検討と斟酌によって終止符をうつのであるが、それが即現在の「古聞」であったか否かは知るべくもない。しかし、所掲七本外の管見に入る所謂「古聞」も校勘篇に対校する異同を基本的には越える伝本は存しない。とすれば、この文龜三年講授の稿、源頼則聞書―もし現存するとすれば―は現「古聞」との間は既に略相同じくする、いわば定稿的な状況にあつたらうかと推測されるのである。しこうして成つた古今集註は、その基底に宗祇註を遵守しながらに、一方肖柏その人の古今集註として自ら独自の一面を具現したものと認めるものであろう。

最後に、第一類と第三類に共有する奥書としては、永正三年、真存法師<sup>註三</sup>に伝授の記をしっている。卷九轡旅歌末―底本は卷十末―に、

永正三寅自八月至九月卅日為真存法師<sup>友弘同聴</sup>讀之―中本

と書留めている。記中、「友弘／同聴」とあるにより、堺の連歌師小林与四郎友弘、即ち湖信齋宗訊<sup>註四</sup>も又同聴を許され、恐らく真存と共に肖柏より古今伝授の印可を得たことを意味する

ものであろう。それは底本のみ仮名序末に所見するところであるが、

此一冊依友弘懇望所許書写也／必可禁外見者乎

永正三年初冬日 夢庵判

と誌しているのが、正格な伝授年紀であったのであろう。いずれにせよ、この夢庵加証をのぞき、所掲七本はすべて右のごとく略奥書を共持するところから、この宗訊の聞書を源とする系流の中にある。就中、底本は天文十五年と歳次は相当に降るが、宗訊自筆の加証本であるところに、現存「古聞」として就中信憑性ある伝本と判断されるのである。

如上、所掲七本に普遍する奥書である。

### 講釈次第

本書「古聞」の奥書にみる成立経過の概要につき略述したので、此処に併せて、その講筵日程と進捗状況を本書の中から追ってみることにする。各書共に講釈日次は朱筆補記するところであるが、孰れも初度文明十三年時のそれであり、以降の日程は初度の経過に准じて類推するのほかはない。

以下に掲示する日次は底本を基とし、下欄に国会本の異同を

付註した。第一・二類本の異同は底本のそれに傍記し、まま必要に応じ別行に補註したものである。

尊経閣本

国会本

古今和歌集卷第一／春哥上	同上
ナシ(延)	
文明十三 <sup>辛</sup> 八月十八日於種玉庵受之	宗 同上
祇禪師(墨)	
ナシ(延)	
以上初日(朱)	廿首—20(国歌大観 同上)
番号、以下同)	
ナシ(古)	
以上第二日(朱)	卅首—50 同上
ナシ(延)	
古今和歌集卷第二／春哥下	同上
ナシ(延)	
以上第三日(朱)	卅一首—81 同上
ナシ(延)	
以上第四日(朱)	卅五首—106 同上
ナシ(延)	
以上第五日(朱)	廿八首—134 同上
ナシ(延)	
古今和歌集(夏哥)	同上
以上第六日(朱)	卅四首—168 同上
ナシ(延)	
古今 第四	古今和歌集第四秋哥上
以上第七日(朱)	卅九首—207 同上
ナシ(延)	
以上第八日(朱)	卅一首—238 同上
ナシ(延)	
古今、五	秋哥下 同上

以上第九日(朱) ※ナシ(中・東・九・古・延) 廿八首 | 266 ※廿七首

以上第十日(朱) ナシ(中・東・九・古・延) 廿九首 | 295 同上

古今 第六 冬哥 同上

以上第十一日(朱) ※ナシ(中・東・九・古・延) 廿二首 | 317 ※廿三首

以上第十二日(朱) ※ナシ(中・東・九・古・延) 廿五首 | 342 ※廿六首

古今 第七 賀哥 同上

以上第十三日九月朔(朱) ※ナシ(中・東・九・古・延) 廿二首 | 364 ※廿〇首

古今 第八 離別哥 同上

九月二日(朱) ※ナシ(中・東・九・古・延) 廿九首 | 393 ※廿九〇首

古今 第九 歸旅哥 同上

九月三日 已上十五度(朱) ナシ(中・東・九・古・延) 廿八首 | 421 以上廿八首

文明十三 九月三日聞之 以上十五度(中・東・九・古・延) 月三日聞之 以上十五度

延、但東一以作已、延一「九月三日聞之」ナシ)

※底本ハ改装時ニ卷第改綴セルニヨリ生ジタル故カ、下欄国会本ノ「文明十三……以上十五度」ノ記述ガ卷第十物名末ニ排シ、他本卷第九奥書ト共ニ誤綴サレテイル、奥書一

覽ヲ参照サレタイ。因ミニ、中・東・九・古・延本ハ「以上廿八首」ノ記ヲ欠クモ国会本ト同ジクスル。

古今 十一 恋哥一 八十三首(中・東・九・古) 同上

文明十三 九月三日(朱) ナシ(延) 同上

四日(朱) ※ナシ(中・東・九・古・延) 廿八首 | 496 ※以上廿九首

五日(朱) ナシ(中・東・九・古・延) 廿九首 | 525 同上

六日(朱) ナシ(中・東・九・古・延) 廿六首 | 551 同上

※卷第九歸旅哥ノ受講終了日ヲ卷十一恋哥卷首ニ再記シ、卷第十物名ヲ隔テ一両卷継続受講ノ年次ヲ明示シタモノト推測サレル。

古今 十二 恋二 六十四首 同上

七日(朱) ナシ(中・東・九・古・延) 廿二首 | 583 同上

八日(朱) ※ナシ(中・東・九・古・延) 廿二首 | 615 ※廿三首

古今 十三 恋三 六十一首 同上

九日(朱) ※ナシ(中・東・九・古・延) 廿一首 | 646 ※廿二首

十日(朱) ナシ(中・東・九・古・延) 卅首 | 676 同上

古今 十四 恋四 七十首 同上

十一日(朱) ※<sup>ナシ</sup>卅七首—713 ※三十七

十二日(朱) ※<sup>ナシ</sup>卅三首—746 ※三十二

古今十五 恋五 八十二首 同上

十三日(朱) <sup>ナシ</sup>廿六首—772 同上

十四日(朱) <sup>ナシ</sup>廿八首—800 同上

廿八首—828 十五日 二十八首

古今 十六 哀傷 卅四首 同上

十五日(朱) 卅四首—829 同上

古今 十七 雜歌<sup>ザツカ</sup>上 七十首 同上

十六日(朱) 卅三首—863 十六日廿三首<sup>※卅四</sup>

※底本以下六本、講説日付ヲ「哀傷」以前ト異リ、当該歌ノ初頭ニ誌シテイル。又底本「十五日 卅四首」ハ恋五卷尾「十五日 廿八首」(国会本以下諸本)ト同日ニ受講シ

タノデアロウ。同日兩卷ノ講説ハ一見奇異ノ感モ拭エヌガ、

東北大学附属図書館蔵〔室町末近世初〕写「古序分聞書」

「古今和歌集」(目錄書名)二冊—函架番号狩四—二八一八

○、狩四—二八一七五—、又同一書デアアル書陵部蔵〔江戸

中期〕写「鈷訓和詞集聞書」(外題)—函架番号二六六一—

四五—ニ所見スル受講日付ニハ、当該箇処ニ於テ文明十七

年「已上二十五首 五月十一日(恋五卷尾)、同「已上三十

四首 五月十一日」<sup>註五</sup>(哀傷)ノ同日受講日付が見出サレテ

参考サレル。肖柏受講モ又同日ノコトデアツタノデアロウ。

国会本ノ墨訂追記ハ前回講説日ニコダワツテノ誤解デアロ

ウ。因ミニ中・東・九・古・延本ハ底本ト同ジクスル。

十七日 ※廿四首(朱)—886 ※廿四首<sup>三</sup>

十八日 ※廿三首(朱)—910 ※廿三首<sup>四</sup>

雜歌下 十八 六十八首 同上

十九日 ※廿五首(朱)—933 ※廿五首<sup>三</sup>

廿日 ※廿三首(朱)—958 ※廿三首<sup>五</sup>

廿一日 ※廿首(朱)—981 ※廿〇首<sup>三</sup>

古今 十九 雜歌<sup>ザツカ</sup> 同上

廿二日(朱) 1001 廿二日<sup>※1</sup>

五十八首 廿三日<sup>ナシ</sup> 廿九首(朱)—1011 廿三日<sup>※2短</sup>

野旋頭ノ分(朱) 首



廿四日 廿九首(朱) 1040

同上

從恋一以上 廿二度(同卷末)

恋一ヨリ廿四度最初<sup>二</sup>

※1 国本「廿二日 廿首」トアルハ「十首」ノ誤記デアロウ。

※2 国会本「廿三日 廿九首」ト朱訂スルハ、※1ノ誤記ニ牽引サレテノ錯訂ト推測サレル。

―仮名序(但シ部立表記欠)古今和哥集序聞書(底・国)

以下受講日次ハ底・国・延両三本ニ欠ク、依テ中院本(東

・九・古本同)ヲ以テ補ス、下欄ハ国本ニ付ス朱註デアアル。

文明十三年九月廿六日(朱)

初日

※廿七日(朱) 本文「そもく哥 一日分是迄也、当

のさま六也ノ前―東・九・古同 該箇処同上

廿九日 廿八日無之(朱)、本文 是迄二座(朱)、本

「又春のあしたに、」ノ前、東 文「いにしへより

・九・古本同 かくつたはる、」

」ノ前、

以上三座(朱)、本

文序末

※九本、廿七日分受講ノ末ニ「私 是迄一度ノ分也」ト追

記アリ、「二度」ノ誤歟

又、廿九日ノ受講部分ニ於テ、中院本等第一・二類本ト国本ト相違スルモ、序ノ段落ヨリミレバ国本ノ方正シキ歟。

―古今之十ノ物名

文明十三年 十月一日 廿三首(朱)―422 同上

二日 廿四首(朱)―445 同上<sup>※1</sup>

―古今和哥集卷二十

十月三日(中・東・九・古) 廿二首(朱)―1069

同上 十一月三日 十月三日可用之

以上六度歟(同卷末)

同上<sup>※3</sup>

※1 国会本「私考ノ廿四首ハ自是末此卷終迄ノ数也ノ是迄ハ廿三首朔日ニ講儀之由稿ニ書付有之」ト私考朱筆追記アリ。

※2 国会本「私考ノ十月タルヘシ物名十月一日二日兩日也其上宗祇ヨリ肖柏ヘ始ノ印可文明十三年十月三日トアリ此時ナルヘシ」ト私考朱筆追記アリ。

※3 国会本「物名十月一日二日大哥哥十一月三日以上三座歟猶可思」ト追補押紙アリ。但シ仮名序三座ナレバ「以上六度」トアルガ正シイデアロウ

—古今和歌集序聞書 以宗祇本写之 同上

聊か繁雜にわたり詳記したのであるが、ひとつには、この期の伝授状況の実態を明示する資料として此処に敢て集約したのである。諸本相互の間には些少な異同は存するが相補足することにより、ほぼ完全に近い講筵の日程を具現することが可能である。その意味ではこの「古聞」の朱註日付は充分に検討されるべき事柄でもあらう。

その講説次第を所見するに—現在各本間には巻第編成を多分に異にするのであるが—、巻第一春哥上から巻第九巖旅迄の九巻を文明十三年八月十八日より同年九月三日の間、十五座にわたり講釈を終了し、次に、巻第十一恋歌一から巻第十九雜躰迄の九巻を前者に継続して同四日より始め二十四日迄、二十二座にわたって完了している。

後に残る三巻—仮名序・物名・大歌所御歌等—は別時に排され、所掲本では、まず、仮名序が同九月二十六・二十七・二十九日の三座にて講説し、次いで巻第十物名が同十月一・二日の二座、巻第二十大歌所御歌等が同月三日の一座、合せ六座を以て完結しているのである。従って本書にみる古今講釈の全日程は凡そ一ヶ月半、その講筵は奥書に誌すごとく「全部四十三ヶ

度」にて「伝授之」したわけである。又特に両三巻は古今伝授に於ては別格の巻々として重視され規定されていたためであらう。言うまでもなく秘卷たる所以であらう。

この伝授講説次第は当然のことながら、本書「古聞」の巻第編成をも自ら規制することとなるのは予測されるのである。伝授・聞書という古格な枠内であれば猶更であらう。とみれば、巻第一春哥上く巻九巖旅歌、巻第十一恋歌一く巻十九雜躰、仮名序・巻第十物名・巻第二十大歌所御歌等、の序列に排されることが自然の形態となるのである。

真名序については、「真名序は無宣下<sup>云</sup>、故不必用之、然而又難捨にや、貞応本被書入之、追可受之」を述べ、その聞書も又「○古今和歌集序聞書 以宗祇本写之」と格外的対象として対処しているのであれば、直接の講授はなく、巻第編成にはかわりなく流布貞応本の排するのに任意従ったのであらう。

翻って、現存「古聞」諸本を見るに、まます述の巻第編成を改むる伝本も散点するのである。所掲本の中では底本はその最たるものであらう。それは転写の途次というより、改装又は編綴の際の意図的結果の然らしむるところであらうかと推測されるのである。各本については当該書誌に於て誌すこととする。

## 所掲本系類について

所掲諸本は既述したごとくすべて文明十三年初度の伝授以来、  
両三度の講授を経、更に文龜三年仲春に至る再度の「兩度聞書」  
吟味と加筆の経過を辿った肖柏の「聞書」にその源を発する転  
写の経由を見るのである。従つて、諸本は既に一本より伝流す  
るところであれば、素より敢て系類に班つべき性格のものでは  
ない。しかしながら、講筵・伝授の形式が、その基本に存すれ  
ば自ら其処に系類のごときものが生ずるのは避けがたい事でも  
あつたらう。

その意味に於ては、所掲本は兩類に分流する岐点を各本奥書  
が如実に示しているといえるのである。即ち、

第一・二類は、その奥書中、卷九・卷十九―延本は当該奥書  
を欠く―真名序の両三卷末に於て、略同一の書写奥書を所見す  
る。卷十九雜躰末のそれを誌すと、

僧肖柏免一覽問於閑窓写之訖／最可謂二条家秘説不可有外  
見者也

如件本加朱点校合早

永正八年癸九月十五日／前関白老人（模擬花押）―中本

と書留めている。―卷九末の年紀は「……夏六月十八日」、真  
名序末は「……春二月十一日」と記す。此記述により、第一  
・二類は前関白近衛尚通にと伝流する一系類をなしておるもの  
であり、共に同類本として殊更に類別すべき書写本ではなく、  
事実又第三類との間には、後述例示するごとく相隣接するの  
である。しかし、又同じく後に例示するが、釈文整定化の点に於  
て明らかなる移行を所見するところから便宜上兩類を設け、諸本  
識別の一端に供したものにすぎない。

この第一・二類に対し、第三類系は、底本の仮名真名の両序  
末に湖信斎自筆の加証奥書―同文―が追記されている。即ち、

此冊依竹田治房懇望所許書／写也必可禁外見者乎

天文十五年二月八日 宗訊（花押）

とあるにより、第一・二類の永正期を降ること三十有余年の  
後、宗訊も又晩景にあるが、竹田治房註六に印可の加証を誌してい  
る。前者はいわば、堂上家系の流れとすれば、後者は一方地下  
連歌師系への一流をなすものともいえようか。

ともかくも、この奥書の示す伝流経過が、所掲本類別上の要  
をなすのである。そして、その関鑰を提示する処が、仮名序注  
に見る兩流の顯著なる異同である。

扱、その一伝流の中に於ける第一類と第二類を区分する差異はいずれにあるかとすれば、その歴然たる処は、第一類に屢々所見する、時に数行におよぶ見消ち、寧ろ刪節の章句とも称すべき点である。既に校勘篇に於て揭示するところであれば、以下任意に一・二例をもつて、その移行経過を見ることにする。

卷十三恋歌三69番は、第一類本に、

明ぬとてかへる道には 雨のふるともわかれずしてはか  
なはぬ時のさま也、かきくらしふる雨にもとまるへきなら  
ねは今はとて、こきたれてはかきたれての心也、いたく  
ふる躰なるへし、勘ニ此注面白し—中・東本 傍点筆者、  
以下同

第二類当該部は、

明ぬとてかへる道には、かきくらしふる雨にもとまるへき  
ならねは今はとて、こきたれてはかきたれての心也、い  
たくふる躰なるへし 九・古・延本

と改る。第三類本—底・国本も右第二類本と同じくする。稍

々用例としては適正を欠くが、第一類から第三類にいたる本文上の主たるは、仮名序をのぞき、揭示のごとき単純且つ図式的整理化を基本とするものである。いわば、第一類に於ける、そ

の感想的叙述又他注付加的要素の排除による簡潔化への方向として把握し得るのである。しかし一方、現時点から観れば第一類の刪省の跡も合せみるべきものも存するのである。

この第一類の見消ちと第二・三類の基本的移行を例示したが、第二類内に於ける異例に属する一例をあげることにする。

卷一春歌上42番は、九・古本の両本は、

はつせにまうつることに 貫之は初瀬を信してつねにまい  
りける也

かくきたかになんやとりはあると 久しくやとらて来りけ  
れは、たしかにことやとのありけるとうたかひいひたる也、  
貫之きよて、かやうにいふ人は、心のかはりたるにやと思  
ふ心ありて、人はいさとよめる也  
ヨノ一行ナシ(古)  
又かくきたかに、やとりはかはらすあるといへると也

人はいさ心もしらす 花のにほひのみかはらぬとよめり

人はいさとかこちたる也 をしかへし人はいさとよめる也、  
故郷とは久しくみし宿也

と、第一類の消去をそのままに踏襲するのであるが、同類延

本は、

はつせにまうつることに 貫之は初瀬を信してつねにまい

りける也、又かくさたかに、（）やとりはかはらすあるといへると也

人はいさ心もしらす 花のにほひのみかはらぬとよめり、  
をしかへし人はいさとよめる也、古郷は久しく見し宿也

と、先述の第一類から第二・三類への基本的移行をとり、第三類と同じくする。纒かながらに、第二類に於ても、かく第一類の残滓と刪省の異同を見出す処もある。その間の事由は測るべくもないが、既に転写経過上の問題であろうかと推測されるのである。

第一類より第二類への既述の移行を辿った第二類系は第三類への推移に於ては、次のごとき文脈の整備・改訂を主軸として稍々趣を異にしている。前者に比し晩景の講授に見る意図的変改か否かは決しがたいが、些少のそれは存したのではあろう。例えば、第二類の巻第一春歌上92番は、

花の木もいまはほりうへし うつろふ色に、世の人のなら  
はん事を制セイしたる心也不善なる事ニ中・東本、上記見消チ本文アリ  
人ならひけりといへるも、我心をことくさにいへる也、非恋  
心、今はとは色なる花に心のうつる時をいへる也、春たては  
とは、春になりて花のひと比とみるへし 九本、古本「非恋心」作意

延本ハ「花のひ」トアリ  
とあるを、第三類に於ては、

花の木も今は堀うへし うつろふ色に、世の人のならはん  
事を制したる心也、うつりやすきを思ひかへしたる心也  
人ならひけるといへるも、我心をことくさにいへる也、非  
恋心、春たてはとは、春に成て花の比とみるへし、今はと  
は、色なる花に心のうつる時をいへる也 底・国本

と、「春たては云々」と「今はとは云々」の句積の章を変位するにすぎない。敢て更改の理由を探るべくもないが、総積に続き、下句の結語の積より転じて、第二句の「今」の意を強調する歌意に沿ったものでもあろうか。ともかくとして、第二類から第三類への本文上の改変の基調は叙述形態の安定化にみられるのであり、積義上の著しい改補の跡はもとより認められないのである。因みに、第一類本の異同も傍記したが、既述のごとき見消ち部分である。付言するまでもなく所掲諸本には相互に独自の異同の存するのは勿論である。

本来、同一奥書に源を発する各本である故に、寧ろきわだたしい異同が見出されないのは当然であろう。しかし当初に、既述したごとくに第一・二類本系と第三類本との間に於ては、その

仮名序にては、叙述文の改訂、又、文脈の構造においても一見同一の聞書かと疑うの印象を避けがたいほどに相違するのである。次に、一例として、その六義の結びの一章を掲示することにする。因みに翻印本文篇に於ても別掲併載したのも、その故である。

### 第一類は

おほよそむくさにわかれん事はえあるましき事になん

いつれの哥も六義にはなるへからすといふ心也、当流用

此義、又説、六義によく分別する事はえあるましきと也、

此義は貫之か六義に分事をかくいはん事は、かりあり、

仍不用之、此詞は注者の卑下なるへし、小注を貫之作と

用る心は、ひとへに貫之を仰きたとふる義也、本の六義

も貫之かあやまりたるにはあるへからす、聖人作して賢

人述すといふかごとく、大躰を出すのみなるへし、しか

るをもし後人の注ニ相当する哥をしるさは、貫之か心に

もそむくへからざる理也、政の正しきをほむる心よくあ

たれり

六義之中、風雅頌ハ政の名也、君化下者名政臣述之、於  
詩則名風雅頌、取政之名為詩之目、而事積テ漸クスルコ

トアリ、教化ノ道ハ必ス先風動シテ後ニ物ノ情ステニサ  
トリテ教化ト、ノホリタ、シクシテ其後ニ能ヨク物ヲイ  
レテ功成也、故ニ風動ノ初ヲ云ハ名之風、齊正之時ヲサ  
セハ名之雅、成功之後ヲイサナヘハ名之頌云々  
六義いつれも政のためならずといふことなし

哥の道上古は教誡の端たり、花鳥風月の耳目におつるの

みにはあらず、世を治め身をたつへき道也

六義は品をわかち法度を定る義也、是殊勝之理也

風雅頌之中、特ニ雅一を執する事あり、正しき道を本と

する故也、周詩に思无邪に同じ、此義肝心なるへし、当

流説也

詩六義次第をたつる事あり、和哥に異なり

と叙述している。第二類本はいずれも右掲本文の見消ち部分

を削去すれば其儘に同類本文となり異なる処はない。既述中

所見した通りである。しかるに第三類に於ては

おほよそむくさにわかれん事は、

いつれの哥も六義ニはなれたるはあるへからす也、貫

之注之、当流ノ義也、又説、六義ニよく分別せむ事はあ

りかたき事也<sup>云々</sup>、小注の作者の心にや、此義貫之をとともくやうなれば有憚、ゆへに不用之也、尤貫之を仰きたとふる故也

又たとへ後ノ人の注なりとも、難分別シ之由は卑下の心なるへければ、はかりあるへからず、然而二条家には猶以先哲をもとく理にみる人もあるへき所をはかりて、不用之也、但貫之も謙して書る詞たるへしと<sup>云々</sup>

又、本に出せる六義の哥も、貫之あやまりたるにはあるへからず、聖人作して賢人述すといふ事あれば、先大躰を出すのみなるへし、後生にても相当したる哥を注せん事、貫之の心にもそむくへからざる理也

凡六義いづれも政のためならずといふ事なし

哥の道上古は教誡の端たり、花鳥風月の耳目におつるのみにあるへからず、尤世を治め身をたつへき道也

六義之中、雅を執する事あり、正しき道を本とする理也、周詩ニ思无邪を用る同心也、畢竟此義を肝心とす、当流の心也、詩六義ニ次第をたつる理あり、和哥に異なり

国本、底本ハ返点・送仮名等ヲ欠クノ他異同ナシ

と、本文は改められている。斯様な改変は又此仮名序のほか

に所見されぬことに、その縁因はあるのもあろうか、所掲本に於ては既述したごとくに、一は前関白尚通系に、一は地下連のいわば同衆への流れに起因するところがあるいは存したかとも臆測が走る。一方、肖柏から尚通への伝授は永正八年の事であり、肖柏から宗訊へは永正三年春のことと稍々早く、且つ、宗訊から竹田治房への印可は天文十五年と永き隔りをもつが故の変易とも想定されるが、他巻は既述のごとき自然な推移による安定化であれば、前記の臆測もあながちの附会でもあるまいかと思われるのである。それにつけても思合わされるのは、寛永版「両度聞書」との余りにも符合する事実である。それは、両流の是非はともかくとして一堺伝授の流派のごときと、堂上との間には、就中仮名序をめぐる伝授のありかた、そのものに位格の差等のごときが働いていたのではなからうか、と懷疑の念にかられるのである。惜しむらくは、宗祇終尾の伝授、「宗碩聞書」に序注一卷を欠くことである。疑念を払うの、あるいは一端たり得たかもしれない。それも又、秘卷たる所以でもあろう。

如上、第一〜三類の間の概要を略記したが、右記仮名序のどき、結句その源を同じくする流れのなかの現象として所掲諸本は把握し得るものである。

縷述の煩を重ねて付言するに、所謂「古聞」書名は、第一・二類に、宗祇本を以て書写した真名序に、「古今和歌集序聞書」とあり、第三類に、仮名・真名両序に、「古今和歌集序聞書」と序題を誌すほかに、その内題を書するところがない。―因みに「古聞」・「古聞抄」あるいは「延五秘抄」・「古今抄」と称するもいずれも又後人の付したる外題であり、本来はやはり「古今和歌集聞書」と呼称されるべきものである。<sup>註七</sup>従つて此等書名は、その内容に何等関わるものではないのは云うまでもない。ただし、古今集各巻の部立を標示するために、端作りとして巻第一・二・二十の数巻をのぞくと極めて簡略な一例え、ば、「古今 第四」のごとき―標記をもつて代えている。それら表記については、(二)講釈次第の項に諸本併せ掲示したが、諸本異同は纔かに国会本の一例(巻四)を除けば、巻十八に、第一・二類が「雑下」<sup>十八</sup>、第三類に「雑哥下 十八」と微細な相違を見出すのほかは、簡短な略記を含めて全く同じくしている。この形式上の事實は、他面に於ても屢々散見するところであり、各本間相互の本文異同はともあれ、所掲本が如何に祖型を崩すことを避けつゝ、第一類から第三類へと転じていった経過を見逃すことは出来難いのである。

註一 底本たる宗祇本は該書新装訂時に於て本来巻九齋旅歌注の奥に存すべき「文明十三年九月三日 十五度」の記を、後述するごとく巻十物名注尾に誤つて改綴している―同解題参照。

註二 国会本奥書第二表(5)傍注に、「海追老能勢因幡守」と朱書している。芳賀矢一編「日本人名辞典」には、「細川家の臣。永正頃の人」と記す。同一人であろう。井上宗雄氏「中世歌壇史の研究 室町後期」に本聞書に言及され、「……文龜三年二月能勢因幡守頼則細川被官に聞書せしめ」と誌されるほか寡聞にして猶明らかでない。

註三 国会本第二表(6)傍注に、「右同日州飯肥住人隈江氏筑後入道」と朱書され、井上氏上掲書には、註二の掲出文に続き、「永正三年八、九月には真存(隈江氏。後記のように薩摩の人ともいい、春夢草には『日向国に帰りくだりし時』とあるように日向の人ともいう)及び友弘に相伝した」と誌されている。又同書に蓬左文庫の「古今和歌集」五冊につき述べられ、

……ほぼ延五秘抄と同内容だが、末には……

一流薩摩国鹿兒嶋郡真存於泉堺自肖柏伝奥書



永正三年冬真存依有相伝令附属之畢 夢庵判

の記を示されており、同時に「手爾葉大概抄並手爾葉大概抄之抄」にも「永正二年夢庵が真存」に伝えた奥書のある由を誌されている。

註四 堺連歌歌壇の中心的存在であった宗訊につき、此処に言及するまでもないが、彼の生年については、右掲国会本奥書(13)に所見する「古伝」による「永正三年<sup>丙寅</sup>九月卅日 友

弘二十四歳」、又同(14)に見る「天文五年六月十八日 養松四十

一歳<sup>五十四歳</sup>／宗訊」に准拠算定するものであるようである。底本に

誌す印可―同表⑤―も又永正三年初冬の事であるので、現在の処、若年二十四歳の年代に於ける伝受とするのはかはない。

又、底本の宗訊―竹田治房のそれは、従って四十年後六十四歳の晩景のこととなる。

註五 大阪府立図書館蔵「古今集宗祇略抄」二冊―函架番

号甲和二七九―は上記両本と同一書であるが、該書にも同じく文明十七年、「五月十一日」(恋五巻尾廿五首)、「五月十一日夕」(哀傷卅四首)、の同記が所見され、片桐洋一氏「中世古今集注釈書解題 三上」に指摘されている。

註六 竹田治房なる人物については全く未詳である。猶今

後の調査を俟つことにする。

註七 「古聞」(中院本・国会本)、「古聞抄」(内閣文庫本)、「古今抄」(東北大本)、「延五秘抄」(内閣文庫本)等、各書名は孰れも後補外題である。「古聞」、「古聞抄」、「古今抄」は共に「古今和歌集聞書」、又は「古今和歌集抄」などから派生した略称と想定され、「延五秘抄」が稍々異質ながら、堯恵の「延五記」に由来し、「延五」は「延喜五年に撰進された『古今集』」を指す―註五上掲書―とされるが同様に略称と看做される。しかし、諸本真名序に「古今和歌集序聞書」とあるはともかくとして、第三類―底・国本―の仮名序にも、「古今和歌集序聞書」と記していることから、既に伝授の當時からの本来の呼称として認められる。

## (二) 諸本書誌

京都大学附属図書館中院文庫蔵「古聞」(外題)〔近

世初〕写―函架番号<sup>中院</sup>VI 69

袋綴、三冊。本文共紙表紙、第一冊、豎二十九・三纏、横二十一纏、第二冊、二十八・五纏、横十九・四纏、第三冊、豎三十纏、横二十一纏。料紙、楮紙。每半葉十四行。字面高サ約二

十二・八種、釈文一字下げ。歌は上句のみを掲げ、詞書・作者名は多くこれを刪省するが、釈註に依り略記している。本文墨付、第一冊七十一丁、第二冊九十八丁、第三冊五十八丁。

外題、表紙左肩に、第一冊「古聞 至旅 三之内」、第二冊「古聞序十廿」と本文同筆打付書している。第二冊には何故か外題を欠く。内題と目されるものは、真名序末に「古今和歌集序聞書 以宗祇本写之」と記するのみである。他は古今集各部立を端作として略記しているのは、既述一覽―講釈次第中―しごとくである。

本書の各冊編成の次第は、

第一冊 古今二字事・和哥事・春哥上ササキ鬪旅哥、第二冊 恋哥一ササキ雑躰、第三冊 仮名序・物名・大哥所御哥等コノ・真名序・初作詩賦 七言之志

の釈文と構成されている。恐らく初度文明十三年の講説次第を追って編綴されたのであり、当聞書の構成は元々本書の形態が正格のものであったかと想定される。

本書の奥書は既に一覽したので再記を省略するが、第一・二類共に、永正八年肖柏より前関白尚通にと伝流した当聞書の転写一本である。肖柏の出自が中院家にあつたことを想うの時、

本書の奇しき書承の経由が偲ばれる。右の真名序末、永正八年の尚通識語に続き、本書は次の転写識語を誌している。

天正十二年霜月十五 / 前内大臣

前内大臣は誰人なるか未だ確認しがたい。天正十二年時の前内大臣は、今出川晴季四十六・徳大寺公維四十八（公卿補任）の両名に絞られるが、本書は花押等を欠く転写本であり、猶その孰れなるかを決めがたい。識者の御教示を俟つものである。

第一類を代表するともいえる本書の特徴は既に述べたごとくである。詳細は校勘篇を参照されたいが、その主たるは、以下第二・第三類本の前形態をとどめ、草稿的な見消ち―刪節部分―を併せ載録していることであり、その二には第一・二類共有の堂上家伝流と想定される仮名序注である。第三類とを離隔する最たる主点ともなっている。

猶本書の朱筆部分につき付記すれば、講説日次第・声点・合点等である。講説日次第は既に一覽したごとくであり、諸本相補って再現し得るのである。

本書の系統本として、所掲本の中では次述の東北大学附属図書館蔵本が存する。書写年代は稍々降るが、同一依拠本系による転写一本であり、本書と殆んど異るところはないが相互併せ

斟酌すべき伝本である。

又、本書には、第一冊春哥上29番注末に、

此分押捺也

又明応四七六

初日至于此

と朱書追記している。第一類東本・第二類九・古本に同様に

付記している。第二類延本と第三類国・底本に此記を見ぬ。こ

の押紙の記述からは、明応四年次の講説日を誌すごとくである

が、諸本奥書には同年の伝授の記は見えず、ただ、同五年七月

上中旬に素伝奥書の「祇公聞書」を見合せ加筆することを書留

めているにすぎず、此記と対応する記述を所見しない。未詳

なるままに掲示しておくが、更に第三冊真名序末に、前者同様

に、第一・二類本―但し、東本ナシ・延本欠巻―に「本押捺」

と付記する左掲のごとき註文を追補している。恐らく第一・二

類本の依拠原本たる尚通書写本に存したものはなからうかと

推測されるのであるが、前者の明応四年講釈日付と共に、その

来由を審らかにしがたい。その記には、

本押捺也

雖天神之孫海童之女、彦火々出見尊ト豊玉姫トノ御

事ト用彦火々ハ日神の御彦也天神之孫ニ皇孫ト申マス木

花開姫ト和哥ヲ通シノ玉ヒシ事アリ此二ノ事ヲ云ヘキニヤ

云々／例ヲアマタ引ニナルヘシ

云々／例ヲアマタ引ニナルヘシ

同  
今はたえずなるといへるもいひひ／なしたる義也他流に不立

なる／といひなせるにおなし

本云

右四十二枚也件本卅八枚也―上記一行ナシ(九・古)

と誌している。本押紙筆者は又審らかにしがたいが、永正八

年書写者、尚通を想定するのが又妥当でもあろうか。

東北大学附属図書館蔵「古今抄」(外題) 〔江戸

前期〕写

袋綴、三冊。淡茶色布目表紙、竪二十九糎、横二十一・二糎。

料紙、薄様斐紙、每半葉十行。字面高サ約二十五糎、積文略一

字下げ。歌は上句のみを掲げ、詞書・作者名は多く刪省するも、

積註に応じ略記するのは、前掲中本と同じくしている。本文墨

付、第一冊八十三丁、第二冊九十四丁、第三冊百四十丁。

題簽、表紙左肩に斐紙短冊を貼付し、「古今抄 一(一三)」

と本文同筆にて墨書している。内題は、又中院本と同様に真名

序末に「古今和哥集序聞書 以宗祇本写之」のほか、これを欠き、

他は古今集各部立を略記するにとどめている。既述講釈次第中

に一覧した。

本書の各冊編成は、

第一冊 仮名序・物名・大和所御哥等・真名序・初作詩賦七言

之志、第二冊 古今二字事・和哥事 春哥上ノ騷旅哥、第三冊  
恋哥一―雜躰<sup>サツライ</sup>

の釈文に構成され、前掲中院本と各冊次第を稍々異にするが、本書が中院本第三冊を第一冊に排したにすぎず、以下諸本にも所見するごとく書写者又装訂時の任意的編成によるものである。

本書も前述したごとく、前掲中院本と同じく永正八年に肖柏・尚通とその伝流を誌す奥書―第一表(八)―を共有する同一系統本である。しかし猶その奥書には多少の差異が散見されるところに、前者にみる次の記述部分を欠いている。即ち、第一表の、(七)・(十八)・(十九)・(二十)の四項である。

その中、(二十)は天正十二年前内大臣の書写奥書であるところから、本書は直接には此書写奥書本系に拠る転写本ではないことを明らかにするが、(十八)・(十九)の両奥書は、就中(十九)のそれは、卷九騷旅歌又卷十九雜躰末に誌す(八)(十四)の奥書と同じくするものであり、真名序尾にも本来併記されるべきすじめのものであろう―因みに第二類本はすべて併存する、但し延本欠卷―から、恐らく本書、又はその依拠本の単なる欠落と推測されるのである。又(七)は右肩に「本云」とあり、この「本云」の本は猶審らかにしがたいが、いずれ付

記的な意味合のものとして漏脱される可能性も存したのであろう。同様な「本云」の記述が(十三)に誌されていることから予想されるのである。第二類系の九・古本共にこれを誌していない。

いずれにせよ、本書は奥書に於て右述の異同を見出すが、第一類伝本として、その特徴を示す見消ち省節部分を中院本と共持し、又第一・二類本と第三類本とを顯著に類別する文脈上の構成とを殆んど同じくする転写一本であり、当然の事ながら、本文上に於ては校勘篇にみるごとく異同する処は極めてわずかにすぎない。言及するまでもなく、講説次第・声点・合点等の付記・符簽も又略同様である。

又、既に中院本にて記したごとく、第二冊春哥上29番注末に、  
此分押紙也  
又明応四七六 初日至于此

の記を同様に所見する。しかし、一方、中院本・第二類本―但し延本欠卷―に存する真名序末の「本押紙」と付記する註文追補の部分を欠いている。それも又、転写経過上に於ける誤脱でもあろうか。

次に、本書には兩種の押紙が見出される。その一は、本文とは別筆の江戸期のもの、恐らく旧所持者の追補か、一葉が第一

冊真名序末に貼付されている。参考までに掲出すると、

宗祇御師東野州古今伝受は文明三年の比と相聞え申候／

異本宗祇古今両度聞書抄之奥書ニ云

伝受之後宗祇庵主此一帖以被<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>常縁<sub>ニ</sub>所存少<sub>ク</sub>加<sub>レ</sub>筆、

／加<sub>レ</sub>詞者也門第随一思尤在<sub>レ</sub>之仍為<sub>レ</sub>後証<sub>ニ</sub>又加<sub>レ</sub>此詞<sub>ニ</sub>早

文明四年五月四日

右御返候へく候此例にならひて

所<sub>ニ</sub>一見<sub>ニ</sub>存分無<sub>ニ</sub>相違<sub>ニ</sub>尤以無<sub>ニ</sub>比類<sub>ニ</sub>者歟

此奥書宗祇いたされ候歟

此鈔物板本ニ候へく候宗祇聞書之抄とは大キに同しくして

／少<sub>ク</sub>の異候へく候珍鈔好本之最歟候へく候□□□□存候歟

と誌して、文明四年両度聞書に見る常縁の加証奥書の例を挙

げ、本書奥書（十五）につき言及したものである。

その二は、東北大学図書館収蔵期以前か以後かは猶未詳なが

ら、その時期を前後する頃の―或は蔵書印より旧蔵者三矢重松

氏の遺墨の跡か―第一類中院本との巻冊次第・奥書の異同を対

校付箋したものを主とする。宗祇・肖柏・尚通花押なども併せ

模写し貼付している。校勘篇には殊更にその必要を認めず刪省

したので、その各一・二例を挙げるにとどめる。

まず各冊編成については、

中院家本 古聞ト題シ之ヲ下巻トス（序・卷十・廿）―第  
一冊仮名序巻初

中院本 之ヲ上巻トス（卷一ヨリ九マデ）―第二冊春哥上巻初

中院本 中巻トス（卷十一ヨリ十九マデ）―第三冊恋哥一卷初

と誌し押紙を貼付している。又、奥書に就いては、中院本に

存し本書に欠落する第一表（七）・（十八）・（十九）の奥書記述

は、押紙に同記を移写し、「中院本」（七）、「中院本コノ次ニ」

（十八・十九）と記し、同文を転写し貼付している。そのほか

にも（八）奥書署名「前関白老人判」左傍に付箋し、

前関白老人 近衛尚通公ヒキミなと歟も可有候へく候半歟

の如き追記が散見される。あるいは又一部には直接に朱校を

付す処なども見出されるが、如上の範囲にとどまり、本文にま

で及んでいない。

印記 各冊巻初に「三矢氏／蔵書ノ之章」方形朱印が捺され

ている。

九州大学文学部国語学国文学研究室蔵〔古今和哥集

聞書〕〔江戸中期〕写

袋綴、三冊。縹色艶出表紙、竪二十四・三纏、横十九・八纏。

料紙、薄様斐紙。每半葉十二行。字面高サ約二十・二纏、积文

一字下げ。歌は上句のみ揭示、詞書・作者名多く省略す、但し  
釈註に應じ略記するのは諸本と同じくする。本文墨付、第一冊  
八十三丁、第二冊百十六丁、第三冊百四十九丁。

外題・題簽等はなく、内題は前掲二本同様に真名序初に「古  
今和歌集序聞書 以宗祇本写之」と誌すのみである。他は古今集  
各部立を略記し標目としている。既に講釈次第中に一覽した。

本書の各冊編成は、

第一冊古今二字事・和歌事・春哥上キウゴ・露旅哥、第二冊恋哥一  
雑躰サツライ、第三冊仮名序・物名・大哥所御哥等・真名序・初作ハシメテ詩  
賦フ・七言シツゴン之志

の釈文に巻第されている。屢々記したごとくに、その編成は  
恣意・任意に抛るところが多いが、本書の次第などが講筵に准  
じた妥當な構成であろう。

本書も又、第一類本と殆ど同一の奥書を共有する―第一表参  
照―。且つ永正八年に肖柏・尚通と、その伝流を誌す処―同表  
(八)・(十四)・(十九)―も第一類と同じくする。纔に同表  
(七)・(十三)の付記的記述、「右五十二枚 件本六枚也」(七)、  
「右七十枚 件本五十八枚也」(十三)、を欠くほどにすぎない。  
―因みに、第一類中院本真名序末に存する同表(二十)「天正

十二年……前内大臣」の書写奥書は言うまでもなく本書に誌す  
ところではない―。

従つて、当然の事ながら、その奥書からは第一類本の本文が  
予測されるのであるが、上述の諸本系類に於て概要したごとく、  
第一類本に多々所見する見消ち省節部分を、本書第二類に至る  
と、その過半を削去し、猶そのわずか一部をとどめているのが  
―但し延本は殆んど除棄する―此系類の特徴を提示し、次述  
「古聞抄」と極めて類縁する伝本系列をなしているのである。

序でに、第一類本に見えた押紙追記について触れると、第一  
冊春哥上29番注末に、

此分押紙也  
又明応四七六 初日至于此

の記も存し、第三冊真名序末にも、

本押指也  
雖天神之孫海童之女、彦火々出見尊ト豊玉姫トノ事

ト用……

同  
今はたえすなるといへるもいひ／なしたる義也……

の両記を所見して、一押紙追記までも同じくし、その祖系を  
継承するものであることを明らかにしている。結句第一類と第  
二類を別する処は見消ち省節の存否如何に係わるのである。そ  
の他、些少の異同は校勘篇に見るごとくである。

偕、本書には所謂「古聞」とは別して、「御師説」、「私」勘なるものを更に同注一字下げに付載している。殊に前者は約四百四十箇処に及び同注を補説するところがあり留意される。本文篇に抄出載録したが、数例を掲示し、その具体的内容の一端を見ることにする。

御師説初春トヨム、初ハ漢音也、初ハ吳音也―卷一11

御師説四河入レ海同一甘味、唐ニ名川モあり、又にこりたる川モアレトモ、それモ海へ入ては同ト也―卷十七888

御師説誄ソシといふは、よき人のうへもあしき人のうへも、先わろロニ云心也、真正シンヤウに物をいはぬをそしるトいへり、先ひほうして後に、よき事に成ことく、誄諧ハイカイはされ事のやうにいひて、まことの道に引いるト也―卷十九誄諧歌

御師説時鳥の下ニアリ、空蟬のカミニアリといへるは、物名の所ニ時鳥とうつせみの哥の間ニ此哥けしてありし也、墨けしは定家の筆也―墨滅歌1101

の如く、「古聞」注文に見ぬ字音・出拠・釈義・切継のごと  
きにわたるもの、又更に、

御師説心さしふかくそめてしの哥をは忠仁公のなれとも、  
よみ人しらすトありてこゝに又あらはすは、題しらすにた

いして也、又前書にそめとのゝなとゝのかれぬゆへ也、花をし見れば、そめとのを祝して也―卷一52

御師説残りなく散そは花をみたてゝの哥也、これはまたちらぬ花也、我もちりなんは花をわか方よりさそふ躰也、当世はよまれましき風躰也―卷二77

と、一首の結構・排列・総釈を概要し且つ当世の詠作とに敷衍する師説に、いわば伝授形式を稍々離析した時代の趨勢が其処にかすかにも感知されるのではなからうか。

本書の書写者はもとより知るべくもない。添記する「私」勘に「私凡ヲウシトモヲウシトモニ条家ニハヲウシトヨム」―卷一30、「私シ以テ墨ヲ」墨ニテケシタル分ヲコ、ニアツメテ書たる也―墨滅歌、等敢て注目すべき私勘を所見するところではないが、この「私」の云う「御師説」の阿誰なるやを寡聞にして確認するに至らぬが、同補説より類推するに、肖柏門流の、地下連歌を荷う相応の者を想定するのが自然ではなからうかと思うのである。ともかくも、本書はこの「御師説」付載が第二類本に於ては顕著な特色を提示している。

猶本書の朱筆箇処は、講釈日次・清濁声点・合点等である。又、間々朱書入れと朱振仮名が散見される。

国立公文書館内閣文庫蔵「古聞抄」(外題) 〔江戸

中期〕写

袋綴、三冊。縹色表紙、竪二十五・九糎、横二十・一糎。料紙、薄手斐楮交漉紙。每半葉十行。字面高サ約二十三・五糎、積文一字下げ、歌は上句を掲げ、詞書・作者名多く刪節する。但し積註に対応し略記している。本文墨付、上冊百四丁、中冊八十丁、下冊百三十九丁。

題簽、表紙左肩に金泥山水模様短冊を貼付し、「古聞抄上 延五秘抄」と誌す。但し「延五秘抄」は別筆朱追記である。中・下冊共に題簽を欠き、同左肩に「古聞抄 延五秘抄 中(下)」と打付朱書している。内題は前掲本同様に、真名序初に「古今和哥集序聞書 以宗祇本写之」とあるのみにて、他は古今集各部立を略記し標目としている。諸本併せて既に講釈次第中の一覽した。

本書の各冊編成は、

冊 古今二字事・和哥事・春哥上ウツトコ・驕旅哥、中冊 仮名 上序・物名・大哥所御哥等・真名序・初作詩賦 七言之志、下冊恋哥サシイ一ツ雑ツ歌

の積文順序となっている。仮名序注以下の秘卷を中巻に排し

た理由は明らかでないが、偶発的な結果にすぎぬものであろう。

本書も又、前掲第一・二類本に共通する永正八年に肖柏・尚通と伝流する転写一本である。第一表中に於て見ることく、九大本同様に(七)・(十二)の付記的記述、「右五十二枚 件本六枚也」(七)、「右七十枚 件本五十八枚也」(十三)を欠いている。本云同表(二十)は繰返すが第一類中院本のみ存する書写奥書である。但し、本書のみ同表(二)と(三)の間に、

如件本加朱点校合早

と朱書補入している。しかし、この校記は同表を一瞥しても判るように、本来(八)の「僧肖柏免一覽間……」と「永正八年……前関老人」の間に存すべき同記が誤って該位置を変えたにすぎない。

いずれにせよ、本文は第二類本の諸特徴を具備し、校勘篇に見ることく小異は存するものゝ前記九大本に極めて近似し類縁系列をなすものである。

又、前掲諸本に所見する押紙追記「卷一春哥上29番注末と真名序末(中院本解題に掲出)」は本書に一部誤脱を見るが当該部に同文の記を移写していることを併せ付言しておく。

且つ、本書に於ても講釈日次表記は一覽したごとく第二類の



中でも九大本に近く、又、清濁声点・合点等も略同じくしている。

印記、「和学講談所」「浅草文庫」「書籍／館印」の各印を各冊第一葉に捺す。

付記

本書には、次の別筆二種の押紙が仮名序注の中に貼付されている。(イ)は稍々時期は降る文化年中、(ロ)は本書書写年代と略同じくし本文同筆敷と推測される。参考までに掲示する。

(イ)文明元<sub>己</sub> 丑年<sub>ノ</sub>文化十一<sub>甲</sub> 戌<sub>ノ</sub>年迄三百四十五年ニナル<sub>ノ</sub>

文明十九年<sub>ノ</sub>文化十一年迄<sub>ノ</sub>三百二十七年ニ成ル

年号順

文明十九年統 長享二年統<sub>ノ</sub>延徳三年統 明応九年統<sub>ノ</sub>文

龜三年統 永正十七年統

宗祇 肖柏<sub>号牡丹花ト</sub>

八十二才

(ロ)私 口伝とあるは東之家切帯貫定分別の事成ヘシ<sub>為家卿了</sub> 依可見分

簡事 条肝要ナリ

と誌している。

国立公文書館内閣文庫蔵「延五秘抄」(外題)「江

戸後期」写 存仮名序・卷一〜十五注

袋綴、三冊。香色表紙、縦二十七糎、横十九・三糎。料紙、

楮紙。每半葉十行。字面高サ約二十一糎、積文一字下げ、歌は

上句を掲げ、詞書・作者名多く略省、但し積注に准じ略記する。

本文墨付、上冊百二十九丁、中冊六十丁、下冊八十五丁。上冊

に一箇処錯綴が存する。即ち、同六十丁(171注尾より176注首)と

六十一丁(168注後半より171注前半)とを誤り綴っている。

題簽、表紙左肩に花卉文短冊を貼付し、「延五秘抄上(下)」

と墨書する。中冊は剝落し、該所に「延五秘抄 中／古今抄中」

と別筆後補、打付書している。内題は真名序以下を欠落し唯一

のそれを所見しないが、第一・二類諸本と同じくするのである

う。他は古今集各部立を略記し標目としている。既述講積次第

中に一覽するところである。

本書の各冊編成は、

上冊 古今二字事・和哥事・春哥上ノ鬨旅哥、中冊 仮名序・

物名―以下大歌所御歌等・真名序注欠落、下冊 恋歌一ノ恋

〔歌〕五―但し77注首迄、以下落丁、

の積注序次となっており、その編述は前記「古聞抄」と同じ

くする。これも又後人の任意に拠る偶発的な結果であろう。

本書の落丁部分に就いてであるが、上冊末―卷九―奥書の尾

に、

上巻 自春部至躰旅部以上九巻

と誌し、又、中冊末―巻十―奥書の尾に、

中巻 仮名序物名部大哥所御哥奥書真名序

と所収巻名を誌しているところから、此中冊に見る欠落はこ

れ又偶発的なものにすぎないであろう。

下冊は恋〔歌〕五七六番の注、

うへていにし秋田かるまで

月日うつりて待人もほとへたる心也

を以つて終り、同丁六行以下を余白とし、その処に、

這抄三帖者近衛殿尚通公従肖柏伝於秘説者也／才十五之巻

半ヨリ末闕重而尋探可修補尤不／可出深底耳

天文元年壬辰

正二位重治判

と誌している。天文元年、前権中納言田向源重治註一の識語によ

つて、尚通系の「古聞」伝本中には、かく欠巻部をもつ伝存本

が存したのである。その経由は辿るべくもないが、本書はそ

の転写一本である。

備、本書もその奥書により第一・二類本に見る永正八年に肖

柏・尚通と経過する伝流一本であるが、本書は前掲天文元年源

重治の識語に至る間、永正十一年、尚通より権大納言藤某への

伝授の記を掲げている。即ち、巻九末と巻十物名尾―本書巻二

十・真名序注を欠落するに因るかに、

此注僧肖柏伝後法成寺関白太政大臣准后法名大証于博陸尚通公々々又／授於予既師資相承抄也

敢不可／忽緒焉

永正十一年三月廿八日／ 権大納言藤

と、巻九末奥書（八）の次に誌している。巻十のそれは全く

同文にして「後法成寺……」以下の傍記を欠くのほか、年紀が

「永正十一年二月廿九日」と異なるにすぎない。これにより権大

納言藤某註二が永正十一年二月廿九日より同三月廿八日の間の頃、

尚通よりの伝授があつたのであろう。永正八年より三年の後の

事である。ともかくも、本書は、尚通―権大納言藤某―源重治と

継承された「古聞」の末流転写一本と認められるべきものであ

る。

永正十一年藤某の奥書に続き、

右紙数文字アル分六十六丁 奥書二枚／以上六十八枚也

上巻 自春部至躰旅部以上九巻―巻九末

右紙数文字アル分五十一枚奥書二枚以上五拾三枚也

中巻 仮名序物名部大哥所御哥奥書真名序―巻十末

と誌している。藤某本の所収巻と丁数でもあろうか。ともかく、この永正十一年から天文元年の間に既に欠落巻をしめす伝存本となつたのであろう。

本書の奥書も第一表中に校異するところであるが、本書は同表(一)から(十八)の記述を共に書写している。但し他本に比し誤脱・誤写が散見する。その顯著なるものを拾うと、(一)の日付「九月三日聞之」を書落し、(八)の「如件本加朱点校合早」等を脱す。又一方(七)は「件本六枚也」を「件本四十六枚也」と愚直に訂す処もある。同表からは総じて他幾らかの誤写が所見されるであらう。奥書のみならず講釈次第日付に於ても多々欠漏するところが見出される。朱清濁声点・合点等も諸本と異り全く移写されていないのを思併すれば、永い転写の経過が想定される末流の伝本であるが故でもあろうか。因みに巻一29番に第一・二類に存する「又明応四七六 初日至于此」此分押番の付註も本書には移写されていない。

本書の本文に就いては、既述の掲出本系類中に概略したごとく第二類本に属するが、九大本・古聞抄の中に猶残存する見消ち省節部分を更に排除しているのが本書である。その意味では第三類本に近接してゆく傾向にあるが、恐らく、それも転写経

過に想定される見消ち削除の傾向に由因されて整文化された結果であらうかと推測されるのである。しかし第二類本の中では誤写・誤脱を含め異同が散見される伝本である。

印記、各冊巻首に「浅草文庫」朱印を捺す。

国立国会図書館蔵「古聞」(外題) 「江戸初期」写

袋綴、六冊。浅縹色竜文空押表紙、竪二十六・二纏、横二十・二纏。料紙、斐楮交漉紙。每半葉十行。但し仮名序注十二行。字面高サ約二十二・五纏、积文一字下げ、歌は上句を掲げ、詞書・作者名を多く省略するも积注に応じ略記するところもある。墨付本文、第一冊七九丁、第二冊二十四丁、第三冊七十三丁、第四冊七十四丁、第五冊四十九丁、第六冊三十六丁。仮名序注をのぞき各冊末上辺に「墨付幾丁」と上記丁数を誌す。

題簽、表紙左肩に打曇短冊を貼付し、「古聞 一(一・三恋部・四・五・六序)」と墨書している。内題は、真名序・仮名序巻初にそれぞれ、「古今和哥集序聞書 以宗祇本写之」、「古今和哥集序聞書」と記すが、他巻は古今集各部立を略記し標目としている。既に講釈次第中の一覧した。

本書の各冊編成は、各冊遊紙裏に、

第一春上 第二春下 第三夏／第四秋上 第五秋下 第六冬

— 第一冊

第七賀 第八離別 第九羈旅—第二冊

第十一恋一 第十二恋二 第十三恋三／第十四恋四 第十五

恋五—第三冊

第十六哀傷 第十七雜上 第十八雜下／第十九雜上—第四冊

第二十物名 第二十大哥所御哥／真名序—第五冊

古今和哥集序聞書—第六冊、但し專卷たるより記せず

と構成され積注されている。その編述は講釈経過からみて、

第五・六冊に妥当性を欠くが既述したごとく装訂時又は古今集巻序に因る後人の再編であろうかと推測される。

本書の奥書は既に奥書第二表に宗訊加証本と対比し一覽し、

その伝授過程を併せ概要した。同表により明らかのように、本

書は永正三年八月より九月晦日に至るの間、夢庵（肖柏）—真

存法師伝受、友弘（宗訊）同聴の経過に至るまで記述—同表②

・(6)—を中院本と共に基本として同じくし、いわば肖柏の堺伝

授への端を録している。そして、本書は更に真名序注末に「古

伝」として、

古伝 永正三年丙寅八月廿五日ヨリ初同九月卅日成／就也但内九月

十四ヨリ十九日迄者指合之／事アリテ御読なし然者卅日ニ

成就所也

肖柏六十四才

永正三年丙寅九月卅日

友弘二十四才

と、その詳細を誌している。肩書に云う「古伝」は審らかに

しない。続く次葉には「古伝」の付記を見ぬが、その書様から

同様に「古伝」の記録かと予想される。即ち、

天文五年丙申四月三日ヨリ初五月廿三日／未剋令成就以上及

四十五度相果者也／当座聞書六月十七日火中ニ入早子細者

トモニ（朱、後補）（ノ朱、同上）  
／宗訊依有彼一部ノ聞書付与之儀也

天文五年六月十八日

養松四十一歳

五十四歳  
宗訊

と誌し、永正三年の伝授三十年後、養松なる者<sup>註三</sup>への講筵と伝

授委細を録して、肖柏—宗訊—養松と展ずる「古聞」の一

伝流を此処に見出されるのである。右記録が前掲「古伝」のそ

れを受けるものでなく本書元来の奥書であるとすれば本書は養

松某を経由するところの軽写一本となるのであるが、繰返し再

言すれば、それは「古伝」の書様にして奥書として正格な体を

なさざるの感があり、やはり「古伝」に拠った記録であろうか。

ともかくも養松某に至る伝流本が存し、それは、「当座聞書六月十七日火中ニ入早」、「子細者宗訊依有彼一部聞書付与之儀」という次第によって伝授されたものであり、稍々趣を異にする。

又、奥書に見る宗訊本との異同は、同表に於て明らかであるが、簡略にその概要を誌すと、宗訊本の⑬・⑭・⑮・⑯の四項を本書は載せていない。その⑱・⑲の両項は天文十五年竹田治房への宗訊の伝授であれば言うまでもないが、⑳・㉑については、前者は祇公聞書による加筆の記として本来宗訊本の如く存すべきものである。且つ宗訊本㉒、本書⑳に同記が前出するのであれば終尾―真名序末―に相對すべきかと想定されるのである。誤脱歟とも思われるが猶断定しがたい。また、本書が㉓の項を欠くが、これも又、前半に中院本(六)、本書⑳に「永正三寅自八月至九月卅日」の間、友弘(宗訊)同聴の記があり、本書が宗訊系伝流本であるとすれば、㉔の「永正三年初冬日」の夢庵の印可は併せ掲すべきものと考えられるのである。或は又本書が真存法師系伝流本であれば、その印可の記が存してしめるべきではなからうか。その間の事情は既に推し量りがたく、前項と共に確認しがたいのである。

そのほかにも、本書卷十九末(8)項は「從恋一以上廿二度 兩冊

合卅七度<sup>又哥数少</sup>／以後哥数不定」と、圈点部分を補い講釈次第に及んでいる。又、本書真名序末(9)は「所一見存分無相違／尤以無比類者歟／文明十四春正月日／宗祇」とあるに對し、宗訊本は⑭「存分無相違者也／文明十四曆三月日 宗祇」とあり、宗祇加判の月日に相違があり―第一・二類本「春三月日」―、加証の記も稍々敷衍している―第一・二類本、本書同一のである。更に一例をあげると、宗訊本⑮、本書⑱は、前者「夏之上中下之間」とあるに對し、本書は「六月」と明示している。如上の兩本異同から推測するに兩本は「古聞」伝流を分岐する、その一流たる地下連歌師系の中にあつても別系統に位置するかの念も趨るのである。しかし、校勘篇に見るごとく兩書は極めて近似し相補うところの伝本であるところから異系統として本書を設定することは出来がたく、尙柏―宗訊、一步ゆずつても、尙柏―真存の系統本として位置するものと考えるのである。―もつとも、本書⑭に誌す記述を同⑱の「古伝」と別して對処すれば宗訊―養松の伝流に国会本は想定され、宗訊本は宗訊―竹田治房への流れとして兩本の異同をとらえることが出来ようが、既述のごとく、本書は宗訊本に見る⑮を欠き、又一方本書⑭の記述は「古伝」移写の感が拭えず、本書の伝流奥書としては對

処しがたいところから前記系流を措定するのである。

かく本書本文は掲出本の中にあつては最も宗訊本に隣接し、  
両本は異同する処尠く相互相補つて、その一流を具現するもの  
である。但し、本書には次のごとき顯著な欠落が見出される。  
即ち卷六冬歌314番注の末尾は、

……又貫之か作と云義あり、しからは、やすらかにしてし  
かも一ふしある躰なるへし云々、猶口決云々

と終っているが、宗訊本は「第一・二類略同」次いで、

文武天皇立田川ノに行幸ありて、人丸合躰として読給ひける  
哥をうつしたる心也、されは、文武人丸の二首を古今の古  
の字にあて、此哥をは今の字にあつる也、此哥の心を二に  
云事、御門と貫之との心にあて、二首ニ用る也、仍貫之か  
哥、別にはなし、此哥、冬の巻頭に人事、此集に秋おほく落葉  
の哥あり、冬の落葉に此哥よくあらは也、下の心、春夏焠は  
不定之時也、冬は物皆おさまりて実なる時也、春は花さき、  
夏葉さかへ、焠色付は、皆不実之義也、草木落葉して根に  
帰るは実所の姿也、是王道の大意也、実なる所に心を定を  
けるは、あたなる方へ心をやるも、みたる心はなき也  
と見え、いわば深意の口決を落しているのである。諸本「押

紙」とあるので本書依拠本などに於ける偶発的な散佚に由るも  
のでもあろうか。

その他、瞥見する処を多少拾掇すれば

御抄ニみえたり、『如此事をは、御抄ニも態かくして注し  
給事あり、』此鳥三鳥の一也 卷四208

賀の心は明ならね共、絵に対したる心也、『但、何も少は  
賀の心あるにやと云々、以上二首は春の哥也、』春と題せさ  
れとも 卷七358

など、『圈内を本書注文は欠いている。

一方、本書注文に存し、底本に欠如するところを、此処に併  
せ掲出すれば、

古都とは奈良をよめり、『或説願弘寺をいふともあり、』万  
葉にはあすか寺とよめり 卷三144

秋風すゝしく、『虫の音鹿のこゑ』とりあつめて深行空の  
けはひえんなる比 卷四190

木の本の『落葉をもみるへきにの心也、』落葉の面白きおり  
卷五285

此秋風の哥をもくはへてまいらせはやとの給けんとなん、  
人丸ノ身ニ吹ナへニふりにし人の夢に見えつ云々（朱）  
『人丸ノ身ニ寒く秋のさよ風哥ヲ思けるにや云々』 卷十二

世のうき事の切なるを歎心也、『猶あなたにとよめり』卷

十八 950

又恋の哥にもや、『雑躰なれば恋の哥にてもあるへし』卷

十九 1009

などが主なるものである。その半ばは底本の目移りによる誤脱と認められるが、その異同は書写上の問題に帰せられるものにすぎない。

しかし、次の一例は、底本以下諸本は本書により訂正されるべき処として留意される。まず、底本卷十五恋部上816番を掲示すると、

わたつ海の我身こす波「立かへりあまのすむてふうらみつ  
るかな」

松山の浪の心也、我身こす波とは人の心の変しはてたる  
由也、立かへり／＼うらむるより外の事なき也、恨つる  
かなといふに恨てもかひあるましき物をなといふ心あり、  
建立面白き哥也、わたつ海、海人等縁也、『ありそ海は  
海の惣名也、ありその浜わたりなどは越中の名所也』

と見え、次いで同818番は、

ありそ海のはまの真砂と「頼めしは忘るゝ事のかすにそあり  
ける」

浜の真砂ニたとへて思ふ心かとさま／＼人のたのめし事は  
たゝわするゝ事の数也けりと也

と書写している。これに対し、本書同818番は、

ありそ海のはまのまさこと

浜のまさことにたとへて思ふ心なとさま／＼人のたのめし事  
はたゝ忘るゝ事の数なりけりと也、『真砂によせてかはら

す久しからんとたのめし也、ありそ海は海の惣名也、あり

その浜わたりなどは越中の名所也』

と見ゆ。「」圈内に私に両歌の下句等を補ったが、付記す

るまでもなく、底本816番注の『「」圈内は、本書818番注の『』  
圈内の注文に相当し、底本以下諸本の該部は本書の当該部に移  
し訂されるべきである。又、本書に付す傍点部分は底本に欠く  
注文である。

以上が底本との間に於ける顕著な異同であるが、そのほか、  
注文に看る叙述順序の相違―例818番注文―、序注文に於ける見  
消ち有無―又八雲たつの哥より……但不明也―の相違が纒かに  
散点するにとどまる。上記の掲出箇処をのそけば、その本文上

の差異は微細な点にすぎず両本はよく同系本たることを具に示している。

しかし、猶本書には以下のごとき諸本に所見なき本文同筆の墨書増注と稍々年次を降る朱墨両筆の追記―この朱又は墨書は再時に亘るか、濃薄二種あり―とが見出される。

前者の、その主なるものは「六巻抄」である。二・三を例示すると、

山橋牡丹也紅ニテウツクシキ花也六「此説難用」―「圈ハ

朱、卷十三668欄外

桜麻ノ、梅桜トハ何云ツト問レンニハイカ、六注―卷十七892欄外

三津と書トモミツトヨミナラヘリ六注「此説不可用私考」

―「圈ハ朱、卷十八973欄外

モ、シキ六注モ、シキ六注―同1000本行・欄外

等略欄外に書写されている。但し、朱書の「六注」に対するコメントは本文筆跡と異なるものである。

しかし、次のごときは、

六注ニ三人の翁トノミアリ誰トハ不知ト被仰之也―卷十七895と、本行に記し、一見「古聞」本文と紛らわしき処も見出され

る。

又、後者の朱墨両筆の追記は主に注文中の例歌略記を補うものと、私勘・私案等を書入れたものであり、「古聞」元来の本文ではない。既述したごとく本書書写後の補入とみるべきである。例えば、

新古雑中 天川……ことゝはん紅葉のはしはちるやちらす

や(朱) 卷四175注行間

新古秋上 高円の……そゝや木からしけふ吹ぬらし(墨)

元敏(同上)卷四187注行間

のごとく、省略句……部分を掲示したものにはすぎない。

又、同様な朱墨両筆の書入れには、

哀傷部ノ終ニ有之在原滋春哥也(朱)―卷九412注行間

万葉には元興寺とあり(墨)―卷四144注行間

此二見播磨也ト八雲ニ有可用之ノ但馬温泉ノ道也弁儀―同

416注「但馬云々」ニ左右傍記アリ、筆跡前者ト異リヤ、細字

又、「私考」、「私」と明記し、私勘を付記するものとして、

私考ノ廿四首ハ自是末此卷終迄ノ数也(朱)、是迄ハ廿三首

朔日ニ講儀之由稿ニ書付有之(朱)―卷十444注尾細字補

私考ノ十月タルヘシ物名十月一日二日両日也其上宗祇ヨリ



肖柏へ始ノ印可文明十三年十月三日トアリ此時ナルヘシ

(朱) — 卷二十卷首細字補

等が散見する。墨筆の箇処を除きいづれも稍々細字にして別時別筆のごときである。

如上縷述にすぎたるも、本文同筆補入に交え、朱墨追注、私考等の書入れに見る各時期・加註者筆跡の相違など、その一部は弁別可能なるも微細に入れば既に判じがたく加註増補本として稍々紛乱を招くの難も危懼されるのである。しかしながら猶よく宗訊本本文を相補す唯一の伝存本であるといえよう。

本書には、他本に見ぬ次の二種の押紙が貼付されている。本文とは別筆ではあるが、両紙はそれぞれ別時にして異なる書跡のごとくである。

その一枚は、第二冊卷九末、書状反古裏に、

後土御門  
文明十八 十九年ニ改元  
于時柏齡実四十四才(見消ち記述ハ、凡四十五六、トス)

延徳三 明応九 後柏原 文龜三ノ永正十七 大永七

文明十八ヨリ正徳ニマテノ凡弐百廿七年

永正三頁真存法師伝受ハノ弐百七年ニ成

別ニ文明十六年聞書二札在之

と誌している。正徳二年の追補でもあろうか。

その二枚は、第六冊仮名序の後に、

古今集抄古注二卷ハ伝来之秘抄ニテノ題号ナシ文明十六年

臘月六日始之云々ノ但採文明十六上下之ニ字号文六抄訖

物名二十卷ハ文明十八年二月六日又始之云々

仮名序六義之注ハ祇公ノ書ヲ写スト也トノアリテ私聞書ヲ被加タリ以之コレヲ思フニノ牡丹花抄出トミヘタリ宗珀宗訊兩人ノ問ニノ肖柏演説在之タル抄物ニヤ累代伝来之ノ五卷抄古聞ト云三卷聞書ニハ少々相違ノ事ノアリ見合テ了解スヘシノ長□亭

と書留めている。前紙に、「別ニ文明十六年聞書二札在之」の記が見えるところから、同記の聞書、本記云略抄「文六抄」の解説であるが、猶その前後を審らかにしない。又、その筆者「長□亭」についても未詳である。

印記 「駕竜ノ閣章」(単郭方形)、「読杜ノ艸堂」(単郭方形)

—各冊巻首、「晚晴ノ吟社」(単郭方形)、「凌ノ云」(単郭方形)

形) — 各冊末に、各朱印を捺している。

尊経閣文庫蔵「古今和歌集聞書」(外題) 天文十

五年宗訊自筆加証奥書本

袋綴、三冊。金泥老梅竹葉水辺草花等模様、上下辺に金銀箔砂子散しの後補表紙、竪二十七・八糎、横二十一・一糎、見返し、菊花文空押金紙の稍々大振な冊子である。料紙は薄手の斐楮交漉紙。每半葉十二行。字面高サ約二十四・五糎、釈文一字下げ、諸本同じく歌は上句を掲げ、詞書・作者名は多く省刪し、釈注に応じ略記している。墨付本文、第一冊三十六丁、第二冊八十二丁、第三冊百二十丁。


外題、第一冊左肩に、「古今和歌集聞書

湖信齋宗訊筆  
牡丹花門弟古今伝受と

別筆にて打付書している。第二・三冊には記せず。又、その包紙には、中央に「古今和歌集聞書 宗訊筆三冊」と前者とは異筆の書名を記し、その右肩には「筆者之様子吟味」と細書している。

ことの序でに、本書の書写者に言及すると、本書に添えられている極札には、その包紙に「宗訊古今集聞書」と誌し、

(表) 堺連哥師湖信齋宗訊 牡丹花夢庵門弟  
古今和歌集聞書三冊 山 (墨印)

(裏) 古今和歌集聞書 全部三冊  
奥書各別有 己未二  (墨印)

と記す。古筆鑑定家印から了榮又は了祐のいづれかが予測されるが装訂改装の様子から後者了祐かと想定される。又、第三

冊終葉裏にも右極札を受けてか、

一古今集聞書 三冊 / 宗訊筆

堺連哥師 河内屋号湖信齋 / 牡丹花弟子則牡丹花 / ヨリ古  
今伝受仁也

の一紙―時代は更に降り―が貼付されている。共に本書新装訂後のことであるのは云うまでもない。

しかし、本書の奥書の処にて述べるごとく、宗訊の筆跡は、「天文十五年二月八日」の竹田治房註四への書写印可の加証奥書部分のみであり、本文等はすべて別跡である。同奥書よりすれば

伝受者竹田治房の書写ということになるのであろう。本書も又綱紀公菟書の一本であったことと思われる。

内題は、仮名序・真名序各巻初に、それぞれ「古今和歌集序聞書」、「古今和歌集序聞書 以宗祇本写之」のほかは、古今集各部立を略記して標目としている。諸本あわせ既述一覽したごとくである。

本書の巻第編成は、その新装訂の際であろう、従前の次第を改め、流布古今和歌集に准拠したものとされ、同時に各奥書に於ても当該位置を改綴した処も看取されるのである。例に倣い巻冊次第を次掲するが、併せて奥書一覽第二表に拠り脚欄に

国会本「古聞」巻冊と対比し該番号を付記することにする。

第一冊 仮名序 同尾に①～⑥、但し⑤⑥は本書のみ―国本第六冊仮名序尾⑫～⑬

第二冊 古今二字事・和歌事・春哥上ノ物名 同尾に⑦～⑫  
―国本第二冊巖・旅歌尾①～⑥

第三冊 恋歌一ノ大哥所御哥等・真名序・初作詩賦七言之志 雑躰尾に⑭、真名序尾に⑭～⑲、但し⑱・⑲は本書のみ―国本第四冊雑躰尾⑦・⑧、但し⑧国本追記奥書、第五冊真名序尾⑨～⑬、国本は本書⑯に対応する奥書を欠くも国本独自の⑬・⑭の追補奥書を存す。

と改編され、各奥書は脚註のごとくに対応している。殊に諸本別冊に排置した仮名序・物名・大哥所御哥・真名序が集巻第序に抛ったがために、本来巻九巖旅歌注の奥に存すべき奥書―本書⑦～⑫、国本①～⑥―が巻十物名の末に排綴する結果となつてゐるのが留意されるのである。屢々繰返してきたごとく、本聞書の講説次第は巻一より巻九、巻十一より巻十九と順次し、秘巻仮名序・物名・大哥所御哥と継ぎて終了して、真名序注は宗祇本を以って書写するにより全講釈は完備するのである。従つて、その巻第編成も本来右記の序次に応ずべきと判断され、

諸本必ずしも同一ならずも、その痕跡をとどめているのである。殊更に本書の改編・改綴を記すのは、その故である。新装時のことであろう。

偕、本書奥書は右記するごとく必ずしも本来の当該巻尾に位置するものではないが、奥書一覽第二表の対照にて明らかなる所に所掲本第三類中、その伝授経由を確認し得る、「古聞」伝本を代表する伝本である。既に国会本解題等に於て両本奥書につき詳記したので略述するにとどめるが、文明十三年九月より受講、同十四年春伝授印可加証―仮名序注尾「春正月」、真名序注尾「三月日」―にはじまる本書の再三に亘る講授・加筆―文明十九年・明応五年・延徳二年・文龜三年―の経過を辿つた本書の清撰過程であるが、それは肖柏聞書として永正三年真存法師―友弘同聴―伝授(⑫)に至るのが、本書併びに国会本に見る略同一奥書の記述である。その間、両本相互の間には多少の異同又別種追補⑧・⑬・⑭―国本解題参照―等を散見するが、その基底を同じくするものである。

本書は、しかし、右の永正三年八・九月友弘同聴の記と共に、第一冊仮名序末に、

此一冊依友弘懇望所許書写也ノ必可禁外見者乎

と、肖柏は宗訊に対し伝授印可の加証をしたためている。本書はその意味では正統なる相伝を示すものといえよう。そして、同序又第三冊真名序末の兩処に、

此冊依竹田治房懇望所許書／写也必可禁外見者乎

天文十五年二月八日 宗訊（花押） 一〇六・一〇九

と重々しく自書している。宗訊六十四歳の頃か、いずれその晩景である。ともかくも、宗訊筆本とされる所以は此処にある。しかし既述したごとく右加証をのぞき他はすべて別筆であり、奥書の記に拠れば書写者は竹田治房ということになるのである。かく所縁をただす本書、国会本を含む第三類本の特徴は繰返し述べてきたごとく、次の三点に概ね要約される。

一、仮名序注が第一・二類本と顯著に異同が所見され、第三類本のそれが何故か寛永版「両度聞書」と殆んど同一本文であること。それは第一・二類が奥書上から堂上家への伝流経過が迎られるに対し、第三類本系は地下又は地方連歌師系への系譜が見出されるのである―更に博搜精査を期するべきであろうが

一、第三類本は、第一類から第二類への過程に於て迎られる

第一類見消ち省節、本文の削除の経過を略其儘に継承していること。

三、又、第三類本は、第一・二類本に於ける釈注本文の叙述次第、いわば文脈の構成を屢々改更して、その本文の整理・整備への動きのごときものが感触され、これもいわば成稿にと歩一歩をすすめているがごときである。あるいは、肖柏晩景の講授のなかに自ずからに生起する余音のごときの結果がしからしめたものでもあろうか。とまれ、本書は「古聞」の伝存本として現在のところ最も信憑すべき書写本である。本書に纔かに看取される瑕瑾は、その近接本である国会本を以て相補い得るところである。

第三類本の特徴をなす上記三点の例示は既に各本中に揭示したので、此処では第二項の見消ち省節部分に於ける例外例として、そのひとつを挙げて筆をおくことにする。本例は第一・二類本は延本をのぞき全てこれを見消ちとするが、第三類本に於ては前例と相違し其儘に本行としてとどめている。卷十物名<sup>447</sup>番歌注である。―掲出文本書

郭公みねの 雲中に見えぬよし也

裏云、悪事をなす人の咎かくるゝ事あり、あらはれぬをた

のみて、悪を不<sup>アラタ</sup>改<sup>メ</sup>、なをあしき事をなせは、つるに身を  
ほろほす也、慎<sup>ツシム</sup>、其独<sup>キトリ</sup>之理也

と。「裏云」以下、第一・二類本見消ちとする。裏説とあり  
て省節符を付すのも稍々訝しくも思われるが、第一・二類本の  
必ずしも錯誤の移符点とも断定し得ず、やはり取捨撰択の意が  
はたらいっていたのであろう。

#### 付記

本書の朱筆箇所は講釈日付・声点・合点・片伝・片・私と極  
く一部付記等である。

又、本書には比較的多くの朱墨両筆付訓・音の傍記を所見す  
る。しかし前者と異り、本書書写時のもの以降の追補が混入し  
一瞥俄かに判別しがたい。時に又、誤訓なども散見し、凡例に  
記したごとく判別困難と共に印刷の繁辱なるにより已得ず省略  
することにした。

又、後補付箋二枚が付されている。即ち、

(イ)「きか<sup>↑</sup>でけ」―卷十六哀傷哥858番第二句「きかけわかるゝ」  
の訂正である。但し現在誤りて同785番歌注に貼付する。

(ロ)「みむろ」―卷二十神あそびうた1074番第二句「むろの山の」  
の訂正である。

註一 天文元年<sup>壬辰</sup>の前権中納言正二位「田向源重治<sup>八十</sup>」(陸

奥出羽さ) 按察使「(公卿補任) であろう。諸家伝に、

宝徳三年誕生、明応八年四月八日権中納言四十九歳、永

正十四年四月十八日正二位々記六十七歳、天文四年七月

廿一日薨八十四歳、等誌す。

註二 永正十一<sup>甲戌</sup>年次、権大納言藤氏は十名を数える。その

中のいづれかであろうが猶未詳というほかはない。強い

て挙げれば、松木宗綱<sup>十七</sup>・四辻季経<sup>六十</sup>・小倉季種<sup>五十</sup>、

の三人となろうか。田向源重治との関係からすれば或は

前二者に絞られるか。いづれにせよ審らかにしない。

註三 養松某なるは未だ全く不明である。底本の宗訊より

竹田治房に伝授の歳天文十五年を遡る十年にすぎず、宗

訊五十四歳とあれば拡きにわたる門弟が予測され、且つ、

養松なる称名も留意されるのであるが。

註四 (一)註六参照

(平澤五郎記)

本稿翻刻篇・校異篇作成に当り、種々の御高配を賜った<sup>財団</sup> 前田育徳会尊経閣文庫、京都大学附属図書館、九州大学文学部<sup>法人</sup> 国語学国文学研究室をはじめ公私の諸図書館機関に記して謝意を  
表する。